

くまもとアートポリス 建築展 2017
「一緒に考え、一緒につくる」
～熊本地震からのすまいの再建～
Exhibition of Architecture KUMAMOTO ARTPOLIS 2017

総 合 記 録

くまもとアートポリス建築展2017

総
合
記
録

くまもとアートポリス建築展2017実行委員会



くまもとアートポリス建築展2017実行委員会

KUMAMOTO ARTPOLIS 2017



総合記録

Exhibition of Architecture KUMAMOTO ARTPOLIS 2017

くまもとアートポリス建築展2017

目次Contents

- 発刊にあたって 蒲島郁夫 熊本県知事 2
- メッセージ 伊東豊雄 くまもとアートポリスコミッショナー 3
- 熊本地震におけるアートポリスの取り組み(タイムライン) 4

くまもとアートポリス建築展2017

- 事業概要 8
- シンポジウム
 - 東京シンポジウム 12
 - 熊本シンポジウム 36
 - くまもとアートポリス推進賞表彰式 60
 - みんなの交流会 62
- 展覧会
 - くまもとアートポリス みんなの家 の 展覧会 64
 - 展覧会オープニングイベント 68
 - こども建築塾 72
- 仮設団地リポートツアー 76
- 協賛事業 80
- 総括メッセージ 桂英昭 くまもとアートポリスアドバイザー 84

参考資料

- 広報
 - 広告 86
 - 印刷物 88
 - 新聞掲載 92
- 実行委員会
 - くまもとアートポリス建築展2017実行委員会会則 98
 - 委員構成、協力・後援団体 100
- くまもとアートポリス年表 102

発刊にあたって

蒲島郁夫

くまもとアートポリス建築展2017実行委員会会長
熊本県知事



「くまもとアートポリス」は、これまで、熊本市下を舞台に豊かな自然や歴史、風土を生かしながら、後世に残り得る文化的資産としての優れた建造物を生み出してきており、今年度で30年目を迎えます。この事業成果を国の内外に紹介するとともに、熊本の建築文化の更なる発展を願い、4年に一度、建築展を開催してきました。

平成28年熊本地震では、多くの尊い命が失われ、住家被害は19万棟を超えました。本県では、熊本地震に伴う被災者の方々のすまいの確保において、「くまもとアートポリス」のコミッショナーである建築家・伊東豊雄氏からの提案をもとに、仮設住宅を木造で整備するだけでなく、従来に比べゆったりとした住戸配置としたり、仮設団地の中央に木造の集会施設「みんなの家」を整備するなど、被災者の痛みを最小化する取組みを進めて参りました。被災した市町村においても、「あんしん」と「あたたかさ」と「ふれあい」のある、熊本らしい災害公営住宅の整備が進められています。

しかし、未だ4万人を超える被災された方々が、仮設住宅などの仮の住まいで生活されています。県では、熊本地震からの「創造的復興に向けた重点10項目」の第一に「すまいの再建」を掲げ、一日も早い被災者の方々の生活再建に向け全力で取り組んでいます。

このような中、「くまもとアートポリス」では、被災地の現状や課題をみんなで一緒に考え、被災者の「すまいの再建」を進めるための道筋を一緒に作り出すことを目的として、昨年9月から約4ヶ月間にわたって「くまもとアートポリス建築展2017」を開催いたしました。

今回の建築展は、アートポリスの事業成果を発信するだけでなく、『「一緒に考え、一緒につくる」～熊本地震からのすまいの再建～』をテーマに、被災された方々が、自宅再建や災害公営住宅への入居など、「すまいの再建」に向けた取組みを安心して進められるよう、みんなで一緒に考えていこうというものでした。

このテーマに基づき、シンポジウム、展覧会、仮設団地リポートツアーや協賛事業など、様々な取組みを県内各地で展開したところ、熊本地震からの復旧・復興に関わられたシンポジウムのパネリストはもとより、県内外から多くの方々に御参加いただき、実り多い成果をあげることができました。これは、アートポリスをはじめとする熊本地震からの復旧・復興の取組みが評価されたものであり、そのような成果を広く発信できたことは喜びにたえません。

今回の建築展が、成功裡に終了することができたのは、ひとえに関係者の皆様の御尽力と御支援のおかげと感謝しています。

「くまもとアートポリス」のような文化運動は、長期間継続してこそ、その成果が現れるものです。今後とも、県民の皆様様の御理解と御協力をいただきながら、更なる展開を図っていきたくと考えています。

最後に、「くまもとアートポリス建築展2017」をまとめたこの報告書が、「熊本地震からのすまいの再建」の参考になるとともに、くまもとアートポリスの取組みが今後起こり得る災害への対応力向上への大きな一歩になることを感じとっていただければ幸いです。

メッセージ

くまもとアートポリス 30年に想う

伊東豊雄

くまもとアートポリスコミッショナー



「くまもとアートポリス」が始まったのは1988年、4代の知事に継承されて昨年30年目を迎えた。さまざまな存亡の危機を乗り越えてこれ程長期に亘って持続出来たのは、事業に関わった関係者の人々、とりわけ県や県内自治体の人々の貢献や、県民の方達の温かい支援の賜である。

アートポリス初期には、国内外のリーディングアーキテクトを招いて革新的な建築を創ることに目が向けられていた。つまり他県に先駆けて先端的な建築を地域に導入しようと試みたのである。しかし、この試みは必ずしも県民に好意をもって受け入れられたとは言い難い。むしろ、地域住民の反発を招いたケースも多々あった。

こうした状況に配慮し、次第にアートポリス事業は地域に密着し、住民と一緒に考え、一緒につくる方向に転換し始めた。バブル経済も終わった90年代後半からは、プロジェクトも小規模なものが多くなったが、木構造の建築が増え、革新的というよりも住民に馴染み易い建築がつくれるようになった。

「自然に開き、人と和す」というキーワードが現在のアートポリスの目指す方向を象徴している。

こうした方向は単にアートポリスの問題ではなく、現代建築のあるべき姿を示唆している。何故なら西欧世界から輸入された近代主義思想に基づく建築が世界的に行き詰まり、地域独自の特異性に根付いた建築が見直される時代になりつつあるからだ。

2011年に起こった東日本大震災はこうした思想の転換を決定的にした。アートポリス初の県外支援事業と

して宮城県仙台市宮城野区の仮設住宅団地に建てられた「みんなの家」は、味気ない団地の環境にあって、一点の灯火として被災した人々の心の支えとなったからである。

翌2012年の阿蘇地域の土砂災害の際には、48戸の木造仮設住宅と2棟の「みんなの家」が建てられ、こうした経験が2016年の熊本地震の復興にはさらに大きな役割を果たすことになった。4000戸余りの仮設住宅の実に15%が木造仮設になり、その中の集会所や談話室はすべて木造の「みんなの家」として扱われた。

「くまもとアートポリス建築展2017」の展覧会で展示された被災住民の方々による写真には、明日に向かって再び立ち上がろうとする人々の強い意志を汲み取ることが出来る。また昨秋から冬にかけて、東京、熊本の二ヶ所で開催したシンポジウムでも、今後のアートポリスの向かうべき方向が熱く語られた。30年を迎えたいま、ようやく「くまもとアートポリス」は、地域に根を下ろした活動となりつつあるように感じられる。

熊本地震におけるアートポリスの取組み タイムライン

2016 平成28年度

2016	4	14	熊本地震前震(午後9時26分)マグニチュード6.5、最大震度7
		16	同本震(午前1時25分)マグニチュード7.3、最大震度7 ※震度1以上4,461回(うち震度5以上7回)2018.1末現在
		21	伊東コミッショナー(C)から応援メッセージ
		27	伊東Cと蒲島知事と対談／「みんなの家のある応急仮設住宅」について伊東氏からの助言をいただくことを確認 仮設住宅やみんなの家の配置計画などを協議
			熊本県応急仮設住宅整備基準を策定(県住宅課)
		29	応急仮設住宅の工事着手／西原村小森第1仮設団地、甲佐町白旗仮設団地
5		1	伊東Cとアドバイザーが規格型みんなの家の設計に着手
		18	規格型みんなの家工事着手／西原村小森第1仮設団地
6	3		応急仮設住宅第1号が完成／甲佐町白旗仮設団地
		17	みんなの家第1号が完成／宇城市当尾仮設団地(規格型集会所)
		18	神奈川大曽我部・吉岡研究室からみんなの家に椅子の寄贈
		28	みんなの家(規格型談話室)第1号が完成／益城町飯野小仮設団地
		29	熊本県測量設計コンサルタンツ協会から冷蔵庫の寄贈
7	11		JA八代等から畳表の寄贈
		12	KASEIプロジェクト第1回実行委員会が開催され、KASEIプロジェクトが発足
		25	伊東建築塾、インターオフィスから椅子の寄贈
		8	8 水上村からテーブル・ベンチの寄贈
		17	くまもと型復興住宅として益城町テクノ仮設団地にモデル住宅を建設を発表(県住宅課)
		23	日本財団わがまち基金を活用した「みんなの家」の整備を記者発表
		29	甲佐町白旗のみんなの家(本格型集会所)工事着手
		31	カンディハウスから椅子の寄贈
10	3		益城町惣領仮設団地に野老朝雄氏・三星安澄氏デザインの仮設団地案内板、ロゴマークを設置
		16	甲佐町白旗のみんなの家(本格型集会所)が完成
		19	高校生が制作した表札をみんなの家に設置
11	14		応急仮設住宅4,303戸が完成
		29	湯前町からの木材の提供を受けた「みんなの東屋」が益城町テクノ仮設団地に完成
12	2		熊本型復興住宅の第1号モデル住宅が完成(県住宅課)
		3	益城町テクノのみんなの家(集会所B2)が完成
		3	益城町木山のみんなの家(集会所A)が完成
		4	カールツァイス社(ドイツ)がみんなの家に桜を寄贈
		10	西原村小森のみんなの家(集会所)3棟が完成
		18	南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家(集会所)が完成
		23	益城町小池島田のみんなの家(集会所)が完成
2017	1	27	小規模仮設団地に日本財団わがまち基金を活用して「みんなの家」を整備することを発表
		2	15 宇土市・甲佐町と災害公営住宅整備の協定締結、アートポリスとしても関与していくことを発表
		17	公費で建設する「みんなの家」84棟が全て完成
	3	1	熊本市現代美術館で「みんなの家」の模型等を展示した展覧会 『3.11→4.14-16アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本』が開幕(4月30日まで)
		8	宇土市境目、甲佐町乙女・白旗の災害公営住宅をアートポリスプロジェクトとして整備することを発表
		9	熊本市青年会館でシンポジウム「仮設を超えて―災害公営住宅とみんなの家―」を開催／来場者120人

2017 平成29年度

2017	4	1	益城町テクノのみんなの家(集会所B2)でHOME-FOR-ALLによる桜祭り、PechaKuchaイベント開催
		27	アートポリスプロジェクト・甲佐町住まいの復興拠点施設公募型プロポーザルを発表
	5	25	益城町テクノ仮設団地みんなの家(集会所B2)横にKASEIプロジェクトによるみんなの砂場が完成
		29	日本財団みんなの家工事着手(熊本市城南町さんさん2丁目、美里町くすのき平、御船町玉虫、同町甘木)
	6	12	くまもとアートポリス建築展2017第1回実行委員会開催
	7	3	甲佐町住まいの復興拠点施設整備公募型プロポーザルの公開審査(二次審査)の開催／ 岡野道子建築設計事務所+ビルディングランドスケープを特定、来場者133人、於:甲佐町役場
		22	熊本市城南町さんさん2丁目仮設団地に日本財団みんなの家第1号が完成
8	8		建築倉庫ミュージアム(東京都品川区)で「みんなの家展」が開幕 9月30日まで
		18	御船町甘木仮設団地、同町玉虫仮設団地に日本財団みんなの家が完成
	30		日本財団わがまち基金を活用して被災した公民館に替えて整備する「みんなの家」を発表
9	2		寺田倉庫(東京都品川区)で『くまもとアートポリス建築展2017東京シンポジウム』を開催
		5	美里町くすのき平仮設団地に日本財団みんなの家が完成
	22		阿蘇市内牧仮設団地に日本財団みんなの家が完成
		25	宇城市御領仮設団地、同市曲野長谷川仮設団地に日本財団みんなの家が完成
11	17		熊本市現代美術館で『くまもとアートポリス みんなの家 の展覧会』が開幕 平成30年1月8日まで
		26	『仮設団地リポートツアー』を開催
12	2		熊本市現代美術館で『展覧会オープニングトークイベント「熊本のいま、そして」』を開催
		10	熊本県庁で『熊本シンポジウム「一緒に考え、一緒につくる」～熊本地震からのすまいの再建～』を開催
		16	熊本市現代美術館で『こども建築塾 ―こんな「みんなの家」があったらいいな―』を開催
2018	1	19	宇土市境目第3仮設団地に日本財団みんなの家が完成
		2	21 宇土市境目第2仮設団地に日本財団みんなの家が完成
	3	7	くまもとアートポリス建築展2017第2回実行委員会開催
		予定	宇土市新松原仮設団地、(大津町)室第二仮設団地に日本財団みんなの家が完成

(2018年2月末現在)



くまもとアートポリス建築展2017

事業概要

シンポジウム

◆東京シンポジウム 「みんなの家、その先へ」

開催日 平成29年9月2日(土) 14:00～17:00
会 場 寺田倉庫G3-6F(東京都品川区)
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会、
NPO法人HOME-FOR-ALL
協 賛 寺田倉庫、大光電機株式会社
参加者 170名

第一部 東北での「みんなの家」をめぐって
[プレゼンター]
平 田 晃 久(陸前高田みんなの家)
大 西 麻 貴(東松島こどものみんなの家)
近 藤 哲 雄(七ヶ浜みんなの家きずなハウス)

第二部 熊本での「みんなの家」をめぐって
[プレゼンター]
原 田 展 幸(日本建築家協会熊本地域会、西原村小森第2のみんなの家)
山 室 昌 敬(熊本県建築士事務所協会、西原村小森第3のみんなの家)
甲 斐 健 一(熊本県建築士会、西原村小森第4のみんなの家)

第三部 熊本での災害復興公営住宅をめぐって
[プレゼンター]
工 藤 和 美(甲佐町白幡地区・乙女地区災害公営住宅)
内 田 文 雄(宇土市境目団地災害公営住宅)
岡 野 道 子(甲佐町住まいの復興拠点施設)

コメンテーター

伊 東 豊 雄(アートポリスコミッショナー、総合司会)
桂 英 昭(アートポリスアドバイザー)
末 廣 香 織(アートポリスアドバイザー)
曽我部 昌 史(アートポリスアドバイザー)
山 本 理 顕(HOME-FOR-ALL理事)
妹 島 和 世(HOME-FOR-ALL理事)
アストリッド・クライン(HOME-FOR-ALL理事)

◆熊本シンポジウム 「一緒に考え、一緒につくる」～熊本地震からのすまいの再建～

開催日 平成29年12月10日(日) 13:00～17:00
会 場 熊本県庁行政棟本館地下大会議室
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
参加者 254名

第一部 パネルディスカッション 『災害に負けない熊本』
[パネリスト]
阿蘇内牧温泉みんなの家
下 村 貴 文(阿蘇温泉病院総院長)
末 廣 香 織(アートポリスアドバイザー)
古 里 さなえ(設計者、九州大学大学院)

大腸肛門病センター高野病院
山 田 一 隆(大腸肛門病センター高野病院院長)
川 島 浩 孝(設計者、共同建築設計事務所)
柳 澤 潤(設計者、コンテンポラリーズ)

熊本県総合防災航空センター
有 浦 隆(熊本県危機管理防災企画監)
小 川 次 郎(設計者、アトリエ・シムサ)

第二部 対 談 『熊本地震からのすまいの再建』
[パネリスト]
伊 東 豊 雄(アートポリスコミッショナー)
荻 上 健太郎(日本財団経営企画部長)
奥 山 恵美子(前仙台市長)
蒲 島 郁 夫(熊本県知事)

第三部 第22回くまもとアートポリス推進賞表彰式

18:00～ みんなの交流会(有料) 会場：ホテル熊本テルサ

展 覧 会

◆くまもとアートポリス みんなの家 の 展覧会

開催期間 平成29年11月17日(金)～平成30年1月8日(月)
場 所 熊本市現代美術館井手宣通記念ギャラリー、ギャラリーⅢ、フリーゾーン
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
共 催 熊本市現代美術館[熊本市・(公財)熊本市美術文化振興財団]
企 画 クライン ダイサム アーキテクト
協 力 NPO法人HOME-FOR-ALL
入場者数 4,996名

◆展覧会オープニングトワイイベント 「熊本のいま、そして」

開 催 日 平成29年12月2日(土) 14:00～16:00
会 場 熊本市現代美術館ホームギャラリー
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
共 催 熊本市現代美術館[熊本市・(公財)熊本市美術文化振興財団]
企画・運営 クライン ダイサム アーキテクト、PechaKucha HQ
運営協力 PechaKucha熊本
参 加 者 70名

○展覧会セレモニー

○ペチャクチャイベント in 熊本

ゲスト 林 田 豊 (益城町テクノ仮設団地写真展参加者)
森 本 ひとみ (益城町木山仮設団地写真展参加者)
中 村 こども (フォトグラファー、展覧会写真監修)
井 手 良 輔 (NPO阿蘇復興への道、東海大学)
片 山 広 大 (チーム熊本、熊本地震ボランティア支援)
sho_maa (デジタルアート作家、益城町復興大使)
く ま も ン (熊本県営業部長)

◆展覧会企画イベント 「こども建築塾 こんな『みんなの家』があったらいいな」

開 催 日 平成29年12月16日(土) 11:00～16:30
会 場 熊本市現代美術館キッズファクトリー
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
共 催 熊本市現代美術館[熊本市・(公財)熊本市美術文化振興財団]
企画協力 クライン ダイサム アーキテクト
講 師 アストリッド・クライン(建築家)
参 加 者 70名(うち小学生19名)

仮設団地リポートツアー

開 催 日 平成29年11月26日(日)
主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
参 加 者 58名(リポーター26名、仮設団地入居者32名)

<甲佐・美里コース>

9:00 JR熊本駅(新幹線口)出発
9:30 県庁出発
上益城郡の復旧・復興状況を視察(車窓)
座談会 甲佐町白旗仮設団地
座談会 美里町くすのき平仮設団地
美里町佐俣の湯(物産館、公衆浴場)
16:10 県庁到着
16:40 JR熊本駅(新幹線口)到着

<南阿蘇コース>

9:00 JR熊本駅(新幹線口)出発
9:30 県庁出発
座談会 南出口仮設団地(大津町)
座談会 南阿蘇村下野山田仮設団地
南阿蘇村の復旧・復興状況を視察
南阿蘇村あそ望の郷くぎの(物産館)
16:00 県庁到着
16:30 JR熊本駅(新幹線口)到着

協 賛 事 業

開催日	イベント名	参加者数
H29.8.1～11.30	(株)肥後銀行県庁支店パネル展	
H29.8.8～9.30	みんなの家展	3,629
H29.8.26	地引き網体験	177
H29.8.27	介護老人保健施設 愛・ライフ内牧 開設20周年感謝祭	612
H29.8.29-9.3	第29回熊本の建築家作品展	326
H29.9.10	くまもとお菓子まつり in 阿蘇	4,000
H29.9.16～9.17	「住まいの耐震博覧会」「木と住まいの大博覧会」	12,925
H29.10.21	賃貸住宅の住環境向上セミナー	209
H29.11.3	「くまもと型復興住宅」モデルプラン展示・相談会	150
H29.11.4	DIYリノベーション start up @キタクマ(北熊)	29
H29.11.11	うき消防ふれあいフェア	1,000
H29.11.16	くまもと県産材の新たな製品づくりに向けた講習会	36
H29.11.25	平成29年度熊本県耐震対策講演会	75
H29.12.1	第30回クリスマス ライティング パーティ	65
H29.12.13	くまもとの力～熊本型応急仮設住宅はじめて物語	09
H29.12.15	災害フォーラム「2016年熊本地震被災地の現状と復旧・復興への取り組み」	40
計		23,482

■ 建築展2017来場者数

	事業数	参加者数
主催事業	6	5,618
協賛事業	16	23,482
計	22	29,100

東京シンポジウム

「みんなの家、その先へ」

コメンテーター

伊東豊雄（総合司会、くまもとアートポリスコミッショナー）

アートポリスアドバイザー（桂英昭、末廣香織、曾我部昌史）

NPO法人HOME-FOR-ALL（山本理顕、妹島和世、アストリッド・クライン）

プレゼンター

●第1部 東北での「みんなの家」をめぐって

平田晃久（陸前高田のみんなの家）× 大西麻貴（東松島のこどものみんなの家）× 近藤哲雄（七ヶ浜みんなの家きずなハウス）

●第2部 熊本での「みんなの家」をめぐって

原田展幸（西原村小森第2のみんなの家）× 山室昌敬（西原村小森第3のみんなの家）× 甲斐健一（西原村小森第4のみんなの家）

●第3部 熊本での災害公営住宅をめぐって

工藤和美（甲佐町白旗地区・乙女地区災害公営住宅）× 内田文雄（宇土市境目団地災害公営住宅）× 岡野道子（甲佐町住まいの復興拠点施設）

「みんなの家」をめぐって

伊東豊雄（以下、伊東） 「みんなの家」は、東北と熊本を合わせると100棟を超え、かなり市民権を持ったと思います。本日のシンポジウムは『みんなの家、その先へ』というタイトルですが、この辺りで「みんなの家」とは一体何なのか、そして、もう一つは「みんなの家」を通じて、建築家はどのような仕事をする人たちなのか、考えてみたいと思います。「みんなの家」は、仮設住宅などに住んでいる被災者の方が集まって、共有できる共同の小さな場所を提供しようというところから始まりました。東北で16棟、熊本では90数棟の「みんなの家」が使われています。この「みんなの家」は、最小の集いの場として、公共施設の一番小さな形ではないかと思います。それだけに、最もプリミティブな公共施設と呼ぶことができるのではないかと、議論していただきたいと思います。

また、建築家についてですが、ふつう依頼主から設計を請負うと設計者が図面を描き、施工の方に実現していただくことになります。これがうまくいけばいいんですが、なかなかそうはいかない。設計者と依頼主の間もスムーズにいかないケースもあるし、設計者が提案すると「こんな手間のかかる仕事をやってられるか」と施工者との間でもトラブルがあります。本来設計者は依頼主の依頼を紙にまとめ、現場を監理する役割ですが、必ずしもそうは言えません。それはたぶん施主の意を受け、設計活動を行ってそれを実現するというのが第1にあるわけですが、一方で建築家は「理想の社会というのはこういうもの」とその在り方をいつも問い続けます。理想の社会を取るか、作品として自分を表現したいか、この間で必ずしもスムーズにいかない関係性が生じています。私は、「みんなの家」という特殊な設計を通じて、この問題をどのように考えていけばいいかを考えています。今回、建築家の使命を考える場として、非常



伊東豊雄アートポリスコミッショナー



にいい機会ではないかと思っています。「みんなの家」が、通常の設計活動と異なるという点ですが、一つは被災者支援という社会的というか、公共的な役割を担っていることです。もう一つは、通常、公共建築は自治体を通じて利用者と接点をもちますが、「みんなの家」は、利用者と設計者が直接対話しながら、時には「一緒になってつくっていく」というシナリオがあります。また、設計者にとっては社会奉仕になります。通常の設計活動と異なりビジネスではないという、特殊な状況もあります。そういったことで、「みんなの家」を総括すると同時に、「その先へ」は大変重要なテーマだと考えています。

第1部 東北での「みんなの家」をめぐって

伊東 「みんなの家」は東北と熊本では若干状況が異なります。東北の「みんなの家」では、自治体はあまり積極的な

対応はありませんでした。ですから、我々建築家が自発的に「こういうものをつくりたい」といって、直接被災地の仮設住宅の方に提案し、つくり、また、そのためのお金を集めました。それでは、東北の「みんなの家」に関わった平田晃久さん、大西麻貴さん、近藤哲雄さんお願いします。

陸前高田のみんなの家をめぐって

平田晃久（以下、平田） 私は、岩手県陸前高田市にある「みんなの家」に関わっています。このプロジェクトは、伊東さんを中心に乾久美子さん、藤本壮介さん、写真家の畠山直哉さんと一緒に行い、また、ヴェネチア・ビエンナーレに設計のプロセスを展示するということから始まった特殊な経緯があります。最初は、何とか自分たちがやってきたことを結び付けようと、数々の空回りをくり返し、どうしたらいいのかわかりま



陸前高田のみんなの家(photo:Naoya Hatakeyama)



平田晃久氏

せんでした。被災者へ何かしたいという気持ちはあるのですが、本当にうまくいくのか、不安でした。その不安が的中したという感じで、その年の正月明けに、もう1回被災地に行きました。すると、被災地で菅原さんという方が、町の中心に敷地を見つけてきたということで見に行くと、敷地の裏には、被災後にみんなが集めたという大きな体育館があり、町がよく見渡せる場所でした。

菅原さんが言うには、被災後、この体育館に全然知らなかった方が集まり、本当に大変な中、そこで皆さん仲良くなったそうです。ですが、仮設住宅に行くと、そこではまた別な方と何となく仲良くなります、と。本当につらい状況だったと思います。そして、菅原さんは「ここには、体育館に集まった人々が、もう1回、集まり会えるような場所をつくるべき」と、非常に説得力のある話をされました。そこで初めて何をしたらいいのか議論が始まりました。

敷地には、立ち枯れた杉が一面にあって、津波にやられたものは茶色くなっています。この木は使えるということで、丸太を使った案がだんだん膨らんできました。私たちがこだわったことは、ひとつひとつ説得力のある状況を積み重ねることです。例えば、丸太を使うということも、その生えているそのままの状況で、何かそれに近い状況で使うのがいいのではないかと考えました。

先に個性があって、それを表現するというより自分たちの考え方が作業をしている中で最もらしいものを、何か必然的に、間接的に浮かび上がっていくような経験です。

その後、その過程をヴェネチア・ビエンナーレで展示し、パヴィリオン賞をいただくことになります。

そういう経験をとおして、本当に原点から、どこにどういった集まりがあるべきなのか、というようなことから近づいていって、建築家はその原点の部分に最初から関わっていく経験ができました。

個性というものも、最初からそこにあるというより、浮かび上がってくるもので、3人の中でコラボレーションが起こっ

て、成立したという、非常に不思議な経験でした。

最近、群馬県で太田市美術館・図書館をつくったのですが、ここはSUBARUの町で有名で、人口は多いですが、駅前は何人も歩いていません。その駅前を復興しようという目的のために人々が集まって共同で設計をするという経験をしました。そのプロセスの中で、最初の案から、かなり崩れたようなところまでいってしまった。それは、何か自分たちが関わることによって、町にあるものを何か浮かび上がらせているような経験です。建築家が、公共の場所をつくるときの関わり方として、「みんなの家」の経験があったからこそ、こういった建物の設計ができたと思っています。

東松島のこどものみんなの家をめぐる

大西麻貴（以下、大西） 私は、宮城県東松島市にある「こどものみんなの家」を紹介します。伊東さんと一緒に設計したプロジェクトです。敷地は「グリーントウンやもと」という当時200世帯程が住んでいた仮設住宅です。そこには子供がたくさんいて、遊べる場所をつくりたいということで「こどものみんなの家」になりました。伊東さんと一緒に何度も現地に通い、お話を伺って、案を育てていきました。

最初の案は、大きい屋根が一つだけかかっていて、真ん中に掘りごたつがある、とてもシンプルなものです。敷地の隣にある既存の集会所は、おじいちゃんやおばあちゃんなどいろんな人が集まる場所で、そこと縁側でつなげる計画です。ですが、実際に子供たちの遊んでいる様子を見てみると、仮設住宅の中の側溝や、ちょっとした階段を遊び場にしたりと、いろいろな場所を見つけて遊んでいるなと思いました。施設という感じで「みんなの家」ができるというよりも、子供たちの場所に「家」がくつつくような、小さい町のよな、車輪があって動くような、そういったものはどうかと別な案ができてきました。一つ一つの家がバラバラにできて、動かせたら面白いかなと思いましたが、話を伺うと、普段仮設住宅に住んでいると、やっぱり安心できるような、地

面にくっついている場所で過ごしたい、という話もあり、案をつくりかえていきました。その中で、子供があだ名を付けなくなるような、さまざまな家のシルエットとか、例えば、丸い頭の家だったら「ねぎぼうず」というあだ名を付けたり、とんがり屋根の家など愛嬌のある形を手探りしていきました。最終的な形は、3つの特徴のある家が合わさった、小さな町のような「みんなの家」になりました。1つは、「ねぎぼうず」って呼んでいて、車輪が付いて、動かすことができます。既存の集会所とは、広い縁側や細い縁側、ちょっとしたコーナーがある縁側で繋がっています。

内部はとてもシンプルにつくっています。大きい掘りごたつの部屋があり、子供たちが一緒におやつを食べたり、大人と一緒におしゃべりができます。一番背の高いとんがり屋根のところには、時計ストーブがあって、おやつをつくったり、お母さんたちが簡単な食事をつくれる場所になっています。

なにか思いとしては、この仮設住宅で数年間時間を過ごすと思いますが、10年後20年後になって私の子供の時はこんな風だったなと思い返す時に、仮設住宅を思い出すと同時に、この「みんなの家」が「こういう家」だったな「こういう場面があったな」と思い出してくれるような、そういうシルエットをイメージしました。

現場が始まると、当時、私たちの事務所は、私とスタッフの二人しかいなかったのですが、事務所を仮設住宅内に移して、みんなで一緒に住んで半年間、現場に常駐しました。そこでは、地元の方とお酒を飲んだり、カラオケをしたり、毎日現場の掃除をしているとちょっと声をかけてもらったり、そういった中で少しずつ建築ができていくという様子を身近に見て、とても大きな体験でした。

ちょうど、クリスマスの日のことです。本当は現場がギリギリで全然間に合わない状況でしたが、仮設住宅のお父さんたちが、子供たちにこの家をプレゼントしたいということになりました。先行して「ねぎぼうず」の家をプレゼントして、

お父さんにトナカイになってもらって、中にサンタクロース役のお父さんが建物に乗って。実は危ないので、子供は乗ってはいけないと断ったのですが、掃除機に吸い込まれるように子供たちが全員乗ってしまっ。その風景もお祭りみたいというか、家が動く面白さみたいなものをすごく感じました。

私は「みんなの家」を通して、復興の現場に密着して「話ながらつくる」ということの面白さが、すごく自然に自分のものになっていった気がします。現在、私たちの事務所は日本橋の下町の八百屋のような空間に移転しました。そこで思い出の場所をつくりたいという気持ちだったり、その後に公共建築をつくる時にも、どうしてそれが必要なのかということをはながらつくっていくことの面白さだったり、可能性というものをすごく感じています。

七ヶ浜みんなの家きずなハウスをめぐる

近藤哲雄（以下、近藤） 今年の7月に完成した宮城県宮城郡七ヶ浜町にある「みんなの家」を紹介します。七ヶ浜町では、レスキューストックヤードというボランティア団体が震災直後から支援活動を行っていました。その支援活動の一環として、プレハブの仮設商店街の一室で子供たちが自由に遊べる場所「きずなハウス」を運営していました。その仮設商店街がなくなってしまうことになり、きずなハウスの存続を願う子供たちや町民たちのために「みんなの家」をつくることになりました。

七ヶ浜町は仙台のすぐ近くの半島にあり、7つの浜があることから七ヶ浜町という地名なのですが、「みんなの家」はちょうど7つの浜の真ん中あたりにあります。敷地は元々駐車場として使われていたのですが、だだっ広いアスファルトの中に建物をぽつんと置いても、子供が遊びまわる光景はあまり想像できませんでした。そこで、建物だけでなくこの場所全体を「みんなの家」と呼べるような場所にしようと考えました。



東松島のこどものみんなの家



大西麻貴氏



七ヶ浜みんなの家きずなハウス



近藤哲雄氏

7月21日にオープニングを迎え、町の人たちが大勢集まってくださり、みんなで盛大にお祝いをしました。町長さんが挨拶に来てくださり、工事に関わってくれたたくさんの人たちもお祝いに駆けつけてくれました。周辺のお母さんたちはボランティアでカレーをつくり、ピザ窯ではお父さんたちが海や山の幸を使ってピザを焼いてふるまってくれました。子供たちは建物の中も外も関係なく走り回って遊んでいました。この「みんなの家」はどこからでも出入りできるように作ったのですが、みんなが自由に使ってくれているところを見て大変うれしく思いました。その後も何度か現地に行ったのですが、8月は夏休みということもあり、毎日多くの人たちが「みんなの家」を使ってくれているようでした。

外構や植栽等はこれから徐々に進めていく予定です。野菜や果物を育てて地元で保存食を作っている方たちと連携していくような計画もあります。みんなで種を植えたり苗を植えたりして、10年、15年はかかるかもしれませんが、子供たちの成長に合わせて一緒に成長していくような「みんなの家」になってほしいと思っています。

東日本大震災からもう6年が経ちます。最初の頃につくられた「みんなの家」と比べると少し趣が違うかもしれませんが、それぞれの人たちが自分の場所であると思えるような「みんなの家」になってくれることを願っています。

■ 第1部 ディスカッション

伊東 ここから、コメンテーターも含めディスカッションをはじめます。先ほど平田さん、大西さんは、「みんなの家」に関わったことがその先に影響していると、特に平田さんの場合は、公共建築でみんなで話し合いながらつくっていくというプロセスを、その後の経験に活かしているという話がありました。太田市美術館・図書館で、より膨らませたというようなことがあるわけです。コメンテーターの山本さん、アストリッドさん、妹島さん、ご自分の経験を踏まえて、少し

お話しをお願いします。

山本理顕(以下、山本) 「みんなの家」は、伊東さん、妹島さん、そして内藤廣さん、隈研吾さん、僕の建築家5人で東日本大震災の後すぐに「帰心の会」を発足したのがきっかけです。その時に伊東さんが『「みんなの家」をつくったらどうか』と早い段階で言ったんです。みんな大賛成で、それから「みんなの家」をつくって、それが広がりました。最初は寄付金集めで、たくさん宣伝をして、みんなで寄付を集めてという感じで、実際に始まったのが1カ月後くらいです。最初は、何をしたいか全然分かりませんでした。伊東さんもそうだったと思いますが、テレビを見ていても、本当に、歯がゆいというか、少しでいいから早く被災地で何かしたい、というのが僕たちの気持ちだったと思います。

私たちは岩手県釜石市の平田地区というところで「みんなの家」をつくりました。「みんなの家」はテントでつくりましたが、冬はかなり寒いので、スタッフと一緒に内側に断熱材テントをもう一枚張りに、年2回ぐらい現地に通っています。たぶん、他の建築家も同じじゃないかと思いますが、これだけの数の「みんなの家」が、今後どうなるのが非常に気になります。平田の「みんなの家」の場合は、復興住宅の近くに移設しようとしています。こういう建物(みんなの家)が、日常の地域社会の中にあるというのが、実は非常に大切ではないかと思っています。復興住宅がただ復興のための施設じゃなくて、みんなで「これから新しい世界をつくっていく」というきっかけをつくるような、そういうことです。

アストリッド・クライン(以下、クライン) 建築は、人にエモーションを起こさせるように思います。もちろん、建築は雨の日や寒いときに守られているとか、そういった当たり前の機能がありますが、人々の心にも働きかける機能があることを、多くの人は理解できていないわけです。ですが、震災以降「建築にみんなが守られている」という感じや「希望を分かち合う場所」であるとか、エモーションに対する意識が高まった気がしています。

伊東 クラインさんの言いたかったことは、簡単に言えば、我々が特に公共建築で要請されているのは、機能というか、いろんな条件があって、それに対して、安全で、管理も十分できるということが問われるわけです。しかし「みんなの家」はあまり自治体を介さないで、その分機能ということも問われない。だから、その分、何をやっていいか分からないということもある一方、エモーションと言われましたけれども、もっと別の大事なものがあるはずだということが、この小さい中に込められているのだと、それを大きなプロジェクトでもやるべきではないかというコメントだったように思います。

妹島和世(以下、妹島) 3点ほどあります。まず、「みんなの家」を被災された方々と話し合いながら作るプロセスを通して、作るっていうのはそういうことなのかと気づかされました。つまり、「みんなの家」はとても小さいプロジェクトですが、みんなで暮らしていく社会、環境、を自分たちで作っていけるのだと気づかされたということです。それまでそんなことができるなんて想像もできませんでした。初めは特殊な状況だったからと思っておりましたが、だんだん、東京だってできるはずだ、できたら素晴らしいと思えるようになって来ました。2つ目はあまりうまく言えませんが、伊東さんがおっしゃった作品ということと社会的であるということが、みんなで作るプロセスでは何か矛盾しないものである可能性を感じています。考える人と使う人という分け方がない場合、あったらいいなと思うところから作ること、そして使うことがずっとスムーズに連続するあり方があるのではないかと思います。3つ目は、それに関係していますが、私たちはNPO(HOME-FOR-ALL)を作ったわけですが、それは建物の完成で終わりではなくそれからのことも自分たちの作るという活動範囲に入ってくるということを模索しているのではないかと思います。

伊東 僕らが宮城野区でアートポリスと一緒にやったときに、普段どおりの建築をつくっちゃまずいんじゃないかな、

とすごく思っていました。

例えば、普段どおりの住宅をつくります。そういう住宅を東北に持って行って、「これいいでしょ?」って言えますかね。実際に利用する方と話をすると、縁側が欲しいとか、囲炉裏が欲しいとか言います。

意見を反映して図面を書いていると、さまざまな方が「伊東さん。それでいいんですか。」みたいなことを言う。「お前が普段やっていることと、このギャップはどう考えているんだ」みたいなことも随分言われました。でも、皆さんの話を伺っていると、そんなに何か齟齬(そご)がないような気がしています。平田さんもそれが公共建築の実になっているということもあるし、大西さんも話し合いでつくっていくプロセスというのは、後から得るものがあるとおっしゃっていましたね。

平田 そうですね。作品なのか、作品じゃないのかっていうような議論が当初あって、そのどちらでもないというか、作品であること自体を否定する必要はないんじゃないかな、と最近は感じています。両方とも、多層的に見えるようなものの方がいいかなと思っています。だから、それがどちらかに偏ってしまうよりも、なにか、うまく共存できる在り方が、新しくあり得そうな気がしています。

伊東 どんな公共建築でも、コンペが取れたらそれでいけるはずだという自信があるといってもいいですかね。

平田 自信というか、面白いんじゃないかなという予感というか、という感じでしょうか。そういう感じはあると思います。

大西 私は、伊東さんの「宮城野区のみんなの家」を初めて見たときに「ああ、そうだよな」と思いました。何かこう、建築家の心がそのまんま出てきたみたいな、そういう建築だなと思いました。なにか建築も人もそれぞれをまとめるんではなくて、例えば、料理の場合でも、すごく手が込んだ料理よりもお味噌汁の方が「ああ、おいしい」ということがあるみたいな感じで、そのときに「ああ、こういう建築が



山本理顕氏



アストリッド・クライン氏



妹島和世氏



宮城野区のみんなの家(photo:伊藤トオル)

良かったな」というような、みんなで共有できる、なんかそういうものがあるんだなと思いました。寄り添うってということなのか、何かそれが別に、お味噌汁の中身がどうなのかということじゃなくて。一緒に歩いていとか、一緒にいとか、考えるということで、建築家自身が変わってきて、自然とその心から出てくる、建築が変わるみたい、そういうことなのかと「みんなの家」をとおして感じています。公共建築でも、どうやったら自分自身がその状況に寄り添えて、自分が変わって、どういうものが出てくるかということを思っています。そういう意味では、個人が出てくるものとしては、作品とも言えるだろうし、みんなが「ああ、そういうものか」という反応にもなるだろうと感じています。

平田 履歴評価されるっていうようなつくり方があると、陸前高田で思ったんです。ひとつの形式で、どんなにうまく調整したとしても、全部意識が通り過ぎていくものは、やっぱり単一的に見えて、それがより作品としては、すごく自立性が強く見えるのですが、どこか他のものを準備しているようなところを感じていて、もう少し議論することがあると、その後、その疑惑などに対して、突き詰めていくというような決まり方があるような気がして。太田ではそういう作り方をしていますが、何か単一的な方法論じゃない方法論が見つかるかもしれないという、感覚を持っています。

伊東 大西さんは、現在公共建築に携わっていますが、そこで、そういうプロセスが生きてきているというふうにお考えですか。

大西 そうですね。最近は建築のこと以外も考えるということが増えているような気がします。例えば、まちづくりの会議も一緒にやってくださいと頼まれた時には、「いいですよ、みんなで一緒にやっていきましょう」となって、ポスターをつくらうとか、何かいろんなことを一緒にやっていきながら、でも、それは別に建築に直接つながっているかは分からないですけど、そういう間で、友達になったり、何でもないことに気付くことが絶対あるんじゃないかと思っています。



曾我部昌史氏

す。

伊東 話を伺っていると、やっぱり建築家は空間をデザインするものだと思います。1回それをつくってしまったら、特に日本だけではなく、世界中どこでも、変更するのは悪だという思想がありますよね。

変更するのは悪いことだと。公共の仕事では、特に変更しにくいということがあるんですが。

先ほどの話を伺っていると、時間をデザインするのも建築家の仕事だということだと思います。そこが今後の可能性の大きなところで、自治体の方がその点をどう認識されるか、あるいは建設会社の方がどのように認識されるのかに関わってきますよね。そこで「コンプリート」という概念は、これから建築家が克服しなければならない問題だろうという印象を受けました。

曾我部昌史(以下、曾我部) 非常に共感できる部分がありますし、いろんなことを同時に考えながら、最終的に一つのものが出来上がっていくことは、平田さんの説得力のある状況の気づきという点があるかと思います。近藤さんは先ほど設計プロセスについてはあまり説明されなかったもので、その辺を少し聞いてみたいと思います。NPOも関わっていたので、その辺も含めてもう少しプロセスの話をしていただければと思います。

近藤 もともとNPO団体の人が「きずなハウス」という子供が遊ぶ場所を運営していて、そこは毎日学校帰りにたくさんの子供たちが集まる大人気の場所でした。「きずなハウス」の場所がなくなってしまうという時に、子供たちも含め町民の皆さんが署名活動をして、町長さんに「ぜひ存続させてください」という要望を出し、それに応えるために「みんなの家」をつくることになりました。

すでに運営をしている方がいらしゃったので最初から基盤がしっかりしていたということと、みんなが共有できる「きずなハウス」というイメージがあったという点で、他の「みんなの家」とは少し状況が違うかもしれません。そう



いった背景があったので、運営するNPOの人も、役場の人も、町の人たちも、始めからスムーズにみんなで議論をすることができました。議論を重ねていく上でもワークショップでも前向きな意見が多く、全員でひとつの場所をつくっていくというプロセスを共有できたのは大変良かったと思います。

伊東 発災後の2011年とか12年に僕らが右往左往していた頃に比べると、もう少し冷静にものを見直して、もっといいものを考える余裕ができてきたような印象を持ちました。

第2部 熊本での「みんなの家」をめぐる

伊東 熊本では、先ほどの東北とは相当大的な違いがあります。熊本では、50戸仮設住宅をつくると、そこに1棟、集会所をつくり、全て木造の「みんなの家」としました。これができた背景には、熊本県の蒲島知事の思想がすごく影響しています。また、皆さんもご存じと思いますが「くまもとアートポリス」という事業を30年に渡って続けています。蒲島知事から「仮設住宅については、アートポリスを中心としてやってください」という依頼もあり、熊本では県という自治体が音頭を取って、「みんなの家」を進めてきたという経緯があります。

その背景には、先ほど紹介した「宮城野区みんなの家」を、我々がアートポリス(熊本県)に提案して、それを蒲島知事が「いいじゃないか」と背中を押してくれて、東北で第1号の「みんなの家」ができたという先例があります。2012年



熊本地震で整備した応急仮設団地(阿蘇市北塚(木造))

に熊本県の阿蘇で水害があった際も、知事が音頭を取って48戸の木造の仮設住宅をつくりました。その時も「みんなの家」を木造で、アートポリスが主導してできたという経緯もあります。桂英昭先生が中心になって高田に、もう1棟を末廣香織さんが池尻に、計2棟の「みんなの家」を木造でつくりました。現在では仮設住宅はありませんが、「みんなの家」は移転され、継続して使われています。

そのような熊本で2016年4月に2度にわたって大きな地震があったのです。

熊本地震があつてすぐに蒲島知事が「[みんなの家]を木造でつくり、仮設住宅もできるだけ木造でつくりたい」とおっしゃって、できる限りのお手伝いをさせて頂きました。

4,303戸の仮設住宅のうち683戸(約15%)が木造で実現しました。今までの鉄骨プレハブの仮設住宅とプランの違いはそんなにありませんが、佇まいは断然木造の方が温かいし、居住環境も良い。そして「みんなの家」も84棟を木造でつくりました。

それから、1点だけ特筆しなくてはならないのは、末廣さんが主導してくださって「KASEI(かせい)※」という大学のグループでボランティアの学生たちが、仮設住宅に花壇をつくったり、建物が出来上がってからもおじいちゃん、おばあちゃんを訪問してくれたり、さまざまなイベント活動に関わっている取組みがあります。

それでは、熊本の「みんなの家」に関わった原田展幸さん、山室昌敬さん、甲斐健一さんをお願いします。

西原村小森第2のみんなの家をめぐるって

原田展幸(以下、原田) 私は西原村の小森第2の「みんなの家」を紹介します。西原村の3つの「みんなの家」は、建築関係団体である日本建築家協会(JIA)、建築士事務所協会、建築士会にそれぞれ設計の依頼があり、また、県内の若手の建築家を推薦してくださいということでした。私はJIAの熊本地域会ですが、かなり人数も若手も少ない状況

で、どうしようかなということで、設計者名にkulos(クロス)とありますが、地震が発生する半年ぐらい前に、県内の若手も頑張らなくてとはと、10人ほど集まりました。地震発生後もいろいろと活動していたので、kulosで「みんなの家」をやることにしました。伊東先生からは「みんなの家」とはどういうものか考えてほしい」と言われましたので、仮設住宅で利用する方と一緒に考え、形を捉えていくことにしました。皆さんもお気付きかと思いますが、熊本の「みんなの家」はすべて切妻です。切妻屋根ということで、形は割り切って、建築家のやるべきことは、他を検討した方がいいとの方針で進めました。ですが、利用者とゼロから一緒に考えるとといっても、スピード感は求められ、2回しか住民との意見交換会ができず、1回目は意見を聞いて、2回目には案をまとめるという感じです。私たちは、まずイメージを共有しようと、「縁側のある暮らし」というキーワードで、意見交換会を始めました。切妻屋根に縁側を周囲に回して、あとは柱が立っているだけで、他は何もないというプランで意見交換会をやりました。縁側があると、ということができるとか、いろんな写真を見てもらい、利用者に想像を膨らませてもらいました。また、大西さんや山本さんの東北の「みんなの家」の写真を見ていただきイメージを共有しました。

昨年12月に無事完成しましたが、子供たちが自由に、どこからでも出入りできるようにしたいと意見もあり、だいたいそういった形になったと思います。外の縁側もですが、内側にも座れる場所を作って、いろいろな人たちがこの建物を利用してくれたらいいとの思いでつくり、実際、子供たちが、絵を描いたり、いろんな使われ方をされていて安心していきます。

地元の建築家として、今後どうやって関わっていくか、今でも模索していますが、建築相談会ということで、月2回は足を運んでいます。建築相談会といっても、仮設住宅にいくとイモの天ぷらを作ってくれて、結局、食べて、おしゃべりして

終わりみたいな感じです。地元の私たちが仮設住宅に行つて、関わりを持つことが重要なことかなと思っています。この「みんなの家」を使う方は、震災前は西原村の大切畑地区に住んでいた方が多いですが、熊本地震で集落の建物がほとんどない状況です。最近、自分たちの集落をどう再生しようかと話し合いが「みんなの家」で行われている新聞記事を見ました。

私たちがここで何ができたのか考えると、やはり「みんなの家」に集えば、みんながいるというところをつくれたことかなと、そんな気がしています。

西原村小森第3のみんなの家をめぐるって

山室昌敬(以下、山室) 私は西原村の小森第3の「みんなの家」を紹介します。原田さんから紹介がありましたが、私たちは建築士事務所協会の若手のメンバーを中心にチームを結成し設計しました。敷地は、小森仮設団地全体の中央に位置し、敷地としては一番広いんですが、近くに復興支援センターがつくれるなど制約の多い場所でした。最初に提案した案は、内部は全部土間にして、土足で行き来ができ、家具を可動式とすることで、さまざまな使い方ができるというものです。意見交換会では、たくさんの入居者が集まり、多くの意見をもらいました。例えば、広場には、子供が遊べるスペースがほしいとか、仮設住宅では難しい囲炉裏がほしいとか、そういう意見がありました。床面積は60㎡程度と決まった計画の中で、実現が難しい要望もありましたが、うまく整理することができました。また、仮設の建築物ということで、可能な限り再利用可能な材料を使っています。昨年の9月末に着工し、10月30日だったと思いますが、上棟しました。12月10日に完成し、仮設住宅の方や村長さん、それからくまモンもきて完成式はとても盛り上がりました。第3団地ではKASEIで九州大学の学生が、今年の2月に「みんなの家」に芝や桜の木も植えてくれました。完成後に見に行くと、中学生がみんなが集まって研修会を

していたり、おばあちゃんたちが集まって話をしたりとか、また、お父さんたちが囲碁・将棋をやっているような場面に会います。3月にはどこかの寄付だったと思いますが、住宅には置けないような立派なひな人形を飾って、ひな祭りを催していました。「みんなの家」の設計をとおして、時間的なものと、予算的なものも限られていて、また一番は、私たち自身もですが、施工者にとっては、同じ被災者であり、材料の調達、人材の確保は、すごく厳しい中で調整いただいていると思っています。第3部で災害公営住宅の話があると思いますが、これも今から進行していく話ですので、県内の関係者としても、問題を解決していきながら取組んでいければと思っています。

西原村小森第4のみんなの家をめぐるって

甲斐健一(以下、甲斐) 私は西原村の小森第4の「みんなの家」を紹介します。

私たちは熊本県建築士会ですが、JIAや事務所協会と少し違うところは、建築士会の青年部に設計のお話をいただいたことです。青年部は、建築会社の社長の集まりでなく、設計事務所に所属している者が多く、その中でチームをつくり進めていくということで、各所属事務所の所長さんの協力をいただきながら、青年部として、どのように「みんなの家」を進めていくかというところから始まりました。

仮設住宅はプレハブで、最低限のプランでつくってありますので、正直、仮設住宅で生活している方は、タンスに囲まれた中に布団を敷いて寝ているような状態です。例えば、お孫さんが遊びに来て、一緒に団らんする場所がない状態です。住民の方との話し合いは、まず、予算と規模がある程度決まっていたので、たたき台を持っていき、どれがいいのか、床は全て小上がりがいいのか、畳がいいのかといったところから、どのような要望や意見があるのかということ、ざっくばらんにお話を伺いました。また、第4団地でも意見交換会などでKASEIの佐賀大学の学生に協力をも

※KASEIプロジェクト(九州建築学生仮設住宅環境改善)
KASE(かせい)は、熊本地震被災者支援のために、九州山口を中心とした建築系大学の学生らが組織し、仮設住宅の住環境整備として、住民と協働しコトづくりやモノづくりの支援活動を行う。
実行委員長は末廣香織 九州大学准教授(建築家、アートポリスアドバイザー)



西原村小森第2のみんなの家



原田展幸氏



西原村小森第3のみんなの家



山室昌敬氏

らっています。何度か打合わせた結果、リビングの延長になるような「みんなの家」にしたいということになりました。また、団地にいくと、高齢者だけでなく、子供があちこちで遊んでいるのを見ていて、子供も大人も使えるといった点も大切にできないかと思いました。昭和女子大学の杉浦教授のご協力もいただき、本棚を設け、小さな図書館みたいにできないかというところで話はまとまりました。

内部には、本棚のスペースを設け、小上がりのスペースがあるという感じです。杉の流通材を使うことで、できるだけコストを抑えるということも考えました。また、仮設の集会所ですから、将来の移設・再利用の可能性を考慮し、建物の屋根材・内外壁材・床材・天井材等の全てを板材・面材等による乾式の工法で構成しています。部屋の奥にあえて小さなテーブルスペースを設けて、ちょっと勉強するとか、本を静かに読むとか、そういったスペースを残しています。上棟した時は住民の方も集まり、餅まきをしました。また、熊本工業高校の生徒さんに椅子をつくってもらい、そういうこともあって何とか完成に辿り着きました。今後も「みんなの家」を建築士会の一つの拠点として、関わっていければと思っています。

先々週は、スロープの場所を使って流しそうめんをしました。建築士会で山から竹を切ってきて、地元の方が呼びかけていただいて、薬味は私がつくってくるからとか、ちょっと大きい鍋は私が持ってくるよ、という具合で、ちょっとしたイベントになりました。完成してもうじき1年になりますが、いろいろ作り足され、意外とこういう使い方もできるんだなというのを、いろいろ思ったりしています。

■ 第2部 ディスカッション

伊東 実際に仮設団地をいくつか訪れてみると、90数棟の「みんなの家」が「あっ、ここにもあった。ここにもあった」という、東北とは違った雰囲気全体的に伝わっています。3人の方には非常に丁寧な説明をいただきました。実際に

今、甲斐さんからありましたが、去年の秋にできて、もうじき1年になろうとしているのですが、だいたい、当時想定していた使われ方をしているのか、それとも、予想してなかったことも起こっているのか伺いたいと思います。それから、「みんなの家」の経験が、これから自分たちが設計をやる上で、なんらかの発見があったのかどうかというようなこともざくばらんにお話いただけますか。

原田 予想どおりといえば、予想どおりのことが断然多かったと思います。というのは、意見交換会のときに、女性の方が積極的に発言されていて、やっぱり料理のこととか、子供の遊び場の意見をいただきました。意見交換会が夜の8時とか9時とか遅くなってくると、女性の方は家に帰って「料理をつくらなきゃいけないから」と言って帰られて、残ったのは男性の方のみになりました。その途端男性の本音がグッと出てくるところがありました。そんなの(料理や遊び場)はどうかなるから、ちゃんと集会できるような場所をつくってくださいと言われました。それは、当然実現しなきゃいけない要素だと思っていて、先ほども説明しましたが「集落の再生の話し合いの場」につながったことが非常に良かったなと思っています。あと、開放感のある建物という意見がいくつかでたんですが、「おお、いいね」ということで、鍵も掛けなくていいんじゃないのみたいになったので、鍵の管理をどうしていくかというのは、その後の話になったと思うんですが、いきなり鍵はいらないみたいな感じになってしまって。今「みんなの家」に行くとかだいたい開いています。ただ、自由に入れるので、子供たちがかなり激しく遊び、散らかり過ぎて。ほんとに足の踏み場もない大学生の部屋みたいな、すごく汚い、散らかり過ぎた状態になっていたんです。その後、女性の皆さんが丁寧に掃除をするというようなことがおきまして。なんか、生々しい生活モードというか、そういうものが繰り広げられているんだなと思っています。

山室 県からは年内にどうにか完成をと、急いでつくりました。ですが、1月、2月半ばまでの2か月あまりは、鍵が開いてないということで、自治会といいますか、この建物をどう管理するかというのを決めきれてなかった状況でした。1カ月～2カ月半はなんかシーンとしていたような印象です。その辺の管理のシステムづくりも並行してやっていかないと、急いでつくったのはいいけど、使えないと、もったいないということになってしまっていたのは残念でした。使われ方については、どんな使い方ができるというのがコンセプトというか、事前の仕分けをしておりましたが、それ以上のいろんなことを考えて、木をみんなで重ねてみたりとか、そういうことで住民の方が、独自にそれ以上の使い方をしていただいているところです。

甲斐 住民の方で、ものすごく最初から意見をおっしゃる方がいて、毎回集会所にいらっちゃって、毎回イベントにも参加されます。住民の意見を吸い上げてくれる方で、建物が建った後も、設計のメンバーの一人に、週に1回は電話がかかってくるんです(笑)。「建築士さん、今何しているの?」と、「次は何をやってくれるの?」とか。そういうこともあります。もちろん私たちも被災者ですが、その方が中心になって仮設住宅に住んでいる方の声を集めてもらえればいいなと思っています。

伊東 地元でやられましたので、地元なりの難しいところもあるのではないかと思います。桂先生は「みんなの家」に限らず、仮設住宅全体の配置計画などにも随分関わってくださって、いかがでしょうか。「みんなの家」をどう見ていらっしゃいますか。

桂英昭(以下、桂) 熊本で仮設住宅をやったときに、最初の戦いがありました。何の戦いかという国との戦いです。行政と戦わないといけないんですね。そのために、たぶん皆さん、公共建築をやられている方もたくさんいると思いますが、どうやったら行政とぶつからないのかという、前例をつくるしか方法がないんです。法律で決められている

わけですが、前例さえつくれば、行政を切り崩せる。これは最初から念頭に置いていました。

例えば、熊本の仮設住宅は、これまでと違って、長い40mぐらいあった長屋を半分に切って、途中に通路を入れました。また、隣棟間隔を、今まで4mが一般だったものを、6.5m(木造)とか5.5m(プレハブ)にしました。こういう新しい提案をすべての仮設の配置も含めてやったんです。それから東北だと、50戸に60㎡のプレハブの集会所が1つ、100戸できたら、100㎡のプレハブの集会所が設けられていました。これが今までの災害救助法だったんです。熊本では、20戸で40㎡を、50戸で60㎡の木造の「みんなの家」をつくりました。さらに、80戸あったら40㎡と60㎡の「みんなの家」を2棟つくる。建設時期のタイミングもあり、60㎡と40㎡を建てる場合は、1つだけ、先ほど皆さんが発表いただいた、本格型の60㎡の「みんなの家」の方です。こういうルールでデフォルトで4,303戸の仮設住宅に、団地にすれば110団地に適用しています。そうすると、集会所の数が2.5倍に増えたそうです。しかも、プレハブから木造に変わっています。

今日皆さんが工期が大変だったとおっしゃっていましたが、これは、国の厳しい目の入らない工期の中で、どうやって木造をつくるかという、そういう戦いをして、皆さん、すべて協力いただいたんですね。熊本ではそういうことをやっています。それは、やっぱり蒲島知事と伊東先生のコミュニケーションとか、あと熊本県の行政の方、アートポリスで30年もやっておられますと、我々がどういった戦いをするかということに対して、明確にいただいたということがあります。実際は、こういうことをやって「みんなの家」をつくると、国から怒号が飛ぶほどお叱りを受ける。要するに、仮設を立派につくると、早く出て行かないと。これが現実です。その中で戦えたのは、行政の方との協力ができないんですね。

それと、最後に、ここに登壇されている3名は団体の方とし



西原村小森第4のみんなの家



甲斐健一氏



桂英昭氏



熊本地震で整備した応急仮設団地

て、僕たち(アートポリス)が選んだつもりはないんです。日頃からアートポリス推進賞で賞をとり、ずいぶん頑張っていたという、顔が見えていたのをお願いをしました。形式的には、設計者名では団体の代表ということになっています。なぜ、この設計者を選んだかというような、地元の変なしきたりがまだ残っているようなところもあります。皆さん、既にご活躍され、かなり頑張っておられる3名ですので、ここで紹介させていただきます。本当にありがとうございました。

伊東 今お話いただいたように、蒲島知事が昨年4月30日だったと思いますが、朝日新聞のインタビューで復興のあるべき姿として3つのテーマを挙げておられます。まず、癒やされる復興。2番目に、創造的なクリエイティブな復興。そして、3番目に、復興することによって、熊本県が発展するような復興でなくてはならないと。こんなことは東北の知事は誰も言っていません。知事は改めて素晴らしいと思いました。このような知事がいてこそ、アートポリスが成り立つのだと思いました。それに熊本県の職員の方達のことですが、この1年、本当に寝ずに頑張ったと聞いています。それで、これだけのことができたんですね。そうやって1回できると今までこうでなくてはならないという、仮設住宅の枠がいくつか緩められた。だから、まさしく前例があれば、それでかなり変わるのです。今までは、国は「仮設住宅は2年間。だから、長居されては困るから、そんな立派なものをつくられても困る」と言っていたのです。それが「なかなかいいじゃないか」と。そして、学生たちがつくるプロセスだけでなく、できてからも、たびたび仮設住宅を訪れて、そこでどんな風に使われているかにも関わっていく、そのような素晴らしい取組みが熊本で行われています。末廣先生、「KASEI」の紹介をお願いしてもよろしいでしょうか。九州北部豪雨でも確か、仮設住宅がつくられていて、テレビで見て、「仮設住宅こんなによかったの?」と思ったところでした。



末廣香織 熊本で仮設住宅がつくられていて、私のところで、九州の大学の先生方にお話して、学生たちを集めて、それで「KASEI」をつくることにしました。「みんなの家」をつくる過程でも、もちろんお手伝いをさせていただきましたが、今日もいろいろお話を聞いて、改めて思ったことは、やっぱり「みんなの家」の特徴の一つとして、みんなで作るということがありますよね。多くの人に関わって、設計者側もかなり大勢の人が関わって設計をします。実際につくる過程でも、住民の方はもちろんですが、施工者の方から、自治体の方までいろんな人が関わっていて、いろんな企業も手を挙げてくれています。最近ではなかなかやりませんが「餅まき」もやりまして、子供たちも含めて、みんなでお祭りのようにつくっていく。それがとてもいいというか、みんなうれしいみたいです。ずっと思っていることがあって、最初に、伊東さんに連れられてというか、声をかけていただいて、みんなで仙台の「宮城野区みんなの家」をつくる過程で、住民の方がどんどん元気になっていくというか、すごく明るくなっていくんですね。そういうことなんだと。かなり不安を抱えた住民の方々が、集まってきた中で、これをつくりましょうと。みんなでやっていって、最後は、食事をしながら、お酒を飲んでということになって、非常に、いいなと思ったんです。「みんなの家」ができた後も、自由に使われているという状態が、とても最近の日本の、日本だけじゃないかな、公共の建築の在り方というか、昔から、みんなでつくっていたんですね。日本中がそうですけど、みんなで集まって、協力して、建物をつくる。それをお祝いして、そこでコミュニティーが結束して、社会で暮らす安心感みたいなのがあったと思うんですね。それが今の近代化の過程の中で、だんだんなくなってしまって、私の近所もほとんどないですが。そういう風になっていく。それを「みんなの家」の取組みが、震災とか、いろんな被災に関してのお話なので、特殊といえば特殊ですが、このような機会を与えてくれて、それが今



末廣香織氏

の、現代のいろんな現実を見せてくれたのかなと、思いました。桂先生の話につながるんですが、7月に九州北部豪雨がありました。つい1カ月ほど前です。かなり多くの家が流されています。地元が福岡ですので、国や福岡県を訪ねて、熊本地震での活動の話や、福岡で何かやりましょうといった話を、熊本県のアートポリスの職員に同行してもらって、お話ししてきました。結果として、仮設住宅は地元でつくるということになりましたし、「みんなの家」のような集会所もつくろうということになりました。結局、私たちが建物の設計をして、今工事中です。そういう形で、実績をつくると、それに対して自治体もこれができるということで、動いてくれるということが起きています。つい3日前まで、アメリカのヒューストンの近くに行っていて、巨大ハリケーンが来て、日本に帰ってこれるか危ない状況だったんですが。その時アメリカ人に聞くと、アメリカでは、避難所はあるけど、仮設住宅などの制度はないと言うのです。避難所だけですかって聞いたら、その後は、放り出されると聞いて、なんて切ない話だと思ったんです。日本はそういう意味では、まだいい方なんだと。日本では災害に対してはきちんとやっていって、やっぱり国際的にもみんなで本当に考えてもらうような、事例になるのかなと、少し思ったところでした。最近、やたら災害についていて(笑)。いろいろなところで活動していますが、本当に、困った人を助ける仕組みというのをちゃんとつくっていくといいな、と思っています。

伊東 もう一つ、あれだけの木材を提供して、仮設も含めて「みんなの家」をつくと、供給側というか、施工者の方たちが苦労されたと思うんですけど、その辺について、少しお話しいただけますか。

桂 東日本大震災の翌年2012年に、熊本県では阿蘇の水害があり仮設住宅をつくりました。その時から熊本県優良住宅協会と県は既に協定を結んでいて、材料の提供や施工の話がありました。熊本地震では、それだけでは上手くまかなえる状況ではなかったため、JBN(全国工務店協会)



とかKKN(熊本工務店ネットワーク)、地元の工務店の組織も大変協力してくれました。あと、日本建築士会連合会もですが。だから、2012年から仕組みを作っておりましたので、少しはスムーズにいきました。ですが、それでも大工さんの人数が足りなくて、実際は、宮崎県とか大分県から大工さんが手伝いに来たりしていました。また、仮設住宅は、105角の規格材を使っているんですが、仮設住宅に多くの材料が流れたため、規格材が高くなってしまっ。後で、第3部であります。工藤さんとか、内田さんたち、岡野さんもそうですけど、材料が高くなった話があるかもしれません。

伊東 そういうこともあるわけですね。蒲島知事が、今回の木造の仮設住宅は、コンクリートで基礎をつくったことに関して、仮設の後も転用していきたいと。それは画期的なことだと思います。また、何か起こってから「ああ、いけない」というので何か動くのではなく、普段からこうしておきたいと準備する。これだけ全国で度々災害があると、事前に木造の仮設住宅を用意して、ストックして、何か起こったらすぐにできるような、そういうシステムもつくりたいとおっしゃっています。それは素晴らしいアイデアだと思います。知事がおっしゃっていた、熊本県の発展のためとは、そういったことなんだと思います。

第3部 熊本での災害公営住宅をめぐる

伊東 熊本では仮設住宅から、さらに次のステップへの準備が進められています。ある意味では仮設住宅や「みんなの家」で試みたことを、恒久的な災害公営住宅にどうやってその精神を活かして、これからやっていけるのかが、今問われているわけです。その現場に立ち会っていただいているのが工藤さん、内田さん、そして岡野さんというお三方です。実施設計中のプロジェクトや着工目前まで来ているプロジェクトもあるし、プロポーザルを経て設計中という

ものもあります。今日はそのあたりをお話いただければと思っています。ここで、平田さんがプロポーザルを経て災害公営住宅を釜石市の天神町で提案しています。民家が道路にそのままつながっていくような、前面道路に縁側があって「みんなの家」がつながっているような、そんな公営住宅ですが自治体によって拒否されたわけではなくて、どうしてもお金が合わなかったのです。このときは、ものすごく建設物価が高騰している時期で、ほとんどのプロジェクトが不調に終わったのです。一部だけが実現したのですが、本当に残念だと思っています。他に実現したものとしては、千葉学さんが大和ハウスと組んで、災害公営住宅をつくって下さいました。結局、物価が高騰する中で、これらのメーカーだけが在庫を準備して、こういうことができるということで、千葉学さんが関わってくださって、いろいろとアドバイスをしてくださいました。真ん中を中庭として住戸の前面に通路があるものや、前面と後側とが交錯するような災害公営住宅が実現しました。

一方、他で完成した災害公営住宅を見ると、東北に都会のマンションみたいなものが建っています。東京の郊外の若い人たちが住んでいるマンションのようです。ここに移った人が、もしエレベーターの脇に、少しでもみんなが憩える場所があったらずいぶん違うのと思うでしょう。ではこの辺で、工藤さん、内田さん、岡野さんお願いします。

甲佐町白旗地区・乙女地区災害公営住宅をめぐって

工藤和美（以下、工藤） 災害公営住宅をつくるにあたり、東北で起きたようなことが起きないようにという、大プレッシャーをかけられて、私が指名を受けて災害公営住宅に携わっています（笑）。私が設計している敷地は、熊本県庁から車で約30分のところにある甲佐町の白旗（しらはた）地区と乙女（おとめ）地区ということです。農地が広がるような、緑豊かな、田畑の土がいっぱいある地域です。



甲佐町白旗地区・乙女地区災害公営住宅イメージ



工藤和美氏

乙女地区は、周りに苗木を売る市場（グリーンセンター）があり、のどかで素敵な場所です。ここに12戸の公営住宅を建てる計画です。乙女地区の敷地は、グリーンセンターの駐車場のところ。白旗地区は、農村集落が離散した中の一部で、周辺の被災した方々の住戸を10戸建てるというプログラムです。2地区は同じようで、少し周辺道路との関係性が違ってきます。最初の検討は、条件のない中で、55㎡で10戸ずつ住戸をということでした。甲佐町長と副町長に初めてお会いするときに、とにかく、そのボリュームが敷地にどうやったら入るのかということ、を、できるだけいろんなパターンで、連結させて長屋式にしたり、あるいは2戸1棟又は3戸1棟とか、1戸ずつとか、いろんなパターンをつくっていきました。町の思いを聞き出すために、様々な案の模型をつくって会話をしましたが、模型を見ながら話すと、とてもよくて様々な町長の思いが出てきました。その時におっしゃったのは、熊本地震からの復興のちょっと先を考えられていて、65㎡というのはこの農村部にはあまりにも小さすぎて、田舎暮らしはできないと。将来的には、2戸を1戸にして、払い下げること可能な計画を考えてほしいという思いが伝わってきましたし、そういったことを会話の中で見つけ出しながら、次のステップに進めていきました。また、乙女地区の仮設団地の「みんなの家」をお借りして、そこに住んでいる方や区長さんと話し合う機会がありました。災害公営住宅の難しいところは、仮設住宅の「みんなの家」と違い、そこで生活する人がまだはっきりしないわけです。どなたが入るか分からない。そんな中で地域性みたいなものを引き出すために、会話をさせていただいて、いろんな事を皆さんから聞けまして、白旗と乙女は多くの高齢者が入ることははっきりと分かっていたので、その方々にどういう生活をしていますかなど、いろんなことを聞きました。「お日さまが登っている間は畑にいます」「家でテレビを見ているというよりは、外に出て1日中長靴を履いています」「畑から帰る時は取った野菜を、隣近所の玄関先に



ポンポンッと置いていくんです」と皆さん、こうおっしゃるんです。当初から土間があるような、農家型の災害公営住宅がいいのではないかと思いますもっていたんですが、あの時の言葉が、その後も背中を押してくれています。80歳を超える区長さんのお宅にお邪魔したのですが、納屋を改修して生活されていました。納屋は倒壊せず残っていて、母屋（おもや）だけが潰れている状況でした。熊本の多くの場合は、母屋のところが広場のように空いていて、納屋は残っていて。そこには農機具があって、畑や田んぼがあるから、町の中心部には移動できないと。田んぼのそばじゃないと生活できないということで、ここに残られるというお話しをお聞きました。打合せをした時ですが、アートポリスが30年ということで、私の事務所も30年ですけど、熊本でも仕事をしていますが、アートポリスをさせていただくのは今回初めてです。県

のアートポリスの方や住宅課の方、桂先生もいらして、最初は驚きました。公共施設の設計では、自治体の担当の方とやり取りはしますが、熊本県の方は本当にみんな熱心に細かいところまで、どうすれば喜んでもらえるかとか、こういうことはクレームになるんじゃないかということ、設計者と同レベルで皆さん考えられています。これは特異なことで担当の方々が長けているということに驚きを覚えながら、進めているところです。今回取り組む甲佐町は、農家型の災害公営住宅というのを実現しようというテーマを持っていて、県との打合わせでも「それでいこう」ということになって、今5つぐらいのテーマをつくって進めています。設計者として思っていることは、冬があって、春がやってきて、夏になると木が茂ってくる。当たり前のことかもしれませんが、都会に住んでいる我々には、そういうことがすごく疎くなっているんです。こうい



う地域では、すごく大切なことで、災害があったとしても、やっぱりその人の土地の、健康な生き方というのをしっかり受け止めなきゃいけないと思っています。

もうすぐ入札をはじめますが、4畳半ぐらいの土間とキッチンが一体で提供できたり、2間続きの和室があって、この部分を外すと、後に、130㎡の住宅になるようなということを考えています。できる限り、屋根を大きくかけて、外で周りの人たちとのコミュニケーションが取れたり、若い世代でも、高齢の世代でも生活できるようなパターンを提案しています。先ほどの区長さんの家じゃないですけど、間取りは、土間の部分でいろんなことができる前提で設計を進めています。

設計者として、四季を感じる、できるかぎり外に開きながら、地域に、ご近所にも関係を開くような、災害公営住宅を目指して取組んでいます。

宇土市境目団地災害公営住宅をめぐる

内田文雄（以下、内田） 宇土市の境目公営住宅について説明します。設計は、私と熊本に西山英夫さんという昔からの友人がいまして彼と共同です。アートポリスで大きな小中一貫校をやったんですが、それが実施設計までいって町長さんが替わって、建ってないのでかわいそうだなということで指名されたと思っています（笑）。宇土市というのは、熊本市内から南に15kmぐらい離れていて、市役所はすごく衝撃的な壊れ方でしたので、皆さんご存じかと思います。

敷地の近くは、戸建ての団地、県営住宅、そして市営住宅が並んでいて、近くには仮設住宅も建っています。敷地が1つ2つ3つとあり、非常に特殊な敷地条件です。敷地は道路から1mぐらい高く、少しひな壇のような形になっています。

まず、何を考えたという話ですが、住宅ですから住戸をどうするのかという話と、それが群としてどのように集まるかと

ということです。それと、もう一つは、周辺の環境が従前にあるわけですから、そことのつながりをどう持つというか、住環境をどうつくっていくかということです。この3つのレベルの課題があるということを当初から考えていました。

計画の諸元は、木造平屋、県産材、そしてローコストでつくる。維持管理のしやすさについては、いろいろ宇土市から意見がありました。あと、建築業界が今大変混乱状態にありますので不落は避けることが条件でした。

宇土の住戸タイプは45㎡、60㎡、75㎡のミックスであることが特徴です。住戸は計25戸で集会所もつくります。もう一つの特徴は、これは県と市からの条件ですが、長屋形式ということです。3戸1棟又は4戸1棟、それと1棟の床面積が200㎡以内、これが非常に重要でした。200㎡を超えると県条例で4m以上の敷地内通路が必要になります。限られた敷地の中に、通路だけが非常に大きくなることは避けたいということでした。

それと、これは単価を考えた時に非常に苦勞をしましたが、耐震等級や省エネ等級は高性能にと。これは設計条件でしたから文句は言えませんでした。本当は議論ができれば良かったと思っています。あとは、公営住宅ですから、退去するとき、現状復帰をしなきゃいけない。変なことをやると、居住者に負担がかかるので、そうならないようにほしいと。とにかく住みやすくしてほしいという話です。将来は通常の公営住宅になる予定でその辺をちゃんと考える。また、既存の市営住宅とバランスを考えて、特化しないようにというような話です。どんな人が住むのかは決まっていはいんですが、希望者の状況を聞くと、ほとんど一人世帯、二人世帯なんです。また、一人暮らしや高齢の二人暮らしというのが圧倒的に多い。だから、お年寄りか単身、あるいは二人住まいの住宅をつくることになって、年齢構成も圧倒的に50歳以上という状況です。

敷地が1m上がっていますので、結構スロープが長くなるとか、いろんなことを考えながら、模型をつくり配置を検討

しました。駐車場と各住居の距離はできるだけ短くしてほしいと要望があり、駐車場を真ん中に置く案になりました。次に、住戸をどうするかということですが、個人の領域が、動線的に段階的に広がっていて、それが家族とか、あるいは複数の家族が来たときに、いろんなことに使ったりするわけです。この重ね方をどのようにデザインするかが、住戸計画の一番重要だと思っています。途中で住戸の中が随分見えすぎたんです。でも、中の様子は外にしみ出すようにして、中と外の接点をどうするのかというのが、いろいろ苦勞したわけです。

断面は、全部木加工でやりたかったんですが、管理の問題があり、あるいは退去するときの現状復帰の問題などがありました。これは例えば、勾配天井の場合、照明器具をどのように付けるのかとか、お年寄りがランプ交換をどうやってするのかということです。このような管理上の問題との折り合いを探しながら図面を書いています。結局、公営住宅ですので、維持管理の考え方と設計内容との摺り合わせというのが結構大変だと感じました。

設備機器のスペックも上がっていて、照明器具もLEDが普及していますが、ここでも、器具と電球は自治体と居住者どちらが負担するのかという問題もあります。

また、住環境に住む人たちが管理していくには「共有の概念」が成り立つことが非常に重要だと考えていて、菜園などを提案したんですが、公の土地を私的に利用することに問題があったり、植栽の管理も大変なのでボリュームを抑えるような話がありました。

高齢の居住者が多いと想定される災害公営住宅で、どのように住環境をつくっていくかを考えると、我々が提案したことは、どうにか実現したかったと思っています。

甲佐町住まいの復興拠点施設をめぐる

岡野道子（以下、岡野） 私とビルディングランドスケープ、そして熊本県のライト設計との共同で、「住まいの復興

拠点施設整備」と呼んでいます。甲佐町の災害公営住宅などの設計を進めています。7月にプロポーザルがあり基本設計の段階です。内容は、災害公営住宅が30戸、子育て支援住宅が20戸、そして「みんなの家」と都市防災公園をつくるという、かなり大きな敷地で約1万3,000㎡程度です。

私は、益城町の仮設住宅で「みんなの家」にも関わりましたが、甲佐町も同様で、住む方というのは、一人だったり、二人だったり、また高齢者の方が多いということで、敷地全体はある程度ゾーニングしていますが、なるべく自然環境に近いような、そういった環境にすることで、人が散策したりとか、会話が生まれるような、いわば、全体をマチのようにつくれたらと考えました。

地域性としては、先ほど工藤さんが担当される災害公営住宅が同じ町にあって、そこから10kmも離れていない、甲佐町役場のすぐ隣りの敷地です。阿蘇山のすそ野に沿って、南南東から風が吹き、夏の昼間は、西風が非常に心地よいのがこの土地の特徴です。また、日照条件も非常にいい場所です。敷地のすぐ近くにある民家などは、かなり外部とつながった暮らしをしています。内外が曖昧な、そういった庭が家の間にあるというような状況です。また、庭のつくりが非常に面白いなというか、家の前に大きな松をつくり、公共的領域と個人の庭との間の作り方が、かなり私的に皆さんやられているということが印象に残っています。

私たちが最初に考えたことは、先ほどの南南東の風を通す「風の道」をつくろうと考えていて、風を住戸の配置によって分岐させるような仕組みができないかと思いました。風の道をつくるよう配置を検討し、風が小道を縫うように通過していく。西風も少しずつらしていくことで、風が通っていくことを考えました。

災害公営住宅に住む方は、仮設住宅から移り住み、ここでまた新しいコミュニティをつくることになります。そのため、「みんなの家」はどこからでも形で見える中央に配置し、



宇土市境目団地災害公営住宅イメージ



内田文雄氏



甲佐町住まいの復興拠点施設イメージ



岡野道子氏

「みんなの家」を囲むように住戸を配置して、入居者の皆さんが集まりやすい計画にしています。

屋外は、詳しくシミュレーションして、計画する公園が非常に重要な役割があり快適な住環境に寄与することが分かってきました。ですので、公園のつくり方がとても大事だと考えていて、良好な住環境とともに、屋外に出て、人と出会うことが気軽にできるような場所を造っていきたいと思っています。実際この敷地にいくと、本当に木陰の西風というのが非常に気持ち良く、各住戸から外に出て、少し溜りのあるような場所が実現できると考えています。

災害公営住宅は、南北にずらし、東西は比較的壁を多くしています。こうすることで、西風を取り込み非常に効率がよいと分かってきて、プロポーザルの案を見直し、より良い環境にしようと案を更新しています。屋根はずらすことで、風が抜け自然換気ができますし、快適な屋内環境がつけれると考えています。「みんなの家」は、「人がいるというのが分かる」「ここで何かしている」「誰か来ている」とか、そういった活動が見えるように子育て支援住宅からも、災害公営住宅からも、近い位置に配置しています。

子育て支援住宅は、若い世代の方々が町外からも入ってくる可能性があるということで、おおらかに防災公園を囲うような形で配置しています。プランは、災害公営住宅と同じ仕組みで、壁を出すことで風を通し快適な住環境に配慮した計画としています。また、お隣同士や他の家族同士の交流が生まれるようなつくりができればと考えています。

災害公営住宅をつくるプロセスは、「みんなの家」をつくるプロセスと同様に、使い方をみんなで考えていつくり方ができればと考えています。益城町の「みんなの家」をつくったときも、KASEIの学生と一緒に仮設住宅の方々といろんな話をして、どのような暮らしを送っているのか、何に困っているのかなどコミュニケーションをとりながら「みんなの家」をつくっていきました。災害公営住宅でも、このようなつくり方ができればと思いますが、まだ住む方が決まって



いませんので、そのようなプロセスが実現できるかわかりませんが、できる限り住む予定の方たちとどう使っていくのかということも含めて、話ができればと思っています。

■ 第3部 ディスカッション

伊東 ありがとうございます。工藤さんと内田さんの進行状況は同じぐらいですか？

工藤・内田 そうですね。

伊東 お二人は実施設計が終わった段階と、岡野さんはこれから実施設計ということで、余裕度が違うかと(笑)。お二人は切羽詰まっている感じが伝わってきました(笑)。

その中で工藤さんと岡野さんは同じ甲佐町で、内田さんは宇土市なので場所が違うわけですが。工藤さんは、アトポリスの県の方と桂先生とは、非常に細かく調整していて、非常にうまくいってるような事例ですね。内田さんは、若干、市からいろんな意見があって苦労されているようなお話でしたが。

内田 そうです(笑)。例えば、模型をつくって、持っていったんですが、高齢者の方が照明器具の電球を取り変える時には天井は平らじゃないと、どうするんですかと。また、退去する時にペンキなどを塗ると足場があると。そうすると、その分は、退去する入居者が負担しなきゃいけない。高齢者の方はそんなに収入がないような方もいて、そういう負担が出るのはまずいと。正論だと思います。それはそうだと私も納得しましたし、その中でできるだけ快適な空間をつくるのが、我々の使命かと思っています。あと、私は、普段の設計では最初から参加型で、共同デザインということをやっとやってきたんですが、入居者の方と一緒に議論しながらできないんです。そこがジレンマというか、議論ができれば「そんなこといいよ。俺たちでやるよ」、みたいな話がそこから出てくると思っていて。だから、本当の意味で誰が住むのかということが、非常に曖昧になっているという感じがします。



伊東 なるほど。第1部から伺っていて、第1部はほとんど自治体が介在しない。そして、第2部は、かなり自治体主導で動いているけど、住民たちもいる状況の中ということです。第3部になると、自治体が一気に大きくなって、通常の公共建築の姿がかなり垣間見えてきたところだと思います。そのようになってくると困難さがひしひしと伝わってきます。工藤さんは如何ですか。ずっと公共建築をやられてきて、まさに災害公営住宅の先陣をやっていただいているわけですが。

工藤 自治体によって、これほど違うのかということがすごく分かったんです。甲佐町の場合、町長自ら出てきて、議会の皆さんも熱心なんです。というのも議会の皆さんが最初に山古志村へ視察に行かれたんですよ。山古志村の災害

公営住宅は、最初から払下げを前提に、つまり、その次の未来を見据えてやってきたということをいち早く議会が見て来たということです。

内田さんは、一般公営住宅との比較で苦しまれているんですが、ここで私はすごく考えを変えなきゃいけないと思っているのは、公営住宅と災害公営住宅は基本的に住む人のタイプが違うと思うんです。というのは、今まで自分で生活できていた方が、災害に遭って初めて家を失って、災害公営住宅にいく人と、最初から公営住宅という枠組みで生活していた人とは、やっぱりライフスタイルが違う。そこをもう少し行政も理解していただかないと。これからたくさん災害公営住宅ができますが、高齢者や自立再建が難しい人が入居して、そういう人たちが次の世代に移ったと



きに、ものすごい数の災害公営住宅が存在するのです。そのときの活用方法となると、うんと先じゃないですよ。たぶん20年、平均でいうと70歳とかぐらいの方たちだから、そうするとあと20年、30年で大量の住宅が残るということを見据えて、それを次の若い世代にどう持っていくかという視点を各自治体が持っていたかかないと。また、それが空き家など使わない家になってしまいます。私は4～5年前からその点をずっと考えていて、甲佐町長はそこを先んじて取り組んでくれていて、本当に素晴らしいと思っています。

伊東 共通して土間のスペースが結構ありましたが、その点については、あまり自治体から意見はありませんか。

工藤 乙女は、本当に農村部で「土間は本当に必要ですよ」というと「それは、いい」って、受け入れていただけました。逆に岡野さんの方は、街中の方なので、必ずしも土間じゃなくっていうのもあるのではないのでしょうか。

岡野 はい。ちょっとそこの作り方というのは今後考えてさせていただきますというふうに。

内田 宇土市はどっちかという都都市部に近いようなライフスタイルの人たちが住まわれるということと、市営住宅になるということは、初めから言われていましたので、その市営住宅とあまり違うものをつくったらまずいといった話がありました。工藤さんのお話にあったように地域性で違うのでしょうか。

伊東 では、このあたりで「その先へ」が、どういう形でこれからあり得るのかなというようなことも含めて議論をお願いします。

曾我部 東北も熊本もですが「みんなの家」、あるいは仮設住宅、公営住宅もそうですが、被災した方々は、いろいろ辛いこともいっぱいあったらうし、いろんなものを失うわけです。しかし、その仮設住宅をはじめとして、いろいろな環境を体験することで何か新しい将来の可能性につながるような、そういうものになってほしいなとずっと思ってい

ました。今日いろいろな話を伺って、一つ思ったことは、この経験を通して、多くの方が設計者とのコミュニケーションを通して、何か新しい可能性に接続できると思ってくれるような状態につながってほしいなと思っています。私は釜石の災害公営の設計に関わっていました。これは最終的には実現しませんでした。そのときは、住民の方と話すチャンスが、たった2回しかなかったんです。それは住民の方もよくご存じのはずなんですが、説明会や話合いの会を開催しても、説明する側は10人程いるんですが、参加してくれる住民は1人だけのこともあったりして。それで少ない人と話をしたところで、自分の住環境に関して、たいして影響はないだろうという風にしか思わなかったようなんです。そういう状況が変わってくれればと思いました。

伊東 ありがとうございます。今日は自治体の方がもっと来てくださると一番いい内容のシンポジウムですね(笑)。

クライン 「みんなの家」は、東日本大震災の前はなかったんですよ。本当に新しい、ニューウェーブタイプです。新しく生まれたものは可能性があります。熊本の「みんなの家」ではコミュニティ・ビルディングができたんですね。一步一步ですが。誰でもいつでも行ける場所で、以前益城町の「みんなの家」でお花見をやった時に、なんか素敵だなと思ったんです。

みんなが集まって、コミュニティーができて、実はちょっとうらやましかったです。都会に住むと、こういう感じで集まる場所ってありませんから。本当は「みんなの家」がどこにでもあったらいいなと思います。

伊東 山本さんは今日の第3部のお話を聞かれてどうですか。

山本 工藤さんがおっしゃったように「みんなの家」、それから仮設住宅、それから災害公営住宅とだんだん「公」というよりもむしろ「官」ですね。熊本県では集合住宅について、くまもとアートポリスを30年間やってきて、やはり「公」と「私」

との関係をどう解釈したらいいかということを相当深く考えられたと思うんです。熊本は日本の先端に立って、最も成功した例だと思います。アートポリスのような計画を日本全体で展開することができたら、日本は相当変わると思います。だから、それだけ地方自治という政治が重要だということは、今日改めて、皆さん確信したと思います。それと同時に、内田さんが公の土地の私的利用について話をされました。ここに畑をつくりたいというのは、とても素晴らしい提案だと思います。僕も同じ経験をしているんですが、それが非常に難しい。それは何を意味するかというと、何が「公」で、何が「私」かっていうことを「公」が決めているんですよ。本当は住民たちが自分で決められる。ここに議論の意味があります。そういうチャンスなのに日本は、何が「公」で、何が「私」かを官僚機構の内側で決めています。非常に歪な関係がしっかり出来ているんです。

内田 個人的には粘ってみようと思ったんです(笑)。例えば畑をつくると、管理を誰がするのかっていうのは、3～4年したら住民が管理するわけですね。そこには草はないし、おまけに作物まで育つというようなことで、そういうことをきっかけに、みんなで自分たちの住んでいる環境に対して愛着をもつ。要するに公営住宅だとお客さんの住まい方をしているわけですから、それをやっぱり、みんなもう少し自前というか、自分たちの環境にコミットしていくようなことを、行政の住まいでもやらないと環境が変わっていかないだろうと思うんです。

桂 熊本の「みんなの家」で芝生を植えています。本来、仮設住宅の中に植栽したら駄目なんですよ。これは仮設住宅は最終的に「現状復旧」が前提です。木を植えたり、芝生を植えたらいけないとなっているんです。ですが、熊本はやってしまったんですね。それはやっぱり「みんなの家」になったら、「みんなの家」の周りに伊東先生がどこからか木を貰ってくるとか(笑)、ちょっとずつ崩し始めたんだと思うんです。そうやって崩れてくるというか。今日は、行政に

知らせないといけないと思うんですよ。僕が今日なにを最後に言いたかったかということ、熊本に「みんなの家」があるのは、やっぱり妹島さんとか、山本先生の「みんなの家」を見て、我々はそれを見てたからできたんですよ。

それからもう一つ言うと、山本先生が住戸の入口を向かい合わせにしたものがありまして、それがものすごく気に入ってまして。実は工藤さんや内田さんも、今回の計画で住戸配置についてそのような方法を取り入れたんですけど残念ながら、行政の人たちは、今までの市営住宅を見ているから、そういうのがなぜ必要かということが理解できないんです。これは、行政の人が悪いんじゃないくて、システムで動いているからです。それを崩していくためには、今日、こういう場ができてるのは、やってみたときの面白さとか、トライしていることを、建築家の人が諦めずにつくり続けていかないと、行政は動いてくれないんじゃないかなと思っています。

僕たちが一番心に残っていることは、妹島さんの「みんなの家」を見にいった、「これはいいな」と思ったのです。今日いろんなものを見ながら、そこで学んだことが一番良かったと思っています。

妹島 「みんなの家」は、最初は災害から生まれました。でも考えてみれば、実際は、私たちの毎日の暮らしの中に建ったらいいなと思います。例えばコンビニみたいに、街角にあったら、とっても便利だろうと思います。もう行政の人だけ頑張っても、建築家だけが頑張っても、住みやすい環境、公共空間を作っていくことは不可能なように思います。一人一人が住人だと認識する。一人一人が自分たちの環境を作る権利があり、義務があると認識できることが重要だと思います。どうやって参加できるかという時に、街角に「みんなの家」があると参加する拠点として使えるように思います。

「みんなの家」を通して自分たちの街だ、自分も住人の1人だと感じるができると思います。それは役所に窓口よ





りもっと柔らかくて、もっと自分たちの場所という感じがと思います。

伊東 第2部と第3部では、かなり決定的な違いがあり、第2部は県の事業なんですよ。仮設住宅や「みんなの家」をつくるときも。ただ、第3部は、これは市町村なのです。各自治体がつくっていくものを、県(アートポリス)がサポートするというポジションなので、その難しさがすごく表面化しているのです。山本さんがおっしゃったように、アートポリスが熊本で30年も続いてきたことの延長で、熊本の災害公営住宅が実現しつつあります。このお三方がどこまで頑張ってくださいるかが、東北ではできなかった前例をつくっていくことになると思います。

ちなみに、仮設住宅をイタリアからも頼まれました。イタリアの東海岸で起きた地震があって、海岸水域の町が壊れ

てしまっていて、そこで仮設住宅をつくれなかと相談を受けました。それで、とりあえず年末までに仮設住宅をプレキャストコンクリートでつくりますが、モデルハウスが近日1戸できる予定です。それでうまくいけば、70戸の災害公営住宅ができていく予定があって。そうやって海外にまでこれが対処できるということもありますので、ぜひ、工藤さんや内田さん、そして岡野さんは最強のチャレンジャーとして頑張ってください(笑)。

今日は長時間にわたって、大変に熱心に皆さん聞いてくださって本当にありがとうございました。

(2017年9月2日(土)、寺田倉庫G3-6F(東京都品川区)にて)

東京シンポジウム

出演者プロフィール(順不同)

伊東豊雄(いとう・とよお)

1941年生まれ
1965年東京大学卒業
伊東豊雄建築設計事務所代表

桂英昭(かつら・ひであき)

1952年生まれ
1978年熊本大学大学院修了
熊本大学大学院准教授

末廣香織(すえひろ・かおる)

1961年生まれ
1986年九州大学大学院修了
九州大学大学院准教授

曾我部昌史(そがべ・まさし)

1962年生まれ
1988年東京工業大学大学院修了
神奈川大学教授

山本理顕(やまもと・りけん)

1945年生まれ
1971年東京芸術大学大学院修了
山本理顕設計工場代表

妹島和世(せじま・かずよ)

1956年生まれ
1981年日本女子大学大学院修了
妹島和世建築設計事務所代表・SANAA共同代表

アストリッド・クライン

1963年生まれ
1988年ロイヤル・カレッジ・オブ・アート修了
クライン ダイサム アーキテクト共同代表

平田晃久(ひらた・あきひさ)

1971年生まれ
1997年京都大学大学院修了
平田晃久建築設計事務所代表

大西麻貴(おおにし・まき)

1983年生まれ
2008年東京大学大学院修了
大西麻貴+百田有希/o+h共同代表

近藤哲雄(こんどう・てつお)

1975年生まれ
1999年名古屋工業大学卒業
近藤哲雄建築設計事務所代表

原田展幸(はらだ・のぶゆき)

1973年生まれ
1996年熊本工業大学卒業
ライフジャム代表

山室昌敬(やまむろ・まさたか)

1971年生まれ
1995年熊本工業大学卒業
セルアーキテクト代表

甲斐健一(かい・けんいち)

1975年生まれ
1998年長崎大学卒業
甲斐構造設計事務所代表

工藤和美(くどう・かずみ)

1960年生まれ
1991年東京大学大学院博士課程修了
シーラカンズK&H代表

内田文雄(うちだ・ふみお)

1952年生まれ
1977年早稲田大学大学院修了
山口大学大学院教授

岡野道子(おかの・みちこ)

1979年生まれ
2005年東京大学大学院博士課程中途退学
岡野道子建築設計事務所代表

熊本シンポジウム

「一緒に考え、一緒につくる」～熊本地震からのすまいの再建～

第1部 パネルディスカッション 「災害に負けない熊本」

コーディネーター

曾我部昌史（くまもとアートポリスアドバイザー）

パネリスト

下村貴文・末廣香織・古里さなえ（阿蘇内牧温泉みんなの家）

山田一隆・川島浩孝・柳澤潤（大腸肛門病センター高野病院）

有浦隆・小川次郎（熊本県総合防災航空センター）

第1部 パネルディスカッション『災害に負けない熊本』

曾我部昌史（以下、曾我部） コーディネーターを務めます曾我部です。3つのプロジェクトは去年の熊本地震発災時には、設計中あるいは施工中でした。元々、「自然に開き、人と和す」という、くまもとアートポリスのテーマのもとに選定されたプロジェクトになります。そういったプロジェクトを通して、熊本地震のとき、あるいはその後どのようなことが考えられて実際行われてきたのか振り返っていきたいと思います。最初に、阿蘇温泉病院で取り組まれた「阿蘇内牧温泉みんなの家」についてお話をいただきたいと思います。下村総院長、末廣さん、古里さん、どうぞよろしくお願いします。

阿蘇内牧温泉みんなの家

下村貴文（以下、下村） 近年、阿蘇は本当に災害に見舞

われており、2012年7月12日の九州北部豪雨。今までに経験したことがない1時間に100ミリを超える大雨が降って、病院の前の道路で、車が完全に浸かってしまうほどでした。私どもの病院、あるいは附属の老健施設も、全部腰まで水に浸かりました。そのときの経験は、非常に今回の地震の役に立ちました。その後も、阿蘇山の噴火があり、自然災害に対する備えをしておかなければいけないという思いがありましたし、東日本大震災で「みんなの家」が地域の皆さんのコミュニケーションを取るのに非常に大事だというお話を聞いておりましたので、ちょうど老健施設のリハビリテーションの部門の手直して「みんなの家」の機能を持たせようという考えを持ちました。今は上天草市の副市長へ栄転されていますが、小嶋様（当時の副理事長）もいらっしゃいましたので、折角ならば県のアートポリスに参画させていただこうということになったわけです。今回の地震では、南阿蘇、西原、あの辺りが一番ひどかったわけですが、内牧も道



路が1m落ちたりしました。こういう活断層が沢山あって、阿蘇ではあちらこちらで道路の損壊が起こっています。たまたま私たちのところはこの断層が下にありませんでしたので、どうにか大丈夫でしたが、「みんなの家」を着工する1カ月前に地震が起きたため、どうしようかと迷ったのですが、こういうときこそ、やはり予定どおり“つくらんといかん”という思いで着工しました。老健施設の通所フロアが少し狭くなりましたので、建て増しする計画となっています。室内は木をふんだんに使って、広い空間を取ってくれました。有事の際には、ここを地域の皆さんの交流の場にする。そして、広場も地域の皆さんの交流の場にするというコンセプトです。地震後、色々な会合などに使ってもらっていますが、9月10日には「くまもとアートポリス建築展2017」の協賛事業の一つとして、熊本市以外で初めて「くまもと菓子まつりin阿蘇」を開催しました。3,000人を超える皆さんに集まっていただき、本当に楽しい1日を過ごしていただきました。

「みんなの家」の周りの立派な芝生は今日お出でいただいている古里さんはじめ、学生たちが張ってくれました。また、くまモンが来てくれたり、猿回し劇場も来てくれたりと、本当に楽しいイベントになりました。「みんなの家」の中では、熊本市川尻の和菓子屋の「川尻六葉匠」による実演販売をしていただきました。沢山のお客さまで賑わい、「みんなの家」を知っていただく非常にいい機会になりました。今回の地震で阿蘇内牧は、本当に地盤が揺さぶられた関係で温泉が出なくなりました。うちも7つの源泉のうち残ったのは1つだけでしたので、新たな源泉を掘り、今非常にいいお湯が出ています。足湯では温かいお湯が出て、子供たちにも足湯を楽しんでいただきました。こういうふうには、皆さんの楽しんでいただくような場所をご提供できるのではないかと考えています。

末廣香織（以下、末廣） 引き続き、つくる過程のお話をしたいと思います。私はアドバイザーとして、今から3年前、国



九州北部豪雨（2012年）の様子



阿蘇内牧温泉みんなの家



下村貴文氏



くまもと菓子まつりin阿蘇



足湯を楽しむ子供たち



古里さなえ氏（左）、末廣香織氏（右）

際学生コンペでこの「阿蘇内牧温泉みんなの家」の設計者を決める際、色んな学生に集まっていたき1等を決めました。九州大学と延世大学（韓国）の案が1等になり、当時4年生だった古里さんが頑張って色々やってくれました。阿蘇温泉病院の坂梨理事長、下村総院長をはじめ、皆さんにお世話になりながら、また設計では地元の太宏設計事務所にお世話になりながら、何とか完成させることができました。

古里さなえ（以下、古里） 設計者を代表してお話させていただきます。まず、この敷地は、阿蘇外輪山に囲まれた田園地帯にある阿蘇温泉病院の老健施設の一部にあります。元々この場所でデイケア施設の拡張が計画されていましたが、2012年の九州北部豪雨でこの地域が甚大な被害を受けたことによって、日常的にはリハビリテーション施設として活用でき、災害時には避難場所、支援施設にもなるような施設を建てるということで、2014年に『阿蘇に建つ「みんなの家」を付設する温泉付きリハビリテーション施設』というテーマで、くまもとアートポリスアジア国際学生コンペティションが開催されました。このコンペティションで延世大学（韓国）と九州大学の学生チームが選ばれ、熊本市の太宏設計事務所と共同で設計を進めることになりました。両チームの案に共通した多様な空間を大きな屋根で包むというコンセプトをもとに、病院側と意見交換を繰り返しました。実際の医療・福祉の現場でやっているイベントやユニバーサルデザインにも配慮したプランとし、最終的には雁行型の平面に大きな切妻屋根をかけるプランになりました。その後、着工目前の2016年4月に熊本地震が発生しましたが、関係者の皆さんの強い意志によってどうにか着工することができ、去年無事に竣工を迎えました。リハビリ施設としていくつかの小さな部屋が求められ、それらが区切られつつも、「みんなの家」として一つの大きな屋根の下でつながることを目指しました。リハビリルームから見渡せる「みんなの家」のキッチンや木の質感を生かした設えとし、誰にとっても親しみやすい場を創り出したいと考えました。この



足湯を製作する学生たち

ような家のような雰囲気が、施設利用者の方々にとって家庭での日常生活を意識したリハビリを行うモチベーションを高めるきっかけになるのではないかと考えました。外構の芝生張りや足湯の製作は、設計に携わった学生の手でワークショップの形で行いました。ワークショップの途中には、施設利用者の方々や施設職員の方々、また地域住民の方々などが様子を見に来てくださることもあって、学生たちにとっても非常に思い出深いものとなっています。ワークショップには、九州大学の学生と韓国からやってきてくれた延世大学の学生、それから施設職員の方々、太宏設計事務所の方々、また熊本県の職員の方々もいらっしゃって、みんなで仲良く作業を進めることができました。

雁行した外壁と大きな屋根がつくる不規則な軒下空間によって、足湯や芝生の丘など多様な空間をつくり出したいと考えました。芝生の丘は、腰高まで高さを合わせていて、施設の中に立つと、窓のすぐそばに植栽が見えるような形になっています。足湯に座ると、阿蘇の外輪山が見渡せるようなすごく気持ちいい場所になっています。この施設はこれからの拡張が続いていくということですが、その中心となるような、シンボルのような場所になっていくのではないかと考えています。今後、この施設が、日常的にはリハビリテーション施設として使われながらも、地域の人に足湯などを日常的に使っていただき、災害時にはここを拠点として活動ができるような、そういう場になっていけばいいと期待しています。

曾我部 内容の深い話をいただきました。下村総院長の「非常時だからこそ、つくらんといかん」という思いに至ったというのは大変印象深かったのですが、設計者として苦労した話をお願いします。

末廣 まずコストです。限られた予算の中で、特に外構、足湯も含め、皆さんに喜んでいただく環境をつくりたかったため、かなりコストが大変でした。かなりの学生の労力によりそのコストを補う形で、何とか実現することができました。

曾我部 古里さんは、まさか芝生を張るとは思わなかったでしょう。

古里 正直ここまで自分たちでやるとは思っていませんでした。足湯についても、コンクリートに下地を打つところから学生たちの手でやりました。現場でコンクリートを練るところからのスタートでしたので、少し驚きつつ、楽しかったです。

曾我部 まさに「災害に負けない熊本」を実践されたと思います。次は、高野病院で取り組まれた新築移転プロジェクトについてです。山田院長、川島さん、柳澤さん、よろしくお願いします。

大腸肛門病センター高野病院

山田一隆（以下、山田） 熊本地震における病院の対応という観点をハード面、ソフト面でお話しし、後ほど新しい病院の構想についてお話しします。高野病院は、科目は消化器系、内科、外科、肛門科、泌尿器科とあり、病床数は166床、久留米および宮崎に関連施設があります。こういう医療機関の各専門医修練施設、指導施設となっています。震災のときの旧病院ですが、旧耐震構造の施設で熊本地震に遭いました。前震直後は、入院患者全員に一次的に駐車場へ避難していただき、1階と2階だけで仮眠していただきました。翌日は、早朝から患者さん全員の安全と病状を確認し、外来診察だけ進めました。そして、全職員と職員のご家族の安全を確認し、施設内の破損状態を確認しました。そして、16日の午前1時25分に本震。前震のときに多くの皆さんには退院していただきました。夜の時点で、全ての患者さんに駐車場に降りていただき、検診車、病院の車、ストレッチャー、そしてブルーシートを使って、ベッドの代わりに利用して、皆さんに休んでいただきました。駐車場にテントを張り、診療なども実施する体制を立てました。そして、16日の昼の時点で、患者さんを今後どうするか検討し、同法人であるくろめ病院に絶対に入院が必要な患者さんだけ転送す

ることにしました。このことを受け、大腸肛門病センター高野病院とくろめ病院の災害時における相互運営協定書をすぐに作成し、お互いに助け合うことを明文化し、いつ何があっても対応できる協定書を震災の2日後につくりました。次に、職員への対応です。これは情報伝達の徹底と情報の一元化です。ホワイトボードに全ての情報と指示系統を書きました。毎日各部署の責任者が集まり会議をしました。そして、本震直後から、毎朝、職員とそのご家族の安全を確認しました。病棟の再稼働にあわせ、子供さんの一時預かり所をつくりました。

最後に、建物への対応です。16日に高野病院の工事を担当された岩永組に来ていただき、建物本体が大丈夫か安全を確認しました。

そういう中で、熊本では全て県庁が対策本部になり、行政が徹底した戦いをしてくれたおかげで、非常にスムーズに済みました。医療機関の状況は、休診をした病院・医療機関が全体の43%、その中で病院が約20%。しかし、これは4月16日の時点であり、6月1日には、各病院の外来、病棟のほとんどが対応できるようになり、病院・診療所が様々な形で対応することができたため、これだけの少ない死亡者数、そして死傷者数で済んだのではないかと考えています。このようにソフト面で対応すると同時に、ハード面での改善がさらに重要であると思います。

川島浩孝（以下、川島） 高野病院の設計者として、新しい病院の災害に備えるための対応についてお話ししたいと思います。今回、免震構造をご提案し採用されています。私たちは、病院のプロポーザルの提案に際して、その地域で歴史的にどの程度の地震が起こってきたかということをまず調べます。熊本でも江戸時代の初期に、かなり大きな被害を受けた地震が頻発していましたので、今回のプロポーザルでも、特に医療施設ということもあり、免震構造を提案しました。今回採用した免震装置は従来型の積層ゴムを使ったものではなく、お皿のような形の鉄製の器を使った装置



山田一隆氏（左）、川島浩孝氏（右）



駐車場への避難状況



大腸肛門病センター高野病院

で、地震動で建物全体がズレると、お皿の上で重力により元の位置に戻るという仕組みです。基礎や免震ピット掘削深さを従来型に比べてかなり小さくでき、経済的に免震構造を実現できたと思っています。

それから、設備面での災害への備えについてです。熊本は何といいましても、ペットボトルで売ってもいいような水でトイレを流している水源豊かな地域ですので、地下水の活用を考えました。48時間分の油を備蓄するとともに、補給が叶えば1週間でも2週間でも使えるような発電機も設置しています。また、メインの電源は、地震の挙動にも追従し、比較的生き残りやすい中圧ガスとしています。そのため、災害時には、電気、水、ガスを使って、冷暖房や給水を確保できるという性能を持っています。

それから、災害時にできるだけエネルギーを節約できる性能も重要であると考え、停電になった場合でも、できるだけ自然光や自然通風の恩恵を活用するという計画です。通風や採光により災害時にも機能させるために、色々なところに窓を設けています。病室では全てのベッドに窓を設け、病棟クラスターのラウンジにもそれぞれ開口を設けました。また、こういう大きな光の筒（光庭）が2本、建物の中に串刺しされているようなつくりにもして、昼間であればできるだけ熱源を節約しながら、風や光を取り入れることで、ある程度の活動ができるようにしています。

地震災害ではないのですが、行き止まりのない廊下を基本として避難経路を計画し、光庭や病室の窓から光を採りいれながら、ある程度の明るさの中で安全に避難できる経路をつくっています。

熊本地震発生時には、基礎ができ免震装置が半分ぐらい設置されている段階でしたが、構造強度的に問題ないことを確認して工事を進めました。設計者の案ですが、大屋根の掛かった部分は災害時のトリアージ空間として医療活動ができるのではないかと考え設計しました。

曾我部 主に発災前後でどういうことがあったのか山田院

長からお話がありましたが、建築のほうで苦労したお話をお願いします。

川島 工事のほうでは、やはり鉄骨工場が被災したり、職人が揃わなかったり、材料が届かなかったりと、結果的に3カ月の遅延が生じました。1カ月ぐらいは、ほとんど現場は止まっている状態でした。

曾我部 厳しい状況の中で3カ月の遅延に収めつつ、よりよいものができ、最近特に人気が高まっていると伺いました。3つ目は、熊本県総合防災航空センターのプロジェクトとなります。これは、警察航空隊基地と防災消防航空センターとの併設になっています。有浦さん、小川さん、よろしくをお願いします。

熊本県総合防災航空センター

有浦隆（以下、有浦） 今回の熊本地震では、防災センターで初動の救命救助の総指揮をさせていただきました。その中で、教訓となった事項を予防や事前準備という意味で説明させていただきます。西原村で取り組まれた事例をもとに、非常に役に立つ内容をお伝えします。西原村の大切畑地区では、建物の9割が全壊、9名の生き埋めが出ました。しかしながら、これを夜中に2時間半で助け上げるという奇跡を起こしています。事前の訓練と自助・共助精神がここにあったからだと考えています。平成15年から、まさに今回起きる布田川断層を想定して、全村民参加の訓練をやっていました。1年目が職員、そして2年目が全村民を入れてというような体制をずっとやってきています。ポイントは、それを村が指導したというもあるのですが、もう一つは、村民に色々な役割を与えています。例えば、「何々区長はこの避難所をしっかりと持ってね」ということで、その避難所を全部管理させたり、「うちの区は誰々がどうかなった」という話を報告をさせるという形にしています。これが功を奏して、消防団に連絡がいき、そして、寝室までその消防団は把握をしていたという状況です。夜中にもかかわらず、「ここは

誰々おばあちゃんがないんだよね」「そのおばあちゃんはこちらに寝ているんだよね」ということで、ピンポイントで開けて助け上げ、結局、2時間半で9名を助け上げたという、とんでもない奇跡を起こしました。そこでもう一つのやり方が、この区長たちが避難所を管理することによって、職員力が浮きました。職員力が浮くということは、そこに使っている職員をボランティア活動に振り分けることができたという、総合的に非常によくできた体制を取っています。また、避難所での色んな経験者を募り勤務員としています。「元看護師の人はいませんか」「自衛官の人はいませんか」「調理師関係者はいませんか」と募って、看護師の人にはケアを受け持たせ、自衛官には全般統制をさせ、調理経験者には色んな食事関係の体制を取らせるという見事な形をやりました。つまり、事前準備の好例になります。

今度は建築・建設という観点で調べてみたら、今年の7月5日の時点で北部豪雨がありました。このときに、朝倉や日田が被害を受けたのですが、この要因を分析すると、結局、橋に流木が流れて被害が出ています。では、熊本県はというと、土木部がちゃんと小国のほうでやっています。それが砂防堰堤で、流れ出した木を貯めて、水だけはちゃんと流れるといった見事な体制をやっています。要は、事前の準備や予防を考えて、“自らの命は自らが守る”という体制ができたところが、非常に良い結果を出しているという気がします。

防災航空センターについてですが、熊本空港の地域は、広域防災拠点構想の中で整備した土地で、防災ヘリが20機、自衛隊のヘリコプターが4機入る体制を取っていました。南海トラフ地震が起きたら、宮崎、大分、鹿児島に助けに行くために建物をつくろうとしていたところに地震が起きてしまいました。

小川次郎（以下、小川） 設計者として、航空センターの建築的な特徴をご紹介します。2015年にこの施設の設計プロポーザルがあり、私どもアトリエ・シムサを設

計者として選んでいただきました。その後、熊本市のライト設計と共同で設計・監理を進めました。熊本空港が、熊本以外の九州の県庁所在地まで概ね30分から1時間以内で、ヘリコプターで駆けつけることができる場所にあることから、ここが熊本の、そして九州の防災拠点に指定されたと伺っています。現在、消防と県警はそれぞれ別々のヘリコプター基地で活動されているのですが、1つの建物にまとめた航空センターとして計画することになったと聞いています。

東側が消防、西側が県警の施設になっています。滑走路の状況を見つつ、また空港の管制室とやりとりしながら、ヘリコプターに離陸の許可を出す航空管制の部屋を滑走路側に、ヘリ格納庫の周囲に消防、県警の事務室を配置しています。大きな特徴としまして、この建物はすべて平屋です。プロポーザルの時点では、一部2階建てだったのですが、施設の方々とお話をする過程で、平屋のほうが行き来がしやすく、迅速に行動できるということが分かりまして、結果的に総平屋としました。それからもう一つ、平面計画上の大きなポイントとしまして、建物のアプローチ寄り、中央辺りに大きな会議室が設けられています。同じヘリコプターを使うといいましても、消防と県警で日常時の仕事内容はかなり異なるそうです。ただし、大規模災害の際には、合同対策本部を設け、近隣に駐在している自衛隊を含め緊密に協力しながら救助や災害復旧にあたるとのことです。そこで、設計当初から、消防と県警の双方から行き来のしやすい、さらに建物エントランスに近い場所に大会議室を設けることを、大きな要望として伺っておりました。

構造計画上の特徴としては、大規模な木造建築になっています。先ほど、この建物は平屋だと申しましたが、低層部分は全て鉄筋コンクリート造です。ヘリコプターを整備する、洗浄する、物品を保管するなどハードな使用が想定されますので、1階は耐久性があり安定した構造性能をもつ鉄筋コンクリート造にしています。その上の部分に関しては、全



全壊した家屋（西原村大切畑地区）



有浦隆氏



ヘリコプター格納庫



小川次郎氏

て木造の建築として設計しています。現在、熊本県では、中低層の建物は積極的に木質化を推進しているということです。この防災航空センターも、木質構造とすることがプロポーザルの要項で求められており、それに沿った設計になっています。その中で考えたのは、特殊な集成材を新たに開発するような構造ではなく、住宅で使うような一般的に流通している12cm角の木材を用いて大空間をつくろうということです。構造上の安全性や耐久性を十分検討したうえで、敢えてそういう構造にしています。

外観は窓がランダムに開けられ、所々凹凸があります。防災施設というのは、どうしても日常的には印象の薄い用途ではないでしょうか。また、この建物は基本的にはヘリコプターを収容する倉庫なので、つるんとした外観の、なじみの持ちにくい外観になりかねないことを危惧していました。一方で、建物の中には、災害に備え日々懸命に活動されている方々がいらっしゃるわけです。ヘリコプターという機械だけではなく、血の通った人間がこの中で日々活動していますと、どこかでそうした人の気配が感じられるように、その点を意識して外観にメリハリを付けることを考えました。室内は、4mぐらいの高さまで全て鉄筋コンクリートで、その上に格納庫2つ、そして先ほどご紹介した大会議室の部分は、ちょうど木の箱をひっくり返して上から被せるようなつくりになっています。格納庫には、ヘリコプターの整備のために長さ30mぐらいの大きなクレーンが設置されています。つまり、建物自体は柔らかい木のつくりで、クレーンはがっしりとした鉄骨という、普通の建物とは少し違う見え方になっています。

現在は整備用具などを格納庫の中に広げて、自由に使っている状況です。ランダムに開けられた窓から光が入ってきて、格納庫全体が何となく明るくなるように心掛けて設計しました。基本的には、消防も県警も同じ木造の格納庫のつくり方です。精密機械のヘリコプターを収容する空間ではありますが、木を使うことでどこか柔らかい雰囲気

を出して、隊員さんたちが程よくリラックスした状態で防災に備えていただければ良いなと考えながら設計を進めました。木の香りに満ちた空間で、隊員さんたちがヘリコプターという精密機械の整備や降下訓練をする様子は、ちょっと不思議に感じられます。

曾我部 西原村のピンポイント救助など、今日お聞きするまで知らなかったのですが、素晴らしい準備が行われていたのだなと感動しました。この建物は、地震発生時は設計が進んでおり、ちょうど着工しようかというぐらいが、おそらく、地域の方々の再建が増え始めた時期だったように思います。そういったところで苦労されたことなどあればお願いします。

小川 地震が起きたのは、大体実施設計の最終段階でした。ほぼ図面もまとまり、工事費の目途もつき、あとは議会の承認を経て、予定どおり半年後ぐらいには着工できそうだと、ちょうどそういうタイミングです。震災発生後、勿論県の方々は震災の調査、復興のほうで大変忙しく対応されており、共同設計者のライト設計も、様々な形で災害復旧に奮闘しており、大変忙しくしていましたが、幸い私どもアトリエ・シムサは東京におりましたので、できる限り東京でできることは対応していくという形で、うまく連携できたと思っています。ただ、実際に建設が始まってから、災害復旧が優先されて木材が入手しにくかったり、木材加工工場の手配がつきにくかったりという問題は生じました。施工者や関連業者の方々を中心とした懸命な努力の結果、何とか予定された工期内に竣工できたことには大変感謝しています。何よりも、「こういうこと（震災）があったからこそ、この建物を一刻も早く実現するぞ」という強い意志を、県庁を含め関係者の皆さんから感じられたことは、設計者として大変心強く、また頭の下がる思いでした。

■ 第1部 ディスカッション

曾我部 最初にご紹介いただいた3つのプロジェクトは、い

ずれも人々の暮らしを下支えする病院やヘリコプターの災害救助活動に関わっているものだと思います。いずれも、本来であれば、被災時までには整っていたらというものだったと思います。今まさに完成し使われはじめ、まだ熊本は地震の影響からどのように復興していくかという真っ只中だと思います。その中で、それぞれの施設がどのように今活躍されているかお話を聞きたいと思います。最初に、柳澤さんからお願いします。

柳澤潤（以下、柳澤） 地震があったとき、私どもの事務所から2名の常駐者が現場におりました。前震があった後に、常駐している現場事務所に連絡が付かず、まず、生きているかどうかの確認を取るのに10分ほどかかりました。現場から電話が掛かってきて、「生きてます」というまず第一声があって、「現場事務所の中はめっちゃくちゃです」、「全部散らかっていて、窓ガラスも割れています」ということでしたので、「（何もなく一番安全な）基礎に逃げなさい」と言いました。もう一つが、既存の高野病院がどうなっているかということが気になりました。我々は、まず現場の監理をどうしていくかということに集中しました。そこで驚いたのは、現場施工は松尾建設と岩永組のジョイントベンチャーでしたが、彼らが非常に早く、高野病院や、それからそこで、本当に地域で困っている人たちに対してサポートしたということがありまして、ほぼ、食糧だとか、それから物資などの支給を、ゼネコンを通じてサッと支給されていました。これは我々、横浜や東京で生活している者にとっては、非常に安心感がありました。

曾我部 防災直後のスピーディな対応に非常に感動しました。全く予定されていませんでしたが、現場に常駐されていて基礎に逃げた張本人である永野さんから、一言だけそのときの様子をお話いただければと思います。

永野敦士 高野病院の現場の常駐監理をしていた共同建築設計事務所の永野です。本震があったとき、私とコンテナボラリーズの村野さんは、既に宿舎に帰宅していて、そこで

被災しました。もう死んでしまうのではないかというぐらい大きな揺れで恐怖を感じました。すぐにお互い連絡を取り合い、まず現場が安心だ、安全だということで、二人ともすぐ現場に移動しました。やはり現場に常駐している者として、現場がどういう状況かすごく不安だったので、真っ暗な中でしたが、ピット内の基礎にライトを当てて状況を確認したり、既存の高野病院の建物がどうなっているかと病院スタッフの方と連絡を取り合ったり、とにかく色々必死に対応したのを覚えています。

曾我部 当時の苦労あつての今日だと思います。阿蘇温泉病院に3,000人來られたというイベントのお話を伺いたいと思います。そろそろ「みんなの家」の増築計画の検討をスタートした事案例だと思ってお聞きしておりましたが、その後の活用の様子をもう少し補足していただきたいと思います。

下村 「みんなの家」は道路から見えないので、今回のイベントで、阿蘇温泉病院の奥にはこういう施設があることを地域の皆さんが認識され、良い施設と言っていたさきました。この近くに老人ホームをつくりましたので、「年を取ったらここに入ろうか」と言っていただけでもいいと思います。まだ敷地がありますので、今後できるだけ地域の皆さんの役に立つような場所、施設をつくりたいと思っています。

曾我部 コンクリートも学生たちが自分たちでやったということなので、是非、新たな展開を期待したいと思います。有浦さんのお話からすると、“自らの命は自ら守る”と、まさにそのとおりだと思いました。そのような活動と航空センターの活動が連携すると、より具体的なイメージが湧いてくると思います。連携する計画があればお願いします。

有浦 オペレーションルームというのを絶対つくってくれとお願いしました。隣に自衛隊の高遊原分屯地があるため、航空関係はここで意思の疎通ができます。したがって、この体制を取るべきだということで実現したため、色んなところでここは役に立つと思います。万が一、ヘリを動かすような



熊本県総合防災航空センター



柳澤潤氏



永野敦士氏



震災直後の工事現場状況（高野病院）

何かあったときには、私がここに飛んでくることもできますから、その意味でも非常に素晴らしい拠点ができたと考えています。連携はこれからできると思います。

伝えるべき教訓

曾我部 いずれの建物もこれからだと思います。今回登壇されている皆さんは、熊本地震の発災前から病院や地域防災航空センターという施設に関わられており、熊本地震以降、復興が進む中で、色んなことを進められて竣工を迎えられたため、色んな意味で共通しています。まさに、様々な経験から、伝えるべき教訓のようなものをそれぞれ感じておられるかと思います。一言ずつ、こういうことを教訓にしたい、あるいは、ご自分がこのような経験を次に生かしていきたい、建築を設計する方々においては、このような経験から設計するうえでの新しい眼差しを得たことなどを、プレゼンの順にお願いします。

下村 今回の熊本地震は、非常に公助が見られたと思います。私は透析関係の医療をしており、十数年前、熊本県の透析施設の災害対策部を立ち上げました。その頃熊本は、大きい地震は来ないと言われていましたが、今回の地震源の布田川断層があることは分かっていたので、備えておかなければということで立ち上げ、その頃から訓練などしておりましたので、今回の地震で透析の患者さんは亡くなっていません。やはり、事前に準備しておかなければいけないということです。災害対策を引き継いだ先生たちが、今、熊本県から全国に講演に行っています。特に、今後予想される南海トラフ地域には、十分準備をしておいてほしいとの思いで、今、講演活動をしていただいているところです。

古里 私が感じているのは、建築を設計する上で、100%安全につくることを勿論目指すのですが、どうしても100%というものはできなくて、そういうときに、建築家として、設計者として、何ができるかという、やはり日頃のコミュニティなどが大事なのかなと考えています。安全につくること

は勿論ですが、建築家として、コミュニティを生むような場所をつくるのがこれから大事になってくるのではないかと思います。コミュニティがあって、人がコミュニケーションを取っていることで、災害時にも何かスムーズな連携が図れたりということもできると考えていて、コミュニティの場をつくるのが大事なのではないかと感じています。

末廣 今回の阿蘇温泉病院の「みんなの家」は、被災者のためにつくられていたわけではありませんが、熊本地震の後にかなり多くの「みんなの家」がつくられました。その中でも、特に居住者の方々と一緒につくった「みんなの家」は、本当に皆さんと力を合わせて、コミュニティをそこで再構成する非常に良いきっかけになったと思います。建築というのは、ものをつくる過程でそのコミュニティの力を育むきっかけになります。特に上棟式のときの餅まきなど、非常に盛り上がります。そういうのはすごく大事なというのが1点です。それから、今年、福岡でも大水害がありました。そのときに仮設住宅がつけられましたが、それは全部木造でつけられました。すぐ木造でつけられたのですが、それは色々な震災や被災の状況を見て、福岡県も最初から木造住宅関係の協会と協定を結んでいたからです。したがって、そういった知恵の共有といったことが今後非常に大事になると思います。

山田 まずこの熊本地震を経験して、非常に重要なことは、まずソフト面での対応、そしてハード面での対応だだと思います。まず、このソフト面では、いわゆる対策本部をどこに置くか。阪神淡路大震災、東日本大震災、その全てが、本部が不明瞭な戦いでしたが、今回は熊本モデル、いわゆる県(行政)が対策本部となり、様々な形で対応できました。今、全国でも色々な病院学会などで、熊本モデルとして高く評価されています。こういうモデルを全国的評価に基づいて、全国的に非常に勉強したいと言われていいますので、是非、行政でしっかり対応していただきたいというのが一つ。

もう一つは、ハード面ですが、阪神淡路大震災では、耐震構

造というのがほとんどない時代でほとんどの家が壊れました。ところが、阪神淡路大震災以降に、法的に耐震が進められ、熊本地震のときは耐震構造の建物がすごく多かったため、震災による死亡数などが減ったのではないかとされています。今後の対策としては、やはり免震構造などに少しお金を使うことで、震災が起こったときには大きな助けになりますので、そういうハード面での方針を国あるいは行政がしっかりつくっていただければと思っています。

川島 例えば200ベッドの病院ですと、月5億円ぐらいの収入があるのでしょうか。地震で2カ月診療が止まると10億円の減収で、かつスタッフの方々の雇用も維持する必要があります。活動の継続を保障するハードを経済的に作り出すということが、やはり我々建築に携わるものの責務であると思っています。実は免震構造は、建物本体への地震入力を3分の1に減退させますので、上部構造を経済的に設計できるという意味でそんなに高価なシステムではなくなってきています。

柳澤 今回、熊本の大地震を経験させていただいてすごく感じたのは、災害はすぐそこにあるということです。もう一つは、今回、機能しなくなった病院施設が随分報道されました。そこで、公益系施設が最も災害時に活動拠点として、健全な運営が行われなければいけないのではないかとということとをすごく気付かされました。高野病院はくるめ病院という相互扶助できる施設があったおかげで、大きな難を逃れることができたということがありました。病院や公共施設全般に、災害拠点施設もしくは避難拠点施設になり得ることを位置付けたほうがいいのではないかと、今回、この経験をして考えました。

小川 今回の設計に関わらせていただく以前は、個人的には防災という問題は荷が重いように感じ、どこかで心理的な障壁をつくっていたような気がします。今回の経験を通して、日常の生活の中から、ささやかな形でいいから「防災」という意識を持てることが理想だと実感しました。あくまで

もプレッシャーに感じない範囲で、日常と災害時は地続きであるという覚悟を持つことが大事だと思います。これまでも、地域の方々や小学生など、消防航空センターには見学者がいらしていたと聞いています。そういうことは素晴らしいと、改めて思った次第です。勿論、隊員さんたちのお仕事ぶりを見に来るのかもしれませんが、熊本県には災害に備える施設がしっかりとあって、日頃から接する機会を持てれば、万が一大きな災害があっても、大きな精神的ダメージを受けずにスムーズに行動できるようになるのかなと考えています。

曾我部 意識しておくべき様々な視点が得られたと思いますし、それぞれの視点が「自然に開き、人と和す」のテーマにもつながっていると感じました。本日はありがとうございました。



曾我部昌史氏



4病床の病室の様子(高野病院)

第2部 対談 「熊本地震からのすまいの再建」

コーディネーター

伊東豊雄（くまもとアートポリスコミッショナー）

パネリスト

伊東豊雄（アートポリス）× 荻上健太郎（日本財団）× 奥山恵美子（仙台市）× 蒲島郁夫（熊本県）

第2部 対談『熊本地震からのすまいの再建』

主催者あいさつ

蒲島郁夫（以下、蒲島） 本日は、師走の大変ご多忙な時期にも関わらず、このように沢山の方々がこの熊本県庁に来てくださり、心より感謝申し上げます。また、パネリストの皆さまにおかれましても、ご多忙の中、遠方よりお越しいただき、心より感謝申し上げます。昨年発生しました熊本地震においては、アートポリスコミッショナーである伊東先生からご提案いただき、仮設住宅を木造で整備するだけでなく、従来に比べてゆったりとした住居配置としたり、仮設団地に木造の「みんなの家」を整備することができました。それにより被災者の痛みを最小化する取り組みができたのではないかと考えています。被災した市町村においても、“安心”と“あたたかさ”と“ふれあい”のある、熊本らしい災害公営住宅の整備が進められています。しかし未だ約4万人の被災された方々が仮設住宅などで生活されています。県では「すまいの再建」を最重要課題とし、1日も早い生活再建に向け、全力で取り組んでいます。このような中、くまもとアートポリスでは、被災者の「すまいの再建」を進めるための道筋を一緒に創り出すことを目的に、『一緒に考え、一緒につくる』をテーマにした「くまもとアートポリス建築展」を開催しています。今回のシンポジウムでは、被災された

方々が自宅再建や災害公営住宅等への入居など、「すまいの再建」に向けた取組みを安心して進められるよう、皆さんと一緒に考えていけたらと思っています。シンポジウムの第3部では、「くまもとアートポリス推進賞」の表彰式を開催します。受賞者の皆さまに心よりお祝いを申し上げますとともに、受賞された皆さまの熱意と努力に対し深く敬意を表します。また、「くまもとアートポリス推進賞」の選考にご尽力いただいた北野先生をはじめ、選考委員の皆さまに感謝申し上げます。本日は盛り沢山の内容となりますが、最後までお付き合いいただくとともに、引き続き、熊本の復旧・復興にご支援・ご協力を賜りますようお願い申し上げます。私からのあいさつとします。

伊東豊雄（以下、伊東） 熊本地震から、ほぼ1年と8カ月になります。この第2部では、『熊本地震からのすまいの再建』と題しまして、特に「すまい」を中心に、この1年8カ月の間に熊本県がどのようにこの問題に対応されてきたか振り返ってみたいと思います。また、アートポリスがこのプロセスにおいて、どのように機能してきたかということも検証できたらと考えています。そこで、第2部は、前半、後半2つに大きく分け、前半はこれまでの1年8カ月を振り返り、後半は、まだ多くの方々が仮設住宅に住んでおられるということで、これから「すまいの再建」に向かってどう対応していくべきかという、これから先のことを議論できればと考えてい



ます。順番として、蒲島知事、そして、日本財団経営企画部長の荻上さん、奥山前仙台市長という順でまずお話をいただきますと思います。

1年8カ月を振り返って／アートポリスの検証

蒲島 私は、知事になる前は、東京大学で政治学を教えておりました。そのとき、私がよく使ったのは、「政治は可能性の芸術であり、不可能を可能にしていこう」と定義しました。今、熊本県政は、不可能を可能にしようと進めています。しかし、県政の大きな目標は、「県民の幸福量の最大化」であり、職員にも「できないと思うな、どうしたらできるか考えよう」、「皿を割ることを恐れるな、失敗を恐れずにチャレンジしよう」と言っています。熊本県庁は、おそらく日本で最も挑戦する集団に変わったのではないかと考えています。これがとても災害対応に大きく貢献しました。県政には、3つの視点があると思っています。「決断すること

（決断の政治）」「目標を掲げてそれに進むこと（目標の政治）」「災害などに対応すること（対応の政治）」です。まず、最初に決断したのは、財政再建です。言うのは簡単ですが、私の給料を100万円カットし、7年間で1,500億円の借金を返すことができ、貯金も倍にすることができました。実は、災害対応では財政再建がとても大事で、財政再建していなかったならば、躊躇なく災害対応できなかったのではないかと考えています。次は、目標の政治です。我々の目標は、県民の幸福量の最大化であり、この目標に貢献する4つの要因があります。1番目はエコノミー（経済的豊かさ）、2番目はプライド（誇り）、3番目はセキュリティ（安全・安心）、4番目はホープ（夢）です。熊本県の政策の1つに、くまモンの政策があります。くまモンはこの4つの要因に大きく影響しています。経済的な効果、熊本県民の誇り、安全・安心、それから夢にもくまモンは貢献しています。では、経済的效果はどのくらいあるのか。何と平成28年のくまモン関連商品



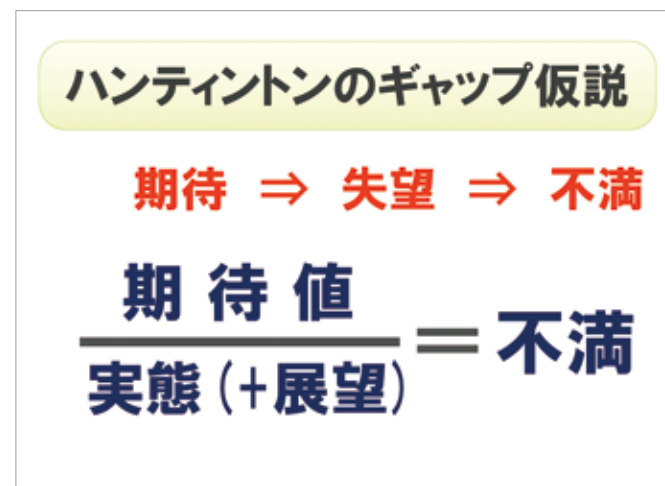
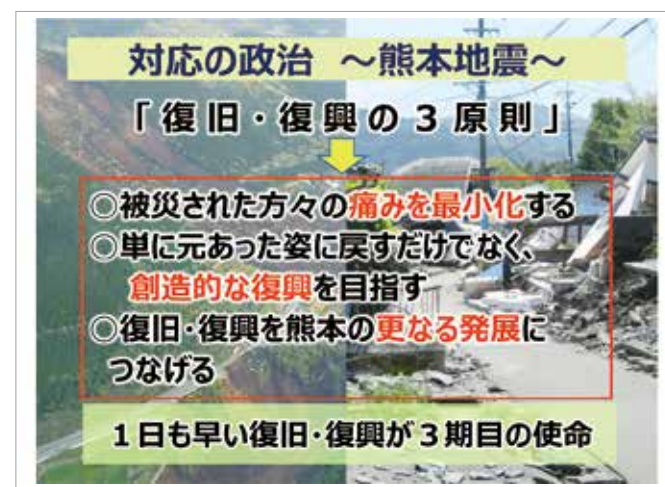
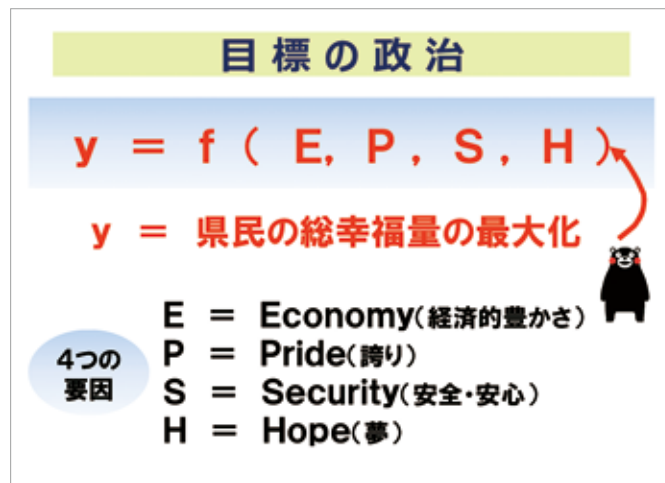
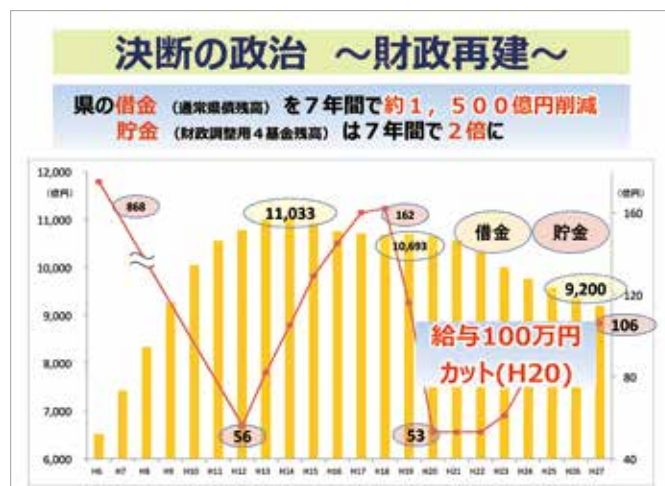
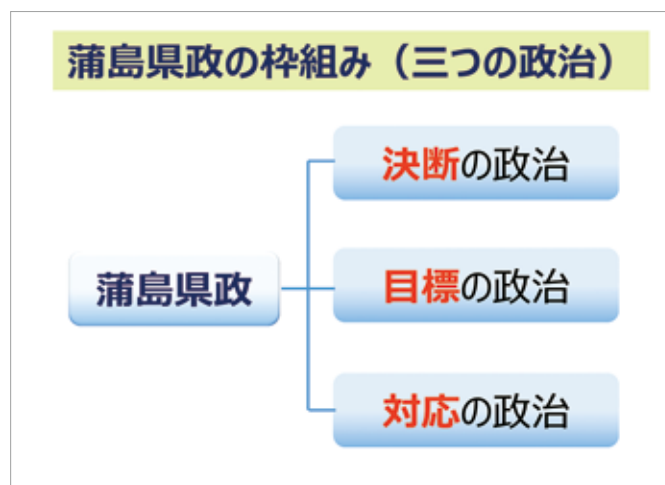
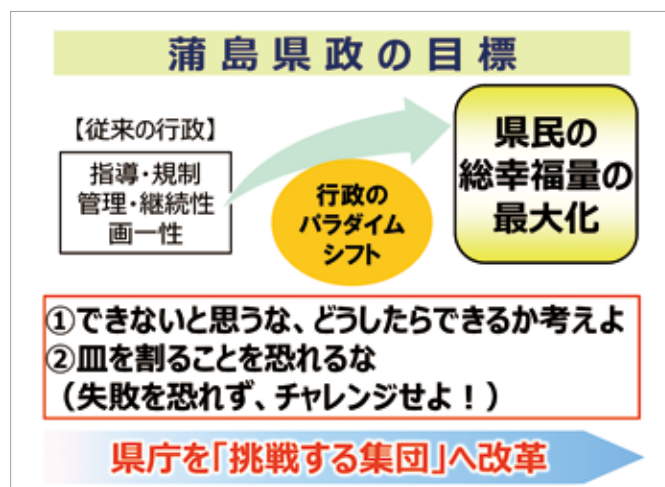
蒲島知事



伊東豊雄氏



の売り上げは1,280億円とすごい額なのです。今、これをさらに高めようとしています。また、くまモンは、全ての世界に開かれています。くまモンの使用料は無料なので、世界中のあらゆる人がくまモンの共有空間に参加できます。非常に開放的で、分権的です。参加者は、この共有空間で利益を得ることができます。一般的には、県税を使っているのに、何故世界に開かれるのかと批判が出るかもしれませんが、くまモンはあまりにも世界中で愛されているため、そういう批判も出てこないのです。最後に、対応の政治です。これが今日のテーマですが、対応の政治ということで、私は熊本地震が起きたときに3原則を職員に対して示しました。1番目は、「被災された方々の痛みを最小化する」。2番目は、「単に元に戻すだけでなく、創造的な復興を目指す」。3番目は、「復旧・復興を熊本のさらなる発展につなげる」。この3原則があったからこそ、対応の政治がうまく進められたと思っています。私が3期目の知事になった日が本震の日で、これからの4年間で復旧・復興を成し遂げることが私の使命ではないかと感じました。政治学の私の恩師は、サミュエル・P・ハンティントンですが、この人が唱えた理論にギャップ仮説というものがあります。それは期待値と実態で人々の不満が高まるという理論です。だから期待が小さいうちになるべく実態をつくり、実態がつかれないときには展望を示す。そうすることで不満が抑えられるという、ハンティントンのギャップ仮説に沿った災害対応でした。そして、6月に「くまもと復旧・復興有識者会議」から提言を受け、8月には「復旧・復興プラン」を策定し、創造的復興に向けた4つの柱を示すことができました。「県民総幸福量の最大化」という目標に向け、経済的にも誇りを持てる安全・安心で、そして夢のある「復旧・復興プラン」をつくらうというものでした。1番目の柱は「すまいの創造」。1日も早い生活再建が必要で、すまいができて初めて心の復興ができます。心の復興ができて初めて熊本地震からの復興ができるのではないかとということで、「すまいの再建」を最重要課題としました。2番目



の柱は「仕事の創造」。グループ補助金で、商工業の創造、再建をしようというものです。3番目の柱は「熊本の宝の創造」。阿蘇や熊本城などの再生です。4番目は「世界とつながる熊本の創造」。コンセッション方式で阿蘇くまもと空港の創造的復興を行っています。八代港をクルーズ船の拠点として、将来的には年間200隻のクルーズ船が来るようにして、年間100万人の方々がこの港を利用できるよう進めています。今、蒲島県政がどのような形で創造的復興をしようとしているのかという、1つの哲学であり、これを前提に取り組んでいることを皆さんに知っていただきたいと思います。

伊東 知事のお言葉としては、相当個性的と言いますか、ご自身の言葉で語ってくださいました。政治は可能性の芸術であると言われる知事は、全国でも珍しいのではないのでしょうか。奥山さんにも少し伺ってみたいと思います。

奥山恵美子(以下、奥山) やはり、知事が大変明快な、政治が果たすべき役割、特に大規模自然災害という、いわば人生の中で最大の不条理に県民が直面したときに、政治に何ができるかということを大きなところから捉えて、実際の実務に入られたことが、今の熊本の復興を非常に特徴付けていると、感心しながら伺いました。

伊東 私も対応の政治の3つの原則を4月に朝日新聞で読み、大変感心しました。明日のことはどうなるんだという批判があることを覚悟の上で、先を見据えて仰ったことが、この1年間に大きく効いてきているような気がします。荻上さんは、日本財団の経済企画部長です。日本財団は、今回、「みんなの家」に関して大変大きな貢献をしてくださっておられます。また、学生たちが「KASEI(かせい)」というグループをつくって仮設住宅に行き、様々な支援活動をやってくださっているのですが、その活動に対しても、日本財団が大変なご支援をしてくださっておられます。

荻上健太郎(以下、荻上) 熊本地震に関しましては、「わがまち基金」という形で「みんなの家」のプロジェクト、キ

リングループの皆さんと一緒にやっております「キリン絆プロジェクト」などで、ずっと熊本に通わせていただいています。今日は、すまいがテーマですので、主には「みんなの家」、あるいは「わがまち基金」で取り組んでいる住宅再建の利子補給でのご支援のお話などを中心にお話したいと思います。元々「みんなの家」の取り組み自体は、熊本県が中心に、伊東先生にアドバイスをいただきながら進められているプロジェクトです。その中で、どうしても公的制度の対象にできない部分があると相談をいただき、日本財団の「わがまち基金」による「みんなの家」の取り組みが始まりました。具体的には、対象になりにくい小規模の仮設団地でのコミュニティ形成の拠点としての「みんなの家」の整備を、日本財団として協力させていただくことで、昨年からスタートしているところですが、比較的建设物はこじんまりとしていますが、みんながここで温かく会話をしたり、お茶を飲んだりできるような場所を提供していこうということで行っています。現在のところ、11カ所の計画のうち、7カ所で完成し、仮設で暮らされている皆さんにお使いいただいているところがあります。「みんなの家」というハードだけではなく、仮設住宅で暮らされている皆さん、あるいはKASEIの皆さんなどと交流して、新しいコミュニティの基盤をつくっていこうという取り組みも、学生の若い力、あるいは元気がやはり大きく役立っています。これまで紹介してきた「みんなの家」は、仮設団地での「みんなの家」ですが、今、熊本県建築課の皆さんと相談しながら、公民館の再建に「みんなの家」を活用していこうと話をしており、10カ所で計画しているところですが、考え方は同じで、普段の交流、コミュニティの拠点となっていた場所が大きな被害を受け、地元の負担や制度の制約もあるので、仮設団地だけではなく、被災を受けた地域の中での交流拠点、コミュニティの拠点としての公民館の再建に、「わがまち基金」でお手伝いをしていきたいと考えています。

熊本地震への日本財団の支援活動について、簡単にご紹

介します。熊本県と日本財団は、地震直後の4月26日の段階で、この復興に包括的に連携をして取り組んでいこうという協定を結ばせていただきました。この協定を結ばせていただいたのは、東日本大震災での教訓からです。それは、東日本大震災のときには、我々日本財団も発災直後から闇雲に駆け回っておりまして。しかし、どうしても闇雲に駆け回ると、全体像が見えません。今回は、この発災直後に復興の全体的な指揮をお取りになる県の皆さんと包括的な協定を結ぶことで、常に、お互いに少し俯瞰的な視野や会話ができるように関係を構築して、少し複眼的に俯瞰する目と、目の前の課題に対応する目との両方で取り組んでいきたいということで行ったところです。

直後の活動としては、瓦礫撤去、学生のボランティア活動のサポート、災害ラジオ、弔慰金・見舞金の配布です。最後に、熊本城の再建のお話をさせていただきます。発災直後に、私たちは、熊本県との包括協定の中で、熊本城の再建に30億円のご支援を入れました。目の前の生活に困っている方、命の危機にある方がいる中で、お城の再建に30億円突っ込む余裕があるなら、その方々を助ける支援をするべきではないかというようなお声を、かなり沢山いただきました。しかし、長い先を見たときには、熊本県民の皆さんにとっての心の支え、あるいはプライドの1つである熊本城の再建に手を差し伸べようとする外部の人間がいるんだということ、を、きちんとお伝えすることがすごく大事ではないかということで、リスクを承知で掲げさせていただきました。また、キリンさんとの協定のお話ですが、被災した子供たちに、日頃を忘れる機会を通じて子供たちに笑顔を取り戻してもらいたいということで、1泊2日のクルーズの機会を提供させていただきました。あるいは、仮設団地に入られていない被災者の方やみなし仮設などに入居されている方も沢山いらっしゃいますので、KVOAD(くまもと災害ボランティア団体ネットワーク)という地元のボランティア団体のネットワークの皆さんと一緒に、みなし仮設に入られている方々にお

声かけをして、普段バラバラなところに住んでいる皆さんが一堂に会して、ちょっと楽しむお祭りのようなものを作って、新しいつながりをつくっていこうという取り組みもサポートさせていただいているところです。

私ども日本財団も発災直後に、必ず本部で、みんなで会議をやります。その中で、冒頭、いつも会長の笹川が申しますのは、「今日、この会議に座っているメンバーみんな、自分ができること、あるいはやれると思うことをまず全員言ってくれ。その中から、実際にとにかくやる。何をやるかという議論をしていこうじゃないか」ということで、いつも災害対策本部会議が始まります。発災直後の4月26日に熊本県と協定を結ばせていただいた段階では、総額93億円でしたが、1年半たち蓋を開けてみましたら、約130億円のご支援をさせていただいていました。これは決して額の問題ではなく、やはり包括協定により、大きな俯瞰的な目と、目の前の対策の目の中で、必要なこと、やるべきことを一緒にさせていただいた結果だと思っています。

伊東 「みんなの家」のご紹介もありましたが、奥山前市長のお話を伺ったあとに、「みんなの家」について議論させていただきたいと思います。

奥山 仙台市に、「せんだいメディアテーク」という公共施設があるのですが、その設計をしていただいたのが伊東先生というご縁で、東日本大震災のときには、熊本の皆さんから大変なご支援により、仙台市の仮設団地の1つに「みんなの家」の第1号(仙台市宮城野区のみんなの家)を建ていただきました。そのことを通じて、熊本県民の皆さんともご縁ができた結果、その「みんなの家」が今は解体されて別のところに移築されていますが、移築先の町内会長も、熊本の皆さんと交流が深まっており、当初予期しないご縁ができあがりつつあることに、感謝申し上げます。

震災のときには、仙台では約1,000名の市民の方々が亡くなられ、3万棟ぐらいが全壊、そしてほぼ同じくらの3万棟弱が大規模半壊という被害状況でした。被災した住宅は、

半壊なども入れると10万棟ぐらいで、実際にみなし仮設も含めて仮設に入られた方は、多いときで1万2,000世帯でした。仙台市内で被災された方は、既に1年ほど前に、みなし仮設もプレハブ仮設も全て退去されて、現在仙台市内でみなし仮設に入っていられっしゃる方は約800~900世帯ぐらいです。しかし、仙台市で被災された方々ではなく、福島県や同じ宮城県でも石巻など市外からいらっしゃって生活再建を仙台市でなさろうという方が残っている状況です。プレハブ住宅の仮設団地は、1年ほど前に全て仙台では解体撤去されており、その段階の生活再建は終わったという時期になっています。一番多いときでプレハブ仮設には1,500世帯の方々が入っていられっしゃり、最終的には仙台市内に十数カ所の仮設団地ができあがりました。

被災したあと、伊東先生から、「プレハブ仮設住宅はあまりにも劣悪な環境だと思うけれども、それを根本的に直すというのは今の段階ではなかなか難しい。せめて、被災された方々の心の拠り所とコミュニティの核になる“みんなの家”のようなものをつくりたいんだけど、どこか良い場所があるだろうか」というお話をいただきました。それまで、仮設団地に集会所は必要だろうとは思っていたのですが、「みんなの家」が必要だろうという発想は残念ながら全く私の頭にはありませんでした。なるほどと思いました。「集会所」と「みんなの家」。確かに同じことをやるようではあるが、「みんなの家」という言葉には、何かとても心温まるものがあり、前に向かえるような気がし、何よりも、なくなったものが「家」であるのに、そこに「みんなの」と付くが、「家」ができるということはとても素晴らしいと思いました。しかし、復興庁とどう話しても、納得させられる訳もないだろうと思いました。そうしたら、「奥山さん、とにかくお金の心配とか、材料の心配とか、そういうことはみんなこっちでやるから。とにかく、あなたは地元の方々がこの“みんなの家”を欲しいと思う候補地というか、受け入れて一緒に未来に向かって歩むという、そういう人たちがどこにいるかを探して欲しい」というお話



日本財団みんなの家の完成式



仮設住宅におけるKASEIと入居者の交流



荻上健太郎氏



奥山恵美子氏



仙台市宮城野区のみんなの家

があったので、それならばということで、宮城野区福田町の公園にあった仮設団地にお願いしました。

一番良かったなと思うのは、被災して2カ月の全く先が見えない時期でしたが、そこに「みんなの家」を建てるという1つの新しい目標ができた結果、皆さんが意見を言ったり、話し合ったりすることをもう一度自分の生きる日々の中で、取り組み始めたということです。例えば、行政が集会所をつくるように、2案ぐらいあって、「じゃあ、どっちがいいですか」と言って、「さあ、早く決めてください。じゃあ、あと時間がないから2週間ぐらいで」と言われて、ほとんど押し付けのようにやってしまっは、あまり生きるプロセス、気力というものには作用しなかったと思います。ワークショップで伊東事務所の方々や、アートポリスに関わる方々も含めて、沢山の方々が関わってくださって、何をしたいか、どういことを大事にしたいかということを丁寧に聞き出してくださいました。聞かれることによって、自分一人や自分たちだけの話し合いでは言語化できなかったかもしれない「縁側があるといいね」「なんか囲炉裏みたいな感じでストーブがあるといいね」「カラオケしたいから、あの、ほら、グルグル回って回る、あのミラーボールがあるといいね」と、そういう色々なものが思いとして出てきたことが素晴らしいと思います。色々なタイプの「みんなの家」ができ、その第1号になったということを大変うれしく思っています。

その「みんなの家」の親元である熊本県が、知事の先導的な考えによって、また日本財団のおかげもあって、ほぼ全ての仮設団地に「みんなの家」を整備されたことは、復興のまちづくりに向けて大きな一歩となり、そこで沢山の活動がされていることを本当にうれしく思います。日本の震災復興、災害復興は、自治体における実践例の積み重ねでしかないと感じています。“しかない”というのは、日本の国政が災害法制をきちんとした形で整えるというところに至っておらず、実例でしか積み上がっていかないという部分があります。仙台も中越や阪神の実例や実施されたことの上に

立って、東日本でも対応し、少しはバトンが先に渡ったかなと覚えているところ。その災害対応のバトンを受け取って、今、さらに先に向けて積み上げていただいているのが熊本の復興だと思います。今なされているご苦労、多々あるとは思いますが、さらに日本の災害対応がより高いところに向けて進んでいくように、期待を申し上げたいと思いますし、また東日本もまだまだこれから取り組むべき課題がありますので、その自覚のもとに進んでいきたいと思っています。

伊東 この辺で、「みんなの家」を一度最初から整理させていただきたいと思います。震災後2011年の5月ぐらいに、ちょうどアートポリスの会議があり、そこで初めて「みんなの家」という提案をさせていただきました。その背景には、それ以前に避難所を訪ねたときに、「自分たちはあんまり仮設に行きたくない。特にお年寄り、プライバシーは守られるかもしれないけれども、私たちが望んでいるのは、プライバシーの問題より、みんなで1日ここで一緒にご飯を食べられたり、一緒に寝られることなんだ」と聞いて、それならば、仮設住宅に、少しでも癒やされるような場所をつくることなら、我々の力でできるだろうというのが最初の発想でした。そこで、5月のアートポリスの会議で、その趣旨を提案したところ、その内容がすぐ知事に伝わりました。これもなかなか熊本県ならではのといいますか、下の会議で挙げたことが直接知事に伝わることは、なかなかないことだと思います。知事はいい話ではないかと仰ってくださったようで、建設の資金と、熊本は木材が豊富だから、材木も出しましょうと言ってくださいました。では、どこにつくろうかとなったときに、一番親しくさせていただいていた仙台市の奥山市長に話したところ、これまた即、ここの団地でしたらいいのではないかと、非常に話が早く、半月ぐらいのうちにまとまり、2011年の10月に完成しました。そういう非常に奇跡的なネットワークがあって、今回熊本では100棟近い「みんなの家」ができることにつながったわけです。

仙台市に建設される「みんなの家」の木材は、湯前町と水上村かた提供され、プレカットされた後にトラックで現地に届けられました。このときに、もう一つ泣かせる話があるのですが、湯前町の主婦の方が材木と一緒に漬物をドライバーに託し、そこから熊本と仙台の色々なネットワークが生まれたのです。これが、その始まりでした。宮城野区の「みんなの家」は、元々あった仮設団地が解体されたので今年の春に移設（新浜みんなの家）し、新たにここの住民の多くの人移っていった家の近くに再建されました。この家を移すのは、つくるよりお金がかかります。これも奇跡的な話なのです。これは奥山市長がほとんど最後のお仕事としてやってくださった。くまモンがここにも鎮座しておられて（笑）、前と同じように、またここでもオープニングでお酒やご馳走を振る舞ってくださいました。本当に、私個人に取りましても、この最初の「みんなの家」は、非常に思い出深い「みんなの家」です。

東北と今回の熊本では、若干シチュエーションが変わり、東北では、お金の出所がないということで、我々建築家が国内・海外の団体や企業などからお金を集めてきて、6年掛かってようやく16軒できました。熊本では、小規模な仮設住宅ではできないのですが、20戸以上の団地になると、1棟の集会所、あるいは談話室が計画される。通常、それはプレハブの仮設と同じ構造体のもので、言ってみれば、味も素っ気もない本当に集会するための集会所なのです。それを今回知事が、全部木造の「みんなの家」にしようということで、84棟ができました。また、4,303戸の仮設団地のうち、683戸が木造の仮設住宅になりました。約15%は木造でつくられたことになります。これは、最初に知事がアートポリスの働きかけによりとおっしゃっていましたが、知事の発案なのです。私が4月に熊本に伺ったときには、もうそういう体制ができていて、アートポリスの局長（建築住宅局長）から、「もっといい配置計画をつくれ」と。着いたらその場で描くように言われて、もう「今日描かないと間に合わない」と

いうことで、桂先生と僕とで、机を並べてシコシコ描かされました（笑）。そんなことから、これだけの木造の仮設団地と「みんなの家」ができました。国との関係や、従来の前例を変えていくのは、非常に大変なことが色々おありだと思うのですが、知事いかがでしたでしょうか。

蒲島 前例がないことを国に要望するのはとても難しいというのは、奥山さんもお存じだと思います。ただ、「みんなの家」を仙台にオープンしたときに、我々は木造で仮設住宅をつくろうという考えでいたため、阿蘇の大水害のときには全て木造でやりました。次の日には、すぐにでも仮設をプレハブで建てますよということで、業界の方がいらっしゃいました。その壁を越えるのがとても難しいのです。しかし、熊本県のスタッフはすごいなと思ったのですが、3原則の第1、「被災者の痛みの最小化」をずっと頭の中で考えていて、阿蘇でとても喜ばれたため、自分たちで木造の仮設住宅をつくと決めてくれました。これを周りの人に納得してもらうのは随分大変だったと思いますが、頑張ってくれました。それから、敷地も1.5倍ぐらいに広めに確保し、通路をつくり、ペットを飼えるようにしようと。そういう形で、仮設住宅における痛みの最小化を実際に考え、さらに、「みんなの家」もほとんどの仮設団地につくることができました。熊本での前例が、次に震災が起きたときに活かされる方向になるのではないのでしょうか。前例をつくることは難しいけれども、つくれば、次の役に立つと。元々は敷地の中にびっしり住宅をつくるのが通例ですが、そこに余裕を持って配置したというのが伊東先生の案で、それをやり遂げたというのはすごいなと思っています。

伊東 仮設住宅は、2年で消えるのだから、木など植えたら困るというのが通常のスタンスなんです。でも、実際には、東北の例を見ていると、今6年たってもまだ何万かの人が住んでおられるわけです。そうすると、どうやって癒やされるのか。木も植えたいということで、今回は、「みんなの家」の前に、桜の木を1本ずつ植えることが、ドイツの「カール・



湯前町と水上村から仙台へ出発する木材



湯前町の主婦からドライバーに託される漬物



オープニングイベント（新浜みんなの家）

細かさがやはり必要だと思っています。

伊東 それでは、知事のほうから、これからの復興に関してお話をお願いします。

蒲島 一番災害対応で私が感じたのは、「仮設住宅まではやりますが、それから先の再建は自分でやってください」という国のスタンスです。しかし、本当に皆さんが復興したと思うのは、自分の自宅を再建したとき、はじめて復興ができたと言えます。そこまでやつぱりちゃんと見なければいけないと思っています。6割程度の方々は自分で好きなように家を建てられるでしょう。しかし、例えば、何千万円も出せないという方々には、くまもと型復興住宅があります。そのモデルハウスを一番大きなテクノ仮設団地の中に展示しており、多くの方々が今訪れておられます。ただ、やはり資金面など様々な問題がありますので、熊本県は躊躇なく自宅再建をしてもらおうと、復興基金を使って、利子補給したりしています。くまもと型復興住宅を建てようすると、外構まで入れて約1,300万円ぐらいになります。それで国や日本財団からの利子補給など、様々な形で支援の手が差し伸べられているため、自己資金850万円を借りた場合のパッケージをつくっているところです。60歳以上の方にはなかなか銀行がお金を貸さないという問題も指摘されていましたが、リバースモーゲージという制度を活用すると、土地と建物を担保に、返済は利子分だけで済み、生涯自分の家に住むことができます。月々の負担が1万5,000円。災害公営住宅の一番小さな部屋でもこのくらい掛かるため、ご高齢の方にご提案しています。それから、子育て世帯、若い世帯の方には、くまもと型復興住宅を建てる場合、利子は熊本県が負担するため、月々の元金だけで済み、35年間の支払いで、月々の負担が2万円。2万円であれば家賃よりも安いので建てられるのではないのでしょうか。被災された方々の多くは、土地を持っていらっしゃるの、この2つを選んでいただくよう提案しています。

また、もう家は建てないという方がおられますので、賃貸住



くまもと型復興住宅(モデルハウス)

すので、民間の賃貸住宅に入る方も3分の1ぐらいはいらっしゃいました。では、何故みんなが復興公営住宅に行くのではないのかというと、子供がそれまでの4、5年間で、小学校など色々なところに通っていると、その学校を転校したくないとか、息子さんの家の近くがいいとか、色々な家庭の事情があるため、復興公営住宅が建てば全てが終わるという訳ではないということです。最後には個別の調整に入っていかなければならないということになります。これは阪神淡路のときの神戸市のご経験から伺ったのですが、「市長さん、なるべく早く被災された全戸の住宅の個別訪問をやってください」というふうに、私は教えていただきました。やはり最後は個別の方々の収入と、家族状況と、ご本人の判断力と、ご本人だけの判断ではちょっと難しいという方がいらっしゃったら、その方にとって一番ふさわしいと思われる道筋と一緒に考えたり、場合によっては、一緒に申し込みに行ったり、一緒に弁護士さんのところに行ったり、最後には、福祉施策につなげたり、色んなことをしていかなければいけませんので、被災してから丸3年目から全戸住宅訪問をはじめ、一軒ごとのカルテをつくることにしました。最終的には、これを早く始めてとても良かったと思います。ご本人にとっても、問題を考えることに対して時間が取れましたし、また我々も、どういう方がどのぐらいの割合でいらっしゃるかということを、常に把握することができたので、とても良かったと思っています。

そうする中で、きちんとした色々な制度につなげ、行政として下支えをやると同時に、意欲や希望を失わないように、色々な働きかけをすることが大事です。この2本が両方揃っていないと、実際の暮らしの再建にはつながらないと思います。そういう意味では、日本財団をはじめ、絆プロジェクトなど、仙台にも沢山のNPOの方々、地元でいえば、社会福祉協議会の方などが地道にご活動くださって、今は次の、新しくできたコミュニティをどう活性化するかという段階になっています。そこまで、無理なくつなげていくといったきめの

積み重ねられてきた、向き合い方とか、考え方の中から、生まれた賜だと感じています。

■ 第2部 ディスカッション

伊東 約4万人の方々がまだ仮設に暮らしておられます。それに対して、これからつくられていく災害公営住宅は今のところ1,500戸程度しかありません。それ以外に様々な再建の施策が求められることになるわけですが、まずその辺をお三方に伺いたいと思います。今度は奥山さんから、先行して取り組んでこられた経験から、どんなふうに再建策をつくってこられたかというお話を伺えますでしょうか。

すまい再建、その先へ

奥山 先ほど仙台では1万2,000世帯の方々が仮設にいらっしゃったということを申し上げましたけれども、それらの方々の再建の方法としては、やはり自主再建、単独再建であり、ご自分の力で家を建てるなり、またはマンションを買い、賃貸に入るなりで、そんなにバックアップがなくても再建が進む方々。この方々が、3分の1ぐらい。それ以外の方々は、大きなものは復興公営住宅。行政でつくる、いわゆる市営住宅や県営住宅というようなものの災害版で、そこに入られる方が一定数いらっしゃいます。ただ、これは全ての被災した方々、希望した方々に復興公営住宅を建てるという趣旨ではなくて、あくまでも国の建前は、必要とする方にのみ、最低限の災害復興住宅を建てよということでしたので、この住宅戸数をいくらに見積もるかというのが、復興の中では非常に難しいことでした。つくり過ぎると、今東北の中でも問題になっているように、空き住戸が出ますし、場所が悪くても空き住戸が出るというのは、阪神の場合でもあったことですし、かといって必要戸数に足りなければ、これもまた政治的な課題としては厳しいことになります。そのため、この戸数の問題は、首長にとって難しい課題でした。あとは仙台の場合ですと、民間の賃貸住宅が沢山ありま

ツァイス」というレンズの会社の寄付によって実現しました。実際に私も見に参りますと、プランは木造、プレハブと全く変わらないのですが、佇まいが全く違うのです。木の香りもしますし、非常に温かい感じはあります。奥山さんも、県と市というお立場は違うかもしれませんが、復興において、県や国との違いなど、色々おありだったのではないかと思います。いかがだったでしょうか。

奥山 国の方は、やはり日本全国に適用したらどうだということをすぐ考えられ、我々は市民や県民にとってどういうものが良いかと考えます。そういう意味では、現地と制度を所管する国との間では、まだまだ災害対応でも、摺り合わせが難しいというのは実感しました。

伊東 荻上さんは、今回、被災した公民館を再建して「みんなの家」として、来年10棟つくられるということですが、僕は大変うれしく思っています。東北では、「みんなの家」はなかなか定着していなかったのに、今や熊本に行ったら、ほとんどの一般の方は「みんなの家」といったら理解してくださっているのではないかと思います。それからまた、公民館が「みんなの家」に置き換わっていく。つまり、一番小さい公共施設として扱われるということが、すごく意味のあることで、これからの公共建築の在り方に、一つの示唆を与えることになっていくのではないかと。そしてまた、なってほしいという意味で、非常に素晴らしいことを企画してくださったことに対し、大変感謝しています。

荻上 実は、公民館のお話も、私ども日本財団が企画したというよりは、本当に県の皆さんのほうから、あるいはこのプロジェクトをご一緒いただいている熊本県建築住宅センターとお話をする中で、こういう公民館はという提案をいただいたのです。私たちとしては、やはり状況に応じて、柔軟に、必要とされるものにご支援をしていきたい、お応えをしたいという思いで、この公民館についても対象にしようということにさせていただきました。企画自体は、私たちが、まさに県の方、あるいはずっとこれまでそういうふうに



桜の贈呈式(カール・ツァイス(ドイツ)からの寄附)

宅に移るときの初期費用や保証金、色々な手数料、礼金などの部分を20万円、県が負担します。最終的に、どこに行っても転居が必要であるため、引っ越しするときの費用を10万円、県が負担します。仮設住宅に入れる期間が決まっており、「期限がきたため、もう出てください」というのは、絶対しないようにしようということで、パッケージ・メニューとして用意することで生活再建したい考えです。

私は、皆さんが恒久的なすまいを持ってはじめて、熊本地震からの復興があると堅く信じています。あまり早く出しても、皆さん、考える余裕がないので、仮設住宅からはあと半年ぐらいで出なくてはいけないという時期に出せたため、タイミングとして良かったです。毎日100件ぐらいの問い合わせの電話が掛かってくるそうで、関心は高いと思っています。それから、災害公営住宅についても、これがあるとそんなに沢山建てなくてもいいのではないかと考えるもあります。しかし、災害公営住宅の整備も進んでいるため、そちらに移られる人も勿論います。それから、色んな選択があり、それぞれの選択に応える考え方になっているのではないのでしょうか。これも、1,000万円というくまもと型復興住宅のモデルがあったから計算できたと思います。

伊東 災害復興公営住宅に関しましても、今、アートポリスが支援しながら、いくつかの地域で、来年建てられていくことになると思います。熊本は非常に土地が豊かにあるため、比較的低層で木造の復興公営住宅をつくることができます。その点でも、従来の復興公営住宅よりも、血の通った温かいものにしていきたいと思っています。また、知事の発案で、仮設住宅を復興公営住宅に転用し、2戸をまとめて1つにするといったようなことも考えておられますよね。

蒲島 木造の仮設住宅については、そういう方法も十分可能性は高いのではないかと思います。

伊東 そうですね。場所によってそういうことが可能ならば、非常に経済的にも口スが少ないと思います。荻上さんも、利子補給などのソフト面でも色々支援をしてくださって

おられるわけですね。

荻上 そういう意味では、今蒲島知事からお話がありましたパッケージの前の、ある意味民間の立場に立って、先を走らせていただいたというのが役割なのかなと思っています。元々発災の年の夏から「わがまち基金」の中で、いわゆる住宅再建をする際の利子補給で、上限100万円で利子の補給をご支援しますという制度をスタートしたのですが、最初にネックになったのが、公平かどうかということでした。私たち日本財団は、いわゆる公的立場ではありませんので、公平さに縛られずに、制度として当然公正に進めますが、早期に立ち上げられる方の背中を押すことで、それを見て、さらに多くの方が自分のすまいを取り戻そう、建てようと。まさに悩んでいる方が、新しく建った家を見て、自分も建てようと思うような、きっかけをつくらせていただくのが、今の私たちの存在であり、使命であり、今回県との包括協定があったことで、公的パッケージにもつながったと思います。

最後に一言

伊東 こういう図を見せていただくと、ハードとソフトとは、いかに組み合わせられて、お互いに影響し合いながら、復興が進んでいくのがよく理解できました。それでは、最後に一言ずつ。

奥山 利子補給に日本財団のご支援が入っていると聞いて、画期的なことだと思いました。東日本のときには、私の知る限りでは、利子補給に民間資金が入ったというのはないですし、その後の県の施策と連動したということも聞いたことがないので、本当に貴重な一歩だったと、聞いておりました。元気に暮らしていただきたいというのは、行政を預かるものの一番の願いですが、最後は当事者の皆さんが如何に生きる意欲を持っていただくか。やはり最終的には、何かご本人たちがやりたい、これはいいと思うものを見つけてもらうのが一番かと。何か自分たちがやる側に回るということが、最後の復興なのかなと思います。



昨日、拝見した「みんなの家の展覧会」では、テクノ仮設団地の住民の皆さんが、一眼レフの大きなカメラを持って、撮る側に回っていて、これは素晴らしいと思いました。していただく側から、どうやってする側に転換するか。それを最後の目標に、今、日本財団やアートポリスが取り組んでおられるということは、とてもすごい方向性を出していращやると思いました。是非、この勢いが大きな実例となって、全国に発信されることを願っていますし、東日本もその波に負けないように、東日本から発信できることを模索していきたいと、改めて思いました。

伊東 7月に市長をお辞めになられて、まだまだものすごくお元気なので、今後のお考えが何かありましたら。

奥山 任期8年で市長職は退任しましたが、私自身この震災の中で、やはり市民の方々が自ら立ち上がることが重要だと思いました。住民、市民が立ち上がること、それを応援することが大事だなと痛切に思いますので、これまでの活

動、仕事の経験やネットワークを生かしながら、仙台を中心とした市民活動の応援団として、少し力を出せればと思っています。

伊東 仙台市は奥山さんが市長を2期務められた間に、女性スタッフの優秀な方をものすごく育てられました。要職に就いておられる方は女性が多く、本当に感心しました。それでは、荻上さんも一言、最後に。

荻上 2点ですが、1点目は、どう備えていくかというところが本当に大事だなと思います。災害は忘れた頃にやってくるというのはもう昔の話で、今はもう忘れる前にやってきます。もっと言えば備える前にやってきてしまいますので、普段から災害のためにというよりは、如何に日々のコミュニティづくりを、人口減少など色々厳しいことを言われますが、どうやって付き合っていくのかというのが、まさに、この日本や日本人がこれからチャレンジすべきところだと思っていますので、日本財団としても、色々やっていければと思っ



みんなの家の展覧会 (photo／BrianScottPeterson)



一眼レフで撮影する仮設住宅の入居者

ています。

2点目は、今日のお話の中で、ほとんど登場していないのが企業です。本来では、企業が社会において果たせる役割とは、もっと大きいものがあるはずです。そもそも社員という形で、人がそこに暮らしていたり、人がいたり、あるいは、様々な施設があって、能力や、方法も持っていますので、企業と地域社会の関わり方を、コミュニティーの在り方はこれからどうあるべきなのかという議論の中で、企業の役割も、改めて考えていきたいと思っています。是非、皆さんからも色々お知恵をいただければと思っています。

伊東 全くおっしゃる通りで、我々も東北で「みんなの家」のお金を集めるときに、やはり海外の企業の寄付が圧倒的に多いんですね。先ほどの桜の木を植えてくださったのは「カール・ツァイス」というドイツの会社ですが、社会貢献に関して、日本の企業ももう少しこれから考えていただきたいというお言葉は、そのとおりだと思いました。最後に、知事よろしくお願いします。

蒲島 とても楽しいパネルディスカッションでした。お三方がいらっしゃらなかったら、熊本地震への対応も違っただろうと思いました。まず、伊東先生がアートポリスで様々な斬新な考え方や「みんなの家」を考えられ、奥山さんが決断された前例があったから、熊本県は仮設住宅を木造でやろうと決めました。それから「みんなの家」も今度整備できま

した。大胆にやれたのも、その経験のお陰だと思っています。伊東先生と奥山さんに心から感謝申し上げます。それから日本財団も、3日後に電話をいただいて、迅速な合意形成ができたと思います。何より私が喜んだのは、熊本城に30億円の支援をいただいたことです。熊本城については、元々復興するスキームがありませんでした。また、安倍首相も「熊本城の復興なくして熊本地震からの復興はない」と仰ったことで、大きく支援に結び付きました。しかし、最初に日本財団から30億円の支援のお話をいただいたので、それがきっかけとなり、経済界からも資金を出していただきました。そういうことで、今日はお三方にお礼を申し上げます。それから、熊本県は、熊本地震の経験を、失敗したところも、それから成功したところも発信することがとても大事で、その発信が次の日本での災害対応の対応力の向上に結び付くのではないかとと思っています。それで今熊本県は、震災遺構の保存を含め、発信の力を育てていきたいと思っています。

伊東 最後にお三方から大変素晴らしいご意見をいただきましたと思います。本日はありがとうございました。

(2017年12月10日(日)、熊本県庁地下大会議室にて)



熊本シンポジウム

出演者プロフィール(五十音順)

有浦隆(ありうら・たかし)

1958年生まれ
1981年防衛大学校卒業
熊本県危機管理防災企画監

小川次郎(おがわ・じろう)

1966年生まれ
1996年東京工業大学大学院理工学研究科博士
後期課程満期退学
日本工業大学教授、アトリエ・シムサ

川島浩孝(かわしま・ひろたか)

1960年生まれ
1984年九州大学大学院工学研究科修士課程修了
共同建築設計事務所

下村貴文(しもむら・たかふみ)

1954年生まれ
1980年熊本大学医学部卒業
阿蘇温泉病院総院長

古里さなえ(ふるさと・さなえ)

1992年生まれ
九州大学大学院在学中

柳澤潤(やなぎさわ・じゅん)

1964年生まれ
1992年東京工業大学修士課程修了
関東学院大学准教授、コンテポラリーズ

山田一隆(やまだ・かずたか)

1954年生まれ
1979年鹿児島大学医学部卒業
大腸肛門病センター高野病院院長

荻上健太郎(おぎうえ・けんたろう)

1973年生まれ
1998年東京大学大学院農学生命科学研究科修士課程修了
日本財団 経営企画部部長

奥山恵美子(おくやま・えみこ)

1951年生まれ
1974年東北大学経済学部経済学科卒業
前仙台市長

蒲島郁夫(かばしま・いくお)

1947年生まれ
1979年ハーバード大学大学院修了(政治経済学博士)
熊本県知事

くもとアートポリス

伊東豊雄(いとう・とよお)

1941年生まれ
1965年東京大学卒業
建築家・KAPコミッショナー
伊東豊雄建築設計事務所代表

桂英昭(かつら・ひであき)

1952年生まれ
1978年熊本大学大学院修了
建築家・KAPアドバイザー
熊本大学大学院准教授

末廣香織(すえひろ・かおる)

1961年生まれ
1986年九州大学大学院修了
建築家・KAPアドバイザー
九州大学大学院准教授

曾我部昌史(そがべ・まさし)

1962年生まれ
1988年東京工業大学大学院修了
建築家・KAPアドバイザー
神奈川大学教授

熊本シンポジウム

第22回くまもとアートポリス推進賞表彰式

「くまもとアートポリス推進賞」は、建築文化に対する関心を高めるため、平成7年から県内各地の優れた建造物等を表彰してきました。昨年度（平成28年度）は、熊本地震の発生により本賞の開催を見送りましたが、平成29年度は第22回として開催しました。

今年度は、35件の応募があり、選考委員会の審査の結果、推進賞が2作品、推進賞選賞が3作品の計5作品を表彰しました。また、表彰式は、くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウム内で実施しました。



推進賞

わかたけ保育園（水俣市）

再春館製薬所体育館サクラリーナ（益城町）

推進賞選賞

SA-HOUSE（熊本市）

GALLERY FLOWER GARDEN（宇城市）

熊本県民テレビ新社屋（熊本市）

●受賞者コメント（発表順）

わかたけ保育園

わかたけ保育園の先生方の教育理念や設計趣旨を元に設計し、施工者の精度の高い技術があったことで実現できました。また、地域の方々にもワークショップに参加していただく中で、様々な知恵をいただきました。



設計者：篠 節子氏

●事業主：（福）わかたけ福祉会

●設計者：篠計画工房

●施工者：坂田建設（株）



©畑亮

北野選考委員長からの総評



北野 隆委員長（熊本大学名誉教授）

昨年度は、熊本地震の影響により見送った本賞ですが、本年度は35作品と多くの応募がありました。受賞された皆様には、今後も良い建物をつくっていただきたいと思います。

再春館製薬所体育館サクラリーナ

着工直前に熊本地震が起こり工事を中断しましたが、「五輪出場が決まった山口茜選手を元気に送り出し、熊本に明るいニュースを」という思いで完成することができました。震災を乗り越えて完成した本施設がこのような賞をいただけて、関係者一同大変うれしく思います。



設計者：井手 健一郎氏

●事業主：（株）再春館製薬所

●設計者：（株）リズムデザイン+キトレベ建築設計事務所 ●施工者：大成建設（株）九州支店



SA-HOUSE



事業主の長男

長野さんに設計をお願いし、どのような家ができるのか楽しみに待っていました。実際に出来た家はオシャレで住みやすく、とても居心地が良いです。本賞を受賞できて本当に嬉しいです。

●事業主：匿名（個人）

●設計者：（株）長野聖二建築設計處

●施工者：YAJIMA建築



GALLERY FLOWER GARDEN



事業主：松浦 さち氏

設計者の小材さんへの相談から始まり、素晴らしいギャラリーをつくっていただきました。設計者と施工者の皆さんに感謝したいです。本賞を励みに趣味のガーデニングを続けていきます。

●事業主：松浦さち

●設計者：（株）ぱん設計小材事務所

●施工者：（株）ハウジング創



熊本県民テレビ新社屋



設計者：野嶋 敏氏

2階コンクリートの施工を終えた頃、熊本地震が発生し、被災された職人さんもうらっしゃいました。工事を進めて良いものか施主様も大変悩まれていましたが、安全に情報を発信し続けるという放送局の使命の下、なんとか完成させることができました。

●事業主：（株）熊本県民テレビ

●設計者：（株）三菱地所設計

●施工者：大成建設（株）九州支店



熊本シンポジウム

みんなの交流会

平成29年12月10日(日) 18:00 ~ 20:00

ホテル熊本テルサ

参加者 99名



開会あいさつ

蒲島郁夫／熊本県知事
伊東豊雄／アートポリスコミッショナー

乾杯

小早川宗弘／熊本県議会議員

あいさつ

梅原幹／熊本県民テレビ代表
久原英司／熊本工務店ネットワーク代表
古里さなえ／九州大学大学院

閉会あいさつ

福島正継／熊本県建築士事務所協会会長



シンポジウム後、「熊本地震からのすまいの再建」を語り合う交流会



展覧会

くもとアートポリス みんなの家 展覧会

2017年11月17日(金)～2018年1月8日(月・祝)

熊本市現代美術館(井手宣道記念ギャラリー＋ギャラリーⅢ)

仮設住宅の入居者や県内の高校生が撮影した写真を展示する『くもとアートポリス みんなの家 展覧会』を熊本市現代美術館で開催しました。

本展では、仮設住宅で生活する8歳から73歳までの入居者など、計14名が撮影した「被災地の日常」の写真や被災者自身が被災地の現状を語ったインタビュー映像を展示しました。

また、参加型の展示物を設け、来場者などが持ち寄った写真で一つの作品をつくりあげました。

会期中に約5000人が来場し、多くの方に被災地の現状や、かけがえのない「日常の生活」の大切さを伝えた展覧会となりました。

(photo／BrianScottPeterson 以下※)



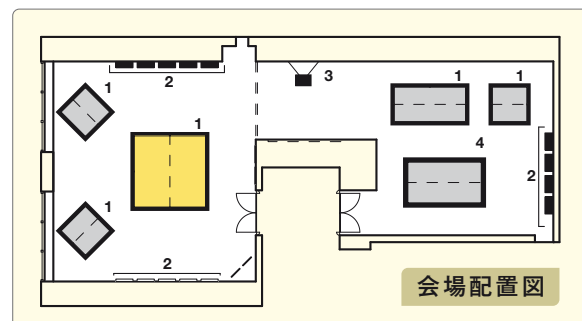
※

この展覧会は、熊本地震の現状を国内外に発信するものとして、益城町テクノ仮設団地で「桜祭り」を開催するなど被災地支援にあたる建築家のアストリッド・クライン氏とマーク・ダイサム氏(クライン ダイサム アーキテツ)に企画を依頼し実現したものです。

クライン氏は、「展示した写真は、有名なカメラマンが撮ったわけでもなく、有名な人が写っているわけでもないですが、ごく普通の方でも、なにげない場面や日常の生活が大切なものだ、写真を撮って下さった方も見てくださる方も思ってもらえたら」と、展覧会に対する思いを語り、仮設住宅の入居者らと協働し、これまでにない企画で被災地の現状を伝えていただきました。



※



会場配置図

1 「みんなの家」をモチーフとした展示物

仮設住宅の入居者らが撮影した写真は、布に印刷し「みんなの家」をモチーフとした展示物にかけて展示しました。展示物は会場内に大小5つ配置し、床は県産材の畳や杉板でつくられ、中に入ってゆっくりと写真を鑑賞することができます。

仮設住宅の入居者らが撮影した写真は「日常の写真」や「空」をテーマに撮影され、1万枚以上の写真の中から約650枚を展示しました。日々表情を変えていく空の様子や、仮設住宅で遊ぶ子供たちの様子など、ありふれた日常の生活の写真ですが、被災地での日常が溢れだす、すばらしい写真が集まりました。



※



※



※



2 作品パネル

14名が撮影した写真の中から各1枚を選出し、作品パネルとして展示しました。仮設住宅の玄関先で野菜を選別する入居者の様子や入居者の皆さんが談笑する様子など、被災者の視点でしか撮影できない写真は、被災地の現状を写し出す作品です。



3 インタビュー映像

写真を撮影した仮設住宅の入居者に、地震発災時の様子や今の暮らし、また写真を撮影した感想などをインタビューし、約15分の映像で紹介しました。

- 「最初は写真を撮ることに抵抗がありました。」
 - 「地震で町が変わってしまった。元どおりにはならないと思うけど前に進みたい。」
- と被災者自身の言葉で今の心境を語り、「被災地の今」を映像で伝えました。



4 参加型展示物 ～ダンボールで作った「みんなの家」～

ダンボールを用いて「みんなの家」をモチーフに制作した「参加型の展示物」を設置しました。『HOME日常の写真』をテーマに県内外の来場者らが写真を持ち寄り、展示物の屋根や壁に写真を貼って、日常の生活の大切さを伝える作品としてつくりあげました。

展示物には、約400枚以上もの写真が貼られ、東日本大震災で被災した方からも写真を送っていただき、数多くの日常の写真が敷き詰められました。

この展示物は、熊本大学の田中智之研究室が制作し「益城町テクノのみんなの家集会所B2」をモデルに1／3スケールでつくられています。



※



※



展示会参加ピンバッジ

参加型展示物に写真を持参いただいた方に、特製ピンバッジをプレゼントしました。

5 くまもとアートポリスを紹介

近年のアートポリスプロジェクトや「みんなの家」を広く情報発信するため、布に取り組みを印刷し、同美術館エントランスで展示しました。

展示内容

- 大腸肛門病センター高野病院
- 阿蘇内牧温泉みんなの家
- 熊本県総合防災航空センター
- みんなの家
- 「甲佐町住まいの復興拠点施設」(模型)



※



カメラ講座

展示会で展示した写真を撮影した14名は、仮設団地等で開催した「カメラ講座」の参加者で、一眼レフカメラを初めてにする方ばかりです。講座では、プロのカメラマンである中村こども氏を講師に迎えカメラの持ち方から説明が始まりました。「どのボタンを押せば良か?」「何ば撮ればいいのか分らん」上手く撮れるか不安な方もいましたが、精一杯取り組んでいたが、最終的には1万点以上もの写真を撮影されました。



第1回カメラ講座

(仮設団地入居者向け)

開催日／平成29年8月20日(日)
会場／益城町テクノ仮設団地(集会所B2)
参加人数／20名



第2回カメラ講座

(仮設団地入居者向け)

開催日／平成29年10月7日(土)
会場／益城町テクノ仮設団地(集会所F)
参加人数／9名



第3回カメラ講座

(高校生向け)

開催日／平成29年10月15日(日)
会場／熊本県庁
参加人数／3名



展覧会オープニングイベント

展覧会セレモニー・ペチャクチャイベント in 熊本 ～熊本のいま、そして～

平成29年12月2日(土) 14:00～16:00

熊本市現代美術館(ホームギャラリー)

展覧会のオープニングイベントとして、展覧会のセレモニーとトークイベント「ペチャクチャイベント in 熊本～熊本のいま、そして～」を開催しました。

セレモニーでは、本展の写真を撮影した仮設住宅の入居者や県内の高校生を招き、「熊本のいま、そして」と題し、写真撮影の感想や被災地での今の暮らしを伺いました。

ペチャクチャイベントin熊本では、仮設住宅の入居者や東海大学の学生など熊本地震の復興支援に関わるプレゼンターが、それぞれの活動を20枚のスライドを使って紹介しました。

イベントには約70人が来場し、被災者自身の言葉で語られた「被災地の現状や日常の暮らし」を多くの方に伝えることができました。



展覧会を企画したアストリッド・クラインさんも来場し、展覧会に込めた思いや被災地へのエールを伝えていただきました。



(左) アストリッド・クラインさん(クライン ダイサム アーキテクト)



展覧会セレモニー

展示した写真を撮影した仮設住宅で生活する皆さんや県立御船高等学校の生徒さんら9名を招き、写真撮影の感想などを伺いました。皆さんの多くは、初めて手にした一眼レフカメラで、被災地の日常が感じられる数多くの写真を撮影していただきました。

セレモニーでは、被災地を写真で残す意義や日常の生活の様子を伺うことができ、まさに「熊本のいま」を被災者自身の言葉で伝えられました。



櫻井玲子さん

「今まで何気なく過ごしてきた日常を見つめ直すきっかけになりました」



松岡七郎さん

「今までは家族の写真しか撮っていませんでしたが、外に出て自然と写真を撮るようになりました」



(左) 澤田朱理さん、(右) 坂本久良々さん

「学校行事や復興行事でみんなの笑顔を撮影するのが楽しかったです」



前川幸子さん

「写真を撮影する時間は、ゆっくり自然を眺め、周囲の生活の様子をみることができて、本当にすばらしい時間でした」



小川未来さん

「一眼レフカメラを使って、いろいろ写真を撮ることができて楽しかったです」



眞田昇さん

「はじめは被災地を撮影することに強い抵抗がありました。今は現実を受け止め、写真で記録に残す意義を感じています」

(photo/BrianScottPeterson)

ペチャクチャイベント in 熊本～熊本のいま、そして～

世界的トークイベントである「ペチャクチャイベント」は、プレゼンターが20枚のスライドを使って、それぞれの活動を紹介するものです。オープニングイベントでは「熊本のいま、そして」と題し、展覧会の写真撮影をした仮設住宅の入居者や熊本地震の復興支援に関わる6名のプレゼンターを招いて、被災地への思いや活動を紹介しました。

また、最後に特別ゲストとしてくまモンが登場し、益城町テクノ仮設団地での桜祭りの様子や、「みんなの家」の完成式にかけつけた時の様子を紹介し、会場は大いに盛り上がりました。



林田 豊さん 展覧会参加者(益城町テクノ仮設団地)

林田さんは、自宅が全壊し仮設団地に入居されています。「趣味のカメラで日常を伝えたい」と、写真を撮影しました。撮影した「断層が見える畑での農作業の風景」や「仮設住宅からバスに乗る学生の様子」の写真で、被災地での日常の暮らしを紹介しました。「益城町にも家が建ち始めてきたが、更地が多い」と、被災地の今を伝えました。



森本 ひとみさん 展覧会参加者(益城町木山仮設団地)

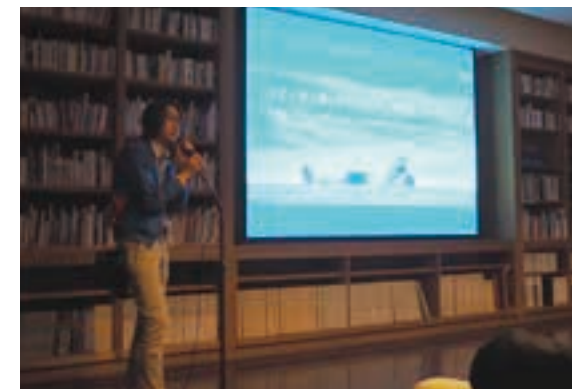
森本さんは、自宅が全壊し仮設団地に入居されています。「熊本の現状を次の世代に残していきたい」と、写真を撮影しました。前震発生時刻「21時26分」で止まったままの時計の写真を紹介し、発災直後の生活や現在の生活の様子を伝えました。「益城町は元の姿には戻らないが、一步一步新しく生まれ変わろうとしています。その記録を写真として残していきたい」と被災地の様子を記録する意義を伝えました。



中村 こどもさん 写真家(展覧会写真監修)

中村さんは、子供向けの写真教室やワークショップなどを行う写真家。展覧会では、展示する写真の監修や仮設住宅の入居者などにカメラの使い方を指導したカメラ講座の先生です。

「子供でもピアノを上手に弾ける様に、一眼レフカメラも丁寧に教えてあげれば子供でも写真が撮れることを伝えていきたい」と、写真の持つ可能性を伝えました。



井手 良輔さん 阿蘇復興への道(東海大学)

井手さんは、熊本地震で甚大な被害をうけた南阿蘇村の東海大学(阿蘇キャンパス)の学生です。震災後に「阿蘇復興への道」を立ち上げ、被災地でボランティア活動に取組んでいます。

震災前と震災後の南阿蘇村の写真を紹介し、解体されて無くなっていく風景や熊本の現状を伝え、「震災の経験を近くの人に、また、より多くの人に伝えていきたい」と復興への思いを伝えました。



片山 広大さん チーム熊本(熊本地震ボランティア支援)

片山さんは、(一社)チーム熊本の一員で、前震後すぐに物資配送やボランティアの手配や管理、またボランティア用の宿泊施設の運営など多岐にわたる活動をしています。全国から集まった5500トンの物資を市役所や物資の届いていない地域へ配送したことや県外のボランティアの宿泊施設運営状況などを紹介しました。「復興のため、県外の多くの方々に今後も熊本の現状を発信していきたい」と思いを伝えました。



sho_maaさん デジタルアート作家(益城町復興大使)

sho_maaさんは、県内の景勝地でマネキンに扮し、撮影した写真にCG処理で加え作品をつくる、デジタルアート作家です。また、益城町復興大使として、県内外で被災地の状況を伝え、募金活動をするなど支援活動をしています。地震後は作品で伝えたい内容に変化があったと語り、出演した地震関連のイベントの様子を紹介しました。「逆に自分達が勇気づけられたイベントも多い。これからも復興のために活動していきたい」と思いを伝えました。



(photo/BrianScottPeterson)

こども建築塾

こんな「みんなの家」があったらいいな

平成29年12月16日(土) 11:00~16:30

熊本市現代美術館(キッズファクトリー・ホームギャラリー)

展示会の企画イベントとして、県内の小学校に通う児童を対象に熊本地震からの創造的復興を担う人材育成を目的とした「こども建築塾」を開催しました。

今回の「こども建築塾」は、『こんな「みんなの家」があったらいいな』と題し、19人の子供たちが、甲佐町の災害公営住宅の計画地をイメージし、どんな「みんなの家」があったらいいか考え、絵を描き、模型をつくりました。講師には、展示会の企画・運営を手掛けた建築家のアストリッド・クラインさんを迎え、夢の膨らむ「みんなの家」を完成させました。



こども建築塾概要

同日11時。会場となった熊本市現代美術館のキッズファクトリーに子供たちが集まりました。

参加した児童は、北は山鹿市や玉名市から宇城市、山都町及び美里町の小学生で、地震で被害が大きかった熊本市や西原村、また、計画地のイメージと設定した甲佐町からも参加いただきました。

参加する子供たちには、事前に宿題をお願いしました。内容は、事務局が事前に配布した『みんなの家と災害公営住宅の教科書』を参考に、あったらいいと思う「みんなの家」の絵を、思い思いに描いてくるというものです。

『こんな「みんなの家」があったらいいな』

子供たちは描いてきた「みんなの家」の絵を抱え、着席。初めて会うお友達同士のためか、少し緊張した雰囲気です。「こども建築塾」がスタートしました。



オリエンテーション

みんなが楽しめる「みんなの家」を考える

講師のアストリッド・クラインさんは「今回の課題は「みんなの家」。おじいちゃんやおばあちゃんや何をするのかな?ただ単に集まるだけではなく、みんなが楽しめる「みんなの家」を考えてほしいな。形や色にもこだわって楽しい計画を考えてみようね。」と挨拶。早速、5チームに分かれて、夢が膨らむ「みんなの家」づくりが始まりました。



宿題の発表会

夢が膨らむ「みんなの家」が大集合

まず、宿題で描いてきた「みんなの家」を発表しました。

- ステージをつくって、カラオケができます。奥の部屋は、災害公営住宅に住むおじいちゃんやおばあちゃんの孫が遊びに来た時に利用できます。形は丸。やさしいイメージです。
- 星が見える展望台を考えました。みんなで星空を眺めます。「みんなの家」では、大きなスクリーンで映画が見れます。壁には、ブドウを植えて、みんなで食べることができます。
- 瓦屋根にします。地震で壊れた家をイメージでき、家の記憶を思い出すことができます。
- みんなの家に廊下を回して、運動ができます。真ん中には畳を引いて、みんなで休憩して集まります。カラフルな窓も付けて楽しい気持ちになれます。

などなど、子供たちの自由な発想で、かわいらしく、また素直な色使いやデザインによる、今まで見たことのない「みんなの家」が集合しました。

みんなで昼ごはんを食べたら、夢をカタチにする模型づくりがスタートです。



美里町立中央小 後藤直樹くん



熊本市立出水南小 山本小桃子さん



熊本市立出水南小 永田花梨さん

模型づくりがスタート!

作りながらアイデアをカタチに。 集まって楽しい「みんなの家」が誕生

子供たちは、厚紙やスチレンボード、折り紙や色鉛筆などを使って、絵で描いてきた「みんなの家」のアイデアを、立体的な模型でカタチにしていきました。

模型づくりでは、仮設団地内の住環境整備に取り組むKASEIプロジェクトから熊本大学や熊本県立大学、崇城大学の建築を学ぶ大学生のみなさんにサポーターとして協力いただきました。

- 「カラフルな屋根や壁は、どんな材料でつくればいいのか?」
- 「ここには丸い窓を付けてみようか。」
- 「カッターで、このカタチの材料を準備すればいいのかな?」

子供たちは、考えてきた「みんなの家」の模型を作りながら、どんどんイメージを膨らませ、アイデアを加えていきます。

アストリッドさんは、
『「みんなの家」に、人型の模型も入れて、どんな風に使うか物語をイメージしてみましょ
う。楽しい「みんなの家」をつくろうね。』とア
ドバイス。

約3時間の模型づくりを終えて、
子供たち全員が模型を完成させ
ました。



公開発表会を開催

完成した「みんなの家」をプレゼン。 アストリッド・クライン賞を発表!

完成した模型を持って、美術館を訪れた誰もが御覧できるよう、ホームギャラリーへ移動し、発表会を開催しました。

一人ずつ、完成した「みんなの家」の模型をプレゼン。発表時間は90秒です。

子供たちは、短い時間で要点を押えた大人顔負けのプレゼンテーションを披露しました。



アストリッドさんから「とても、素晴らしい。みんな一生懸命がんばった。夢が膨らむ計画ばかりで大変よかった。」とコメントがあり、会場からも拍手が巻き起こりました。

最後にアストリッドさん自らが特に優秀だった2作品を発表、賞状と記念品を贈呈しました。



最優秀賞 熊本市立出水南小 山本小桃子さん



優秀賞 熊本市立出水小 鈴木郷子さん

参加した子供たちからは、

- 「建築について興味がわきました。面白くて楽しい家ができると、住む人が笑顔になり、みんなが楽しい気持ちになることがわかりました。」
- 「将来の夢が設計士になりたいと思った時期がありました。今回の経験でさらに興味が持てました。」
- 「熊本地震で住宅などが壊れてしまったけど、復興復旧に向けてみんなで頑張りたい。」

とコメントをいただきました。

参加いただいた子供たちの中から、熊本地震からの創造的復興を担う人材が、若しくは、世界的な建築家として活躍するスターが登場するかもしれません。

仮設団地リポートツアー

平成29年11月26日(日)

参加者58名 甲佐・美里コース リポーター 11名・入居者17名
南阿蘇コース リポーター 15名・入居者15名

熊本地震からの復興や防災等に関心のある方がリポーターとなって、被災地や熊本地震で整備した仮設団地を巡るバスツアーを開催しました。

リポーターの皆さんには直接被災地に足を運んでもらい“熊本のいま”を知っていただくとともに、被災地で感じた感想をリポートでまとめて発信いただきました。



ツアー行程

甲佐・美里コース

JR熊本駅→県庁→●上益城郡の復旧・復興状況を視察(車窓)→★座談会その1甲佐町白旗仮設団地(プレハブ仮設住宅)→★座談会その2美里町くすのき平仮設団地(木造仮設住宅)→美里町佐俣の湯(物産館、公衆浴場)→県庁→JR熊本駅



南阿蘇コース

JR熊本駅→県庁→★座談会その1南出口仮設団地(大津町)(プレハブ仮設住宅)→★座談会その2南阿蘇村下野山田仮設団地(木造仮設住宅)→●南阿蘇村の復旧・復興状況を視察→南阿蘇村あそ望の郷くぎの(物産館)→県庁→JR熊本駅



実施状況

当日は小雨が降る中、リポーターとして県内や県外(大阪、徳島、福岡及び鹿児島)から26名が参加。リポーターの皆さんは、各コースに分かれて、プレハブ造と木造の仮設団地を1箇所ずつ巡り、団地内や住戸の様子を視察されました。

また、団地内の「みんなの家」では仮設住宅の入居者と座談会を行いました。

座談会では「みんなで語り、記憶に残そう」をテーマに意見交換を行い、入居者から地震直後の体験や仮設住宅での暮らしなどの話を伺いました。

入居者 「あれほど大きな地震は初めて経験した。机の下に隠れるところの話ではなかった」
「家具は固定した方がよい。外へ出るための通路が確保できる」

リポーター 「お怪我はなかったですか」
「家具の固定方法で注意すべきことがありますか」
「県外では今熊本地震のニュースは流れていない。熊本の現状を伝えていきたい」

被災者自身が話される地震直後の状況や防災への備えについて、リポーターの皆さんはメモをとり質問や感想を述べるなど、真面目な話や冗談交じりの雑談など、和やかな雰囲気の中意見交換が行われました。

“熊本のいま”を知っていただくだけでなく、被災された方々とつながるきっかけともなったツアーとなりました。

甲佐・美里コース

甲佐・美里コースは、益城町の被災状況を車窓から視察したのち、仮設団地2カ所での入居者の方と座談会を行いました。

崩れた道路を応急的に舗装した場所などを見ることができ、地震のすさまじさを実感しました。
(H 20代男性・大阪府)

被災した建物は解体され、空き地のままとまっているのが印象的でした。解体が終わっても次へ進めていない状況に見えました。
(M 女性・熊本市)

徳島県では災害に備えて、仮設住宅や備蓄に関する検討をはじめています。「みんなの家」についてもコミュニティづくりの他、様々な面から着目していて、先行事例として参考にしています。
(多田さん 36歳男性・徳島県)



甲佐町白旗仮設団地

外部の人間が被災地を訪ねてボランティア活動をするのは、被災された方にとって迷惑だと思っていたのですが、このツアーが自分の耳で話を聞く良い機会だと思い参加しました。座談会で皆さんの話を聞き「復興」とは原状回復ではなく、被災されたそれぞれの方が、最良と思える次の一手を打ち続けることなのだと思います。今回のツアーで得た教訓「家具は固定して!人間はフレキシブルに!」を、災害の備えと指針にしようと思います。

(村上千鶴さん 女性・熊本市)

驚いたことは、仮設団地に「花」が多かったこと、空間にちゃんと生活感があつたことです。「仮設」というと、これまでは無機質な空間のイメージでしたが、実際には温かみのある空間が広がっていました。東北で起きた震災の教訓が活かされ、住まう人の居心地を良くしようとする工夫が随所に見られました。一方で、被災した地域や世帯によって、復旧や生活再建が進むスピードに「格差」が生じる問題にも直面していると感じました。

(W・H 男性・福岡県)



被災地の現状は、想像より復旧していない場所が多いと感じました。南出口仮設団地のみんなの家は、黒い外観とは反対に白くて木の温かさが感じられる内装がとても印象的で和む空間だと思いました。入居者の方々もこの家を慕い、日々交流を楽しんでいるようでした。被災された方が一刻も早く安心できる生活に戻ってほしいですが、それまでの仮の住まいが、安心・安全・健康的な暮らしを送れて再建へ向けて前向きに動き出せるものになるよう試行錯誤することも大切だと思いました。(S 女性・鹿児島県)



美里町くすのき平仮設団地



南出口仮設団地

住宅の再建を考えておられる方、建て替えを諦め村営住宅を希望される方、「家」の在り方はそれぞれに異なりますが、恒久的な住まいの再建はこれからの重要な課題だと思いました。「家」とは何か、「今自分にできることは何か」を改めて考えるきっかけとなりました。(匿名 30代女性・熊本市)

南阿蘇コース

南阿蘇コースは、2カ所の仮設団地で入居者と座談会を行ったのち、阿蘇大橋の崩落現場を視察しました。

被災地の様子は写真や映像では幾度となくみていましたが、実際にその場で、山の斜面の崩壊、断層の大きさなどを目の当たりにすると、ヒトの力ではどうにもあらがえないような大自然の脅威を感じさせられました。(M 40代女性・熊本市)



日頃からよく集会所を利用されている方々は、抱えている問題もお互いに理解しあえているようでした。いざという時に助けてくれる人が近くにいるだけでも、集まって住む意味はあるのだと思いました。(伊勢文音さん 30代女性・熊本市)

南出口仮設団地



南阿蘇村下野山田仮設団地



協賛事業

(株)肥後銀行県庁支店パネル展

- 主 催：株式会社肥後銀行県庁支店
- 日 時：8月1日(火)～11月30日(木)
- 会 場：肥後銀行県庁支店(熊本市)
- 内 容：和水町立三加和小中学校や三角港フェリーターミナル(海のピラミッド)などの写真パネルを展示。



みんなの家展

- 主 催：特定非営利活動法人HOME-FOR-ALL
- 日 時：8月8日(火)～9月30日(土)
- 会 場：建築倉庫ミュージアム(東京都)
- 内 容：東日本大震災から年月が経過していく中での建築のあり方、建築家たちはどのような願いを込めてみんなの家を作ったのか、東北みんなの家、熊本みんなの家の模型を中心に紹介した。「出品作家」伊東豊雄、妹島和世、山本理顕、東北及び熊本のみんなの家の各設計者
- 来場者数：3,629名



地引き網体験

- 主 催：県立あしきた青少年の家・熊本県環境センター
- 日 時：8月26日(土)
- 会 場：あしきた青少年の家、マリンパークビーチ(芦北町)
- 内 容：熊本県環境センター職員による環境学習や、マリンパークビーチでの地引き網の体験。
- 来場者数：177名



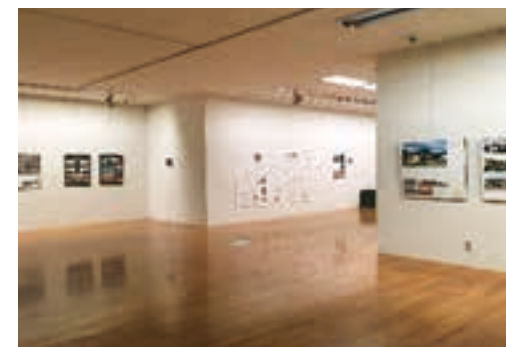
介護老人保健施設 愛・ライフ内牧 開設20周年感謝祭

- 主 催：介護老人保健施設愛・ライフ内牧
- 日 時：8月27日(日)
- 会 場：愛・ライフ内牧(阿蘇市)
- 内 容：開設20周年を迎えたことへの感謝の場として2部制の感謝祭を開催。第1部は入所者及びその家族の方々と、第2部は地域住民の方々とを招待し、赤牛焼き等の食事や花童の舞踊、また屋台やステージ出し物で皆様方に楽しいひと時を過ごしていただいた。
- 来場者数：612名



第29回熊本の建築家作品展

- 主 催：公益社団法人日本建築家協会九州支部熊本地域会
- 日 時：8月29日(火)～9月3日(日)
- 会 場：県立美術館分館(熊本市)
- 内 容：熊本の建築家の作品について、コンセプトや図面写真のパネル展示や、みんなの家のパネルを展示。
- 来場者数：326名



くまもとお菓子まつり in 阿蘇

- 主 催：くまもとお菓子まつり in 阿蘇実行委員会
- 日 時：9月10日(日)
- 会 場：介護老人保健施設 愛・ライフ内牧「みんなの家」、デイサービスセンター宝泉郷(阿蘇市)
- 内 容：阿蘇7軒の菓子店、病院及び団体賛同者により開催。お菓子作り体験、お菓子の販売やステージイベントを開催。
- 来場者数：約4,000名



「住まいの耐震博覧会」「木と住まいの大博覧会」

- 主 催：ナイス株式会社
- 日 時：9月16日(土)～9月17日(日)
- 会 場：マリンメッセ福岡(福岡県)
- 内 容：「地震に強い家づくり」と「森林と都市を人を木でつなぐ」をテーマにして、子どもにも分かりやすいように実物の住宅、木材、建材を展示し見て触れるような展覧会を開催。
- 来場者数：12,925名



賃貸住宅の住環境向上セミナー

- 主 催：公益財団法人日本賃貸住宅管理協会熊本県支部
- 日 時：10月21日(土)
- 会 場：ホテル日航熊本(熊本市)
- 内 容：「新たな住宅セーフティネット制度」、「熊本市居住支援協議会」、「民間賃貸住宅への様々な融資制度」、「居ながらできる賃貸住宅の耐震補強工事」について講演会を開催。
- 来場者数：209名



「くまもと型復興住宅」モデルプラン展示・相談会

- 主催： 熊本県・熊本県地域型復興住宅推進協議会
- 日時： 11月3日(金)
- 会場： 熊本県庁(熊本市)
- 内容： 「くまもと型復興住宅」ガイドブックで紹介する55のモデルプランと3のモデル住宅プランのパネル展示及び各プランを提案するグループスタッフによる個別相談会、住宅再建・融資相談会を開催。
- 来場者数： 約150名



DIYリノベーション start up @キタクマ(北熊)

- 主催： 株式会社村田建築設計所
- 日時： 11月4日(土)
- 会場： ARCH(アーチ)((株)村田建築設計所内)(玉名市)
- 内容： 小学生を対象としたDIY講座「バリケードつくりワークショップ」や、『スクラップ&ビルドの未来』として、大牟田市の古き資産活用を進める富山博史氏、西原村の被災地で支援活動にあたる吉丸一男氏を迎えてお話を開催。
- 来場者数： 29名



うき消防ふれあいフェア

- 主催： 宇城幼少年婦人防火委員会、宇城広域連合消防本部
- 日時： 11月11日(土)
- 会場： 宇土シティモール(宇土市)
- 内容： 高さ30m地点からの救助隊の降下、メイン会場では心肺蘇生法、建築相談コーナー、消火訓練、煙体験コーナー、119通報訓練コーナーなど、多彩な催しを開き、住民の防火・防災意識の高揚と住宅用火災警報器の普及啓発を図ることができた。また、緑川保育園幼年消防クラブの滲刺としたダンス、「うとん行長ちゃん」や「ひごまる」も登場した。
- 来場者数： 1,000名



くまもと県産材の新たな製品づくりに向けた講習会

- 主催： くまもと県産材共同集出荷センター
- 日時： 11月16日(木)
- 会場： 熊本県林業研究指導所(熊本市)
- 内容： 「丸太液状化対策&カーボンストック工法」や「非住宅分野に向けた構造材生産」について講演会を開催。
- 来場者数： 36名



平成29年度熊本県耐震対策講演会

- 主催： 熊本県
- 日時： 11月25日(土)
- 会場： やつしろハーモニーホール(八代市)
- 内容： 「熊本地震と耐震基準～大地震後も住み続けられる住宅をめざして～」を演題に、大橋好光氏の講演や八代市住宅耐震補助制度を説明し、戸建て住宅等の耐震診断・耐震改修の必要性について、県民に普及啓発を図った。
- 来場者数： 75名



第30回クリスマス ライティング パーティ

- 主催： 公益社団法人日本建築家協会九州支部熊本地域会
- 日時： 12月1日(金)
- 会場： 同仁堂ホール スタジオライブ(熊本市)
- 内容： 手作りの照明器具を持ち寄り、参加者と楽しく談笑し、交流を深めた。
- 来場者数： 65名



くまもとの力～熊本型応急仮設住宅はじめて物語

- 主催： 一般社団法人KKN(熊本工務店ネットワーク)、一般財団法人熊本県建築住宅センター
- 日時： 12月13日(水)
- 会場： ホテル熊本テルサ(熊本市)
- 内容： 「新たな住宅セーフティネット制度」、「熊本市居住支援協議会」、「民間賃貸住宅への様々な融資制度」、「居ながらできる賃貸住宅の耐震補強工事」について講演会を開催。
- 来場者数： 209名



災害フォーラム「2016年熊本地震 被災地の現状と復旧・復興への取り組み」

- 主催： 一般社団法人日本建築学会九州支部
- 日時： 12月15日(金)
- 会場： 熊本大学工学部百周年記念館(熊本市)
- 内容： 熊本地震の被害状況を行うとともに、被災後のまちづくり、避難所や仮設住宅団地での取り組みや課題を紹介し、熊本城の城下町(新町古町)と熊本城の復旧復興の現状について講演会を開催。
- 来場者数： 40名



建築展を終えて

桂 英 昭

くまもとアートポリスアドバイザー



熊本震災のため延期された「くまもとアートポリス（KAP）建築展2017」を無事終えることができ安堵しているところです。被災された多くの方々、ボランティアに参加されたの方々、医療や防災などに関わられているの方々、建築やまちづくり関係の方々、建設業務に携わられているの方々、シンポジウムや企画に参加されたの方々、そして行政等々のご理解、ご協力やご支援の賜物であると感謝しております。

KAPがスタートした時から約30年の時を経て4年ごとに活動を総括する建築展を7度体験してきましたが、今回の節目には、被災体験や復興への思いからくるものだけでなく、感慨深いものがあります。

東日本大震災の被災地のために伊東コミッションが発案し蒲島知事の賛同でつくられた仙台市宮城野区「みんなの家」は、翌年の九州北部豪雨で被災した阿蘇市の「みんなの家」につながりました。いうまでもなく、この経験が「みんなの家」のある熊本型応急仮設団地に活かされました。現在は本格的な住まいの復興を目指して様々なタイプの災害公営住宅が計画され、建設段階に移行しているところです。民間支援金で被災地の公民館型の「みんなの家」計画も進んでおり、民間建設業界の復興型住宅などの建設が目立ってまいりました。更には、住まいの復興だけでなく、安心安全のテーマで民間病院関係プロジェクトや防災施設プロジェクトなどとも連動し、これまでの活動でのノウハウが活用される大きな広がりをもつ展開となっています。

建築展2017では、これらの成果や展望を語る様々な企画がありました。その中でも熊本市現代美術館で開催された『くまもとアートポリス みんなの家 展覧会』と、県庁地下大会議室でのシンポジウム『「一緒に考え、一緒につくる」～熊本地震からのすまいの再建～』におけるパネルディスカッションと対談は強く印象に残っています。

特に「みんなの家 展覧会」での仮設住民の方々の目でとらえた生活写真やインタビュー映像は、「何のために建築はあるのか」或いは「建築はどの様にしてつくっていかなければならないか」の原点を問いかけていただきました。

シンポジウムと対談は、市民と産官学の新しい時代のコラボレーションから建築やまちづくりの未来がみえてくることを確信させる情報発信となりました。

先に述べた感慨深い思いとは、KAP積年のテーマである「点から線、線から面」という建築活動の広がり「文化的資産としての建築」のあり方を具体的なかたちで共有する糸口をやっと感じる事ができたことに他なりません。

そして、如何なる場合もKAPの真骨頂である新鮮で革新的なデザインは、ワークショップなどを媒体としたソフト面から誘発されなければならないことを改めて示唆してくれたと考えています。

客観性を失うことなく、継続することでしか得られないものを目指し、次の建築展に向けてのエネルギーをみんなの力で蓄えていきたいものです。



参 考 資 料

新聞広告

● 建築展全体

11月11日(土) 熊本日日新聞(朝刊全5段白黒)



● 熊本シンポジウム

12月9日(土) 熊本日日新聞(朝刊全3段白黒)



● 熊本シンポジウム・展覧会

12月9日(土) 西日本新聞(朝刊白黒)※無償



情報誌等広告(無償)

● 展覧会

11月

熊本市市政だより(11月号)

● 建築展全体

11月

熊本県建築士会会報へのチラシ折込

● 展覧会オープニングトークイベント

12月1日(金)

くまにちすばいす

● 展覧会

12月22日(金)

くまにちすばいす

ラジオ放送

● 展覧会

11月8日(水)

FM791 熊本シティエフエム「おはよう熊本市」

11月16日(木)、12月21日(木) FM791 熊本シティエフエム「ダウンタウン・ストリート・ショップ」

インターネット等による広報

● 各イベントの開催

6月から

くまもとアートポリスホームページ、同フェイスブック、同ツイッター

● 東京シンポジウム

8月

新建築online

その他

● 東京シンポジウム、展覧会

8月17日(木)、10月26日(木)

熊本県情報サイト 気になるくまもと!メールマガジン

● 各イベントの開催

11月

リーフレット及びポスターを都道府県・政令市、建築関係団体及び関西以西の建築系大学等へ郵送

● 各イベントの開催

11月

県庁地下1階連絡通路展示ケース

印刷物		
内容	仕様	部数
くまもとアートポリス建築展2017開催告知ポスター	A2判	300部
くまもとアートポリス建築展2017開催告知リーフレット	A3判(DM折・両面)	5,000部
くまもとアートポリス建築展2017東京シンポジウム周知チラシ	A4判(両面)	100部
くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウムプログラム	A4判(両面)	350部
くまもとアートポリス建築展2017みんなの家の展覧会周知チラシ	A4判(両面)	5,000部
くまもとアートポリス建築展2017みんなの家の展覧会周知ポスター	B2判	20部
くまもとアートポリス建築展2017みんなの家の展覧会(カメラ講座参加者募集周知チラシ)	A4判	700部
くまもとアートポリス建築展2017展覧会オープニングトークイベント周知チラシ	A4判	200部
くまもとアートポリス建築展2017こども建築塾周知チラシ	A4判	3,000部
くまもとアートポリス建築展2017こども建築塾公開発表会周知チラシ	A4判	500部
くまもとアートポリス建築展2017仮設団地リポートツアー周知チラシ	A4判	200部

開催告知ポスター

11.17(金)-1.8(日+祝) (全14回)

熊本市現代美術館

くまもとアートポリス みんなの家の 展覧会

12.2(土) 13:00-16:00

熊本のいま、そして

12.16(日) 13:00-16:00

こども建築塾

11.26(日)

仮設団地リポートツアー

くまもとアートポリス建築展2017

「一緒に考え、一緒につくる」

～熊本地震からのすまいの再建～

くまもとアートポリス建築展2017実行委員会 事務局(熊本県建築審議会)

11月17日(金) 13:00-16:00 11月18日(土) 13:00-16:00 11月19日(日) 13:00-16:00

熊本市現代美術館

開催告知リーフレット

「一緒に考え、一緒につくる」

～熊本地震からのすまいの再建～

11.26日 仮設団地リポートツアー

12.10日

第1部 パネルディスカッション「災害に負けない熊本」

第2部 対談「熊本地震からのすまいの再建」

第3部 表彰式 第22回くまもとアートポリス推進賞

17:30 みんなの交流会

くまもとアートポリス みんなの家の展覧会

11.17日-1.8日

12.2日

12.16日

くまもとアートポリス建築展2017

「一緒に考え、一緒につくる」

～熊本地震からのすまいの再建～

くまもとアートポリス建築展2017実行委員会 事務局(熊本県建築審議会)

東京シンポジウム周知チラシ

くまもとアートポリス建築展2017 東京シンポジウム

みんなの家、その先へ

伊東豊雄 桂 英昭 末廣香織

曾我部昌史 山本理顕 妹島和世

アストリッド・クライン

平田晃久 大西麻貴 近藤哲雄

原田展幸 山室昌敬 甲斐健一

工藤和美 内田文雄 岡野道子

「みんなの家」展

2017年9月2日(土) 14:00-17:00(開場13:30) 寺田倉庫G3-6F

2017年8月8日(火)-9月30日(土) 建築倉庫ミュージアム 東京都品川区東品川2-6-10 6階

熊本シンポジウムプログラム

くまもとアートポリス建築展2017

熊本シンポジウム

「一緒に考え、一緒につくる」

～熊本地震からのすまいの再建～

13:00 開会宣言

13:05 第1部 パネルディスカッション『災害に負けない熊本』

14:20 休憩

14:35 第2部 対談『熊本地震からのすまいの再建』

15:55 休憩

16:10 第3部 表彰式『第22回くまもとアートポリス推進賞』

17:00 閉会

18:00 みんなの交流会(6時) 会場|ホテル熊本デルサ|3階たいむの里

くまもとアートポリス建築展2017 東京シンポジウム「みんなの家、その先へ」

第1部 東北での「みんなの家」をめぐる

第2部 熊本での「みんなの家」をめぐる

第3部 熊本での災害公営住宅をめぐる

みんなの家 展

くまもとアートポリス建築展2017 東京シンポジウム「みんなの家、その先へ」

2017年9月2日(土) 14:00-17:00(開場13:30) 寺田倉庫G3-6F

2017年8月8日(火)-9月30日(土) 建築倉庫ミュージアム 東京都品川区東品川2-6-10 6階

第1部 パネルディスカッション『災害に負けない熊本』

有藤 隆 小川 次郎

川島 春孝 下村 貴文

吉原 さなえ 榎澤 義

山田 一徳 末廣 香織

第2部 対談『熊本地震からのすまいの再建』

奥山 恵美子 佐上 健太郎

伊東 豊雄 曾我部 昌史

くまもとアートポリス (KAP)

みんなの家の展覧会周知チラシ

くまもとアートポリス建築展2017

くまもと
アートポリス
KUMAMOTO
ART POLIS

かわらない日常、
いつでも、
どこにいても、
熊本地震被災者が撮影した日常の記録

くまもとアートポリス

みんなの家の 展覧会

2017.11.17 FRI - 2018.1.8 MON (休日: 毎週火曜、年休年休 12.20 - 1.3)

熊本市現代美術館

入場無料

(ギャラリーⅢ・井手宣通記念ギャラリー)

主催: 熊本市・くまもとアートポリス運営2017実行委員会
企画: クラウド・デザイン・アーキテクト

共催: 熊本県現代美術館 (熊本市・公益財団法人熊本県美術館文化芸術振興財団)
協力: NPO法人 HOME-POLE-A&L

みんなの家の展覧会周知ポスター

くまもとアートポリス建築展2017

くまもと
アートポリス
CUMAMOTO
ART POLIS

かわらない日常、
いつでも、
どこにいても、

熊本地震被災者が撮影した日常の記録

くまもとアートポリス

みんなの家の展覧会

2017.11.17 FRI - 2018.1.8 MON (8日曜、毎週火曜、年末年始 12.29-1.3)

熊本市現代美術館

入場無料

(ギャラリーIII・昇平堂遺跡倉庫ギャラリー)

主催：熊本県・くまもとアートポリス振興会2017実行委員会
後援：クワン・デザイン アーキテクト

共催：熊本県現代美術館（熊本県・公益財団法人熊本県美術館）
協力：NPO法人 HOME-FOR ALL

KUMAMOTO ARTPOLIS 2017

展覧会オープニングトークイベント周知チラシ

熊本地震 | 被災者やゲストが震災後の熊本を語る

くまもとアートポリス
KUMAMOTO ART POLIS

14:00 写真展レモニー

14:30 ペチャクチャイベント in 熊本

Guest1 林田 豊	写真展参加者 益城町テクノ仮設団地
Guest2 森本 ひとみ	写真展参加者 益城町水山仮設団地
Guest3 中村 こども	フォトグラフアー 展覧会写真監修
Guest4 井手 良雄	阿蘇復興への道 東海大学
Guest5 片山 広大	チーム熊本 熊本地震ボランティア支援
Guest6 sho maa	デジタルアート作家 益城町復興大使
Guest7 Coming Soon	(後発表)

オープニングイベント会場
クラインダイラム アークテック2000m
〒962-0201 熊本県上益城郡小国町小国2-1-1 クラインダイラム アークテック2000m

このイベントは、被災者の声や経験を伝えるための場です。被災者の声を聴き、被災地の現状を知り、復興のために力を尽くすことが目的です。

くまもとアートポリス建築編2017

くまもとアートポリス みんなの家の 展覧会 11.17 - 1.8



熊本のいま、そして

展覧会 オープニングトークイベント

12.2 [土]

14:00 - 16:00
(開場 13:30)

参加費無料 定員 100名
(先着順・要予約)

PechaKucha 20x20

ペチャクチャイベント in 熊本

会場 熊本市現代美術館 ホームギャラリー

くまもとアートポリス
くまもとの未来を創る



主催：熊本県・くまもとアートポリス運営委員会
共催：熊本県文化振興局・熊本県立美術館・熊本市現代美術館
企画運営：クラインダイラム アークテック / PechaKucha HQ
協力：PechaKucha Night (kumamoto)

問い合わせ
TEL 096-6570 熊本県公共施設センター1階 TEL 096-3845000
Tel : 096-333-9537 Fax : 096-384-9540
Mail : kinfo@kumamoto-artpolis.jp

こども建築塾公開発表会周知チラシ

くまもとアートポリス建築塾2017 / くまもとアートポリス 市民協会の 開催（公開イベント）

平成29年度くまもとアートポリス市民大学
けん 巧く しょく

こども建築塾

こんな「みんなの家」があったらいいな

へくが、わたしが、くまもと地盤からの復興を考える～
市内の20名の小学生（4年から6年生）が、甲子町の災害公営住宅の計画図をイメージして、
どんな「みんなの家」があったらいいか考え、紙を指いて、模型をつくります。
子供たちが考えた「みんなの家」を公開で発表しますので、ぜひご覧ください。



子供が考えた
「みんなの家」
公开发表会
（自由観覧）
参加費無料・当日先着順

会場 **熊本市現代美術館** ホームギャラリー
（熊本市中央区上通町2-3（びげす熊日会館3階））

日時 **12.16** [土曜日]
15:30 - 16:30

おこども建築塾は11月4日から開始し、子供たちが発表づくりをしています。

主 催 熊本県・くまもとアートポリス建築塾2017実行委員会
共 催 熊本市民協会の館（熊本市） 公民館（熊本市）市民文化センター
後援 熊本市 文化芸術振興課 熊本市 公民館（熊本市）市民文化センター
お問い合わせ 096-233-2637 Fax: 096-233-2637

集合せう!
Y862-0970 熊本市中央区茶臼山4-18-1（熊本県民総合文化センター）
Tel: 096-233-2637 Fax: 096-233-2637

写真 大塚 眞理
アストリッド・クワインさん（建築家）



こども建築塾周知チラシ

くまもとアートポリス 2017 くまもとアートの未来 企画展「こどもアート」

平成29年度くまもとアートポリス 文化庁大賞
けん ちく じゅく

こども建築塾

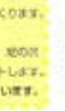
こんな「みんなの家」があったらいいな

参加者募集
市内の小学4～6年生
年20名程度（要選考）

～みんなで、くまもと地盤からの復興（ふっこう）を考えよう～
 ばくが、わたしが「みんなの家」を設計してみよう！
 「みんなの家」は、くまもと地盤で被災（ひびき）した方のためにつくられた集合体です。
 そこでは、復興に向けて話をし、ごはんを食べたり、みんなが集まります。
 今回「みんなの家」を設計する場所は、被災した方がこれから生活する、
 災害公営住宅（さいがいこうえいじゅうたく）のモデルの計画地です。
 どんな「みんなの家」がいいか、そこで何をするか、絵を描いて模型を作って考えてみましょう。



くまもとアートポリス
講師
アストリッド・クラインさん(建築家)



「みんなの家」や災害公営住宅がはらなくて大丈夫！とくまもとの復興を教えてください。

当日までに「みんなの家」の絵を描いてきてもらいます。本日は、絵や模型がふるまうと絵が（えが）い づつていきます。ハサリ、カッターを使います。

持ってくるものは、鉛筆、消しゴム、ハサミ、のり、絵の具、折り紙、色紙、お気に入りの紙や布、お気に入りの布や紙です。（注）申込書に保護者の姓・住所の記載を求めています。

12/16

【土曜日】

日 時：12月16日(土)午前11時～午後4時半

会 場：熊本市現代美術館（キョウシフツコウビ）

参加費：無料

申込方法：申込書が必要です。

申込期限：11月29日（水）必着

主 催 くまもとくまもとアートポリス2017建築塾2017実行委員会
共 催 くまもと文化振興委員会（公財）くまもとの未来文化財団（財）建設局
後 援 クラウド・デザイン・アーキテクツ（KDG）

【申込みの問い合わせ先】
 〒852-8870 熊本市中央区水辺1-18-1（熊本県建設局）
 Tel：096-253-5257 Fax：096-284-5522
 Mail：kug@net.kumamoto.jp

仮設団地リポートツアー周知チラシ

くまもとアートポリス建築塾2017 市民大学

仮設団地リポートツアー

参加費 無料

くまもとアートポリス KUMAMOTO ARTS POLIS

仮設団地を巡りリポーターとなって「熊本のいま」をリポートしよう

平成28年4月、震度7の大地震が2度も起きた熊本
 発災後1年半が経とうとする今の状況と、
 被災地風景や仮設団地にお住まいの方々の生活を通して
 「熊本のいま」をリポートするツアーです

11月
26日
土曜日

甲佐・美里コース

参加費 25円

9:00 J尺俣本駅（新幹線口）出発
 9:30 県庁出発

○上益城郡の復興・復興状況を視察（※初）
 ○座談会その1（1箇所）
 ○中阿蘇新設団地（プレハブ仮設住宅）
 ○座談会その2
 ○美里町の千年新設団地（木造仮設住宅）
 ○美里町・佐俣の湯（物産館、公民館等）

16:10 県庁到着
 16:40 J尺俣本駅（新幹線口）到着

12月
2日
土曜日

南阿蘇コース

参加費 15円

9:00 J尺俣本駅（新幹線口）出発
 9:30 県庁出発

○座談会その1
 新出口新設団地（大津町）（プレハブ仮設住宅）
 ○座談会その2（2箇所）
 高瀬新村下野山仮設団地（木造新設住宅）
 ○南阿蘇村の復興・復興状況を視察
 ○南阿蘇村あまの湯の郷くさの（物産館）

16:00 県庁到着
 16:30 J尺俣本駅（新幹線口）到着





座談会
視察
 会場
 交通

○防災意識を高めよう！
 熊本の復興、生活再建のために必要となる。皆ごらの備えに必要なことばかりなを想いを感じ、防災意識を高めよう。

○被災者の生活を未来へつなごう！
 リポーター、ご協力やお住まいの地域で役立てよう。また、学びの場を創出しよう。

日 期 平成29年11月26日（土）

会 場 J尺俣本駅（新幹線口）J尺俣本駅（のりば）から徒歩約5分。各時刻の上記コースを乗車してください。

計 費 被災者からの手当・復興費や防災に準拠のある方（定員に達しない場合は抽籤によって取り次ぎ）
 ※定員（※座席数を超える場合は、レポート（感想等）を提出して頂きます）

お 込 費 無料 ※ご自宅から集合・解散駅までの交通費、「佐俣の湯」「あまの湯」の郷くさのでのお買い物等の料金は各自負担となります。

お 込 方 法 募集の配付に記入の上、郵送、FAX又はEメールでお申し込みください。

お 込 締 切 平成29年11月15日（水）必着

注 意 事 項 ※参加者の登録には、旅行傷害保険に加入している必要があります（無料）。

※雨天等の場合は、旅行駐車場までご利用いただけます（無料）。

主催：熊本市
 共催：くまもとアートポリス建築塾2017実行委員会（事務局：熊本県建築塾内）

お問い合わせ

電話 096-333-2525

内容	新聞社	掲載日
くまもとアートポリス建築展2017東京シンポジウム	熊本日日新聞	2017/9/4
くまもとアートポリス建築展2017東京シンポジウム	建設通信新聞	2017/9/13
くまもとアートポリス建築展2017全体	九建日報	2017/11/1
くまもとアートポリス建築展2017展覧会	熊本日日新聞	2017/11/18
くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウム	西日本建設新聞	2017/11/20
くまもとアートポリス建築展2017レポートツアー	熊本日日新聞	2017/11/27
くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウム	建設通信新聞	2017/12/8
くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウム	熊本日日新聞	2017/12/12
くまもとアートポリス建築展2017熊本シンポジウム	西日本建設新聞	2017/12/14
くまもとアートポリス建築展2017展覧会	西日本新聞	2017/12/15
くまもとアートポリス建築展2017こども建築塾	建設通信新聞	2017/12/15
くまもとアートポリス建築展2017こども建築塾	熊本日日新聞	2017/12/17

東京シンポジウム
建設通信新聞 2017/9/13

「みんなの家」建築家ら意見

くまもとアートポリス 東京でシンポ

「みんなの家」などについて市内の建築家らが意見を交わしたシンポジウム＝２日、東京都品川区

人々が出席。アートポリス事業の一環として整備された「みんなの家」に開かれた県内外の建築家らが登壇した。

第35回くらしの工芸展2017（県伝統工芸館、熊日主催）の作品受付けが3日締め切られ、県内外の178人から陶芸や木工など263点の応募があった。

同展は、暮らしに安らぎとめくりをもたらす手作りの工芸品を対象にした公募展。8日に審査会「非公明」を開いてランブリの熊日貴なを決定し、9日付本紙朝刊に掲載する。

審査員は小山哲男さん（陶芸作家・日本工芸会正会員）、福山弘基さん（京都府立総合芸術センター学芸主任、萩野克彦さん（アクトクテザイナー）、宮崎珠太郎さん（竹工芸家）。

入賞・入選作品は10月31日の11日展、熊本市中央区の県伝統工芸館で開かれる。（清島理紗）

んだ「みんなの家」を西原村で建設した経緯を紹介し、「開放的にしたので住民が自由に出入りし、いろんな活動に使われている」と報告。くまもとアートポリスの伊東豊雄コミッショナーは「熊本地震で壊れた木造の仮設住宅はたまたまいが温かみ、今後の災害の前例になる」と語った。

建築展は来年1月まで、県内での展覧会やシンポジウムなどを予定している。

（内田裕之）

東京シンポジウム
熊本日新聞 2017/9/4

KAP 建築展の概要

12月10日にシンポジウム

熊本県

【熊本】熊本県は「くまもとアートポリス建築展2017」の主なイベント開催概要を発表。11月から12月にかけてシンポジウムや展覧会等を開催する。

「くまもとアートポリス」(KAP)は、昭和63年から県の事業として始まり、これまでに県内において後世に残る優れた建造物を整備するなど、地域の活性化に取り組んできた。また熊本地震では、応急仮設住宅や集会施設「みんなの家」の整備に取り組み、被災者に寄り添う活動なども行っている。

今年、KAPでは、熊本地震のため昨年開催を見送った4年に1度の建築展を、復旧・復興につなげるアートポリスの取り組みなどを題材に開催する。テーマは「一緒に考え、一緒につくる」熊

本地震からのすまいの再建。

12月10日に、メインイベントとして開催するシンポジウムでは「熊本地震からのすまいの再建」をテーマに蒲島知事と熊本県の復旧・復興に関わる登壇者(KAPコミッショナーの伊東豊雄氏など3人)が対談。

また11月17日からは熊本市現代美術館で展覧会を開催。26日に開催する仮設団地リポートツアーでは「みんなの家」で被災者との座談会を行い、被災地の現状を発信する。

くまもとアートポリス建築展2017全体
九建日報 2017/11/1

[illegible]

熊本シンポジウム
西日本建設新聞 2017/12/14

熊本シンポジウム
建設通信新聞 2017/12/8

住まいの再建チーム
10日にシンポジウム

熊本県

熊本県は10日、県庁地下大会議室で、2016年熊本地震からの住まいの再建をテーマにしたシンポジウムを開く。蒲島郁夫知事と、くまもとアートポリス(KAP)コミッションで建築家の伊東豊雄氏ら復旧・復興に関わる代表者が対談し、再建への道

筋を考える。

シンポジウムは、熊本地震被災地の現状を県内外に発信することなどを目的に、ことし8月から18年1月にかけて実施している「くまもとアートポリス建築展2017」の一環となる。

3部構成となり、1部が「災害に負けない熊本」をテーマにしたパネルディスカッションで、KAPで取り組んだ医療・防災施設から災害時の役割を学ぶ。2部は、蒲島知事、伊東氏、荻上健太郎日本財団経営企画部長、前仙台市長の奥山恵美子氏によるシンポジウムテーマの対談を行い、3部に第2回くまもとアートポリス推進賞の表彰式を行う。

時間は午後1時から5時まで。定員300人。無料。問い合わせはKAP建築展2017実行委員会事務局（県建築課内）・電話096-333-2637。

くまもとアートポリス
推進賞など5件表彰

第22回くまもとアートポリス推進賞の表彰式が10日、県庁であり、推進賞2件と次点の選賞3件の事業主と設計者、施工者を表彰した。

同賞は、県がアートポリス事業の一環として1995年に創設。おおよね5年以内に完成した県内の建造物を対象に毎年公募している。今回は35件の応募があり、推進賞に「わかたけ保育園」（水俣市）と「再春館製菓所」体育館サクラリーナ」（益城町）を選んだ。選賞は個人住宅「SA HOUSE」（熊本市）とギャラリー兼住宅「GALLERY FLOWER GARDEN」（宇城市）、放送局「熊本県民テレビ新社屋」（熊本市）。式では、蒲島郁夫知事が受賞者に表彰状を手渡した。選考委員長の北野隆熊本大名誉教授は「応募があった建築物からは、創造的復興への思いが伝わって」と講評した。

（林田賢一郎）



熊本シンポジウム
熊本日新聞 2017/12/12

展覧会
熊本日新聞 2017/11/18

熊本シンポジウム
西日本建設新聞 2017/11/20

来月、県庁でKAPシンポ
「一緒に考え、一緒につくる」テーマに

くまもとアートポリス(KAP)建築展2017」のメインイベントとなるシンポジウム「一緒に考え、一緒につくる」が、12月10日午後1時から県庁本館地下大会議室で開催される。入場無料。

第1部では、KAPで取り組んだ阿蘇内牧温泉みんなの家、高野病院、県総合防災航空センターの設計者らが、「災害に負けない熊本」をテーマにパネルディスカッション。第2部は、KAPの伊東豊雄コミッション、日本財団の荻上健太郎経営企画部長、奥山恵美子前仙台市長、蒲島郁夫知事への4氏が対談。「熊本地震からのすまいの再建」と題し、復興への道筋を考える。

第2回KAP推進賞の表彰式もある。

被災者の今 伝えたい

「仮設団地ツアー」大学生ら悩み聞く

仮設団地リポートツアー
熊本日日新聞 2017/11/27

熊本地震で整備された仮設団地を巡って、被災者の現状を発信してもらった「仮設団地リポートツアー」が26日、甲佐町などであった。参加者は入居者から話を聞いたり、被災状況を見たりした。

復旧・復興に向かう被災地の今を知ってもらう、継続的な支援につなげようと、県が初めて企画。県内外から参加した大学生や建築士ら27人が、甲佐・美里コースと南阿蘇コースの2班に分かれてバスで巡った。	甲佐・美里コースには11人が参加。甲佐町の白旗仮設団地では、住民から被災直後の体験や仮設住宅での暮らし、今後の生活再建に向けた悩みなどを	聞いた。大阪府堺市の大学院生の東野健太さん24は「大阪では今、熊本地震のニュ	ースはほとんど報じられていない。仮設の現状を見て、しっかり伝えていきたい」と話した。一行は益城町中心部を視察したほか、美里町の仮設団地も回
った。	南阿蘇コースの16人は、大津町と南阿蘇村の仮設団地で住民と交流した。	(久保田尚之)	

白旗仮設団地の入居者たち（右側）から仮設での暮らしなどを聞くレポートツアーの参加者＝甲佐町

仮設暮らし 写真で表現

熊本市現代美術館 入居者らら撮影

熊本地震の仮設住宅団地で暮らす人や、高校生が撮影した写真を展示する「みんなの家」の展覧会が17日、熊本市中央区の市現代美術館で始まった。県などとアトポリス建築展2017の関連行事。来月1月8日まで。

被災地の現状を知ってもらおうと企画。仮設団地でのデジタルカメラ講座に参加した8歳から73歳の10人のボランティアが撮影した写真の1部は壁にも飾った。

庭先で談笑するお年寄りや、玄関前でナスを仕分けする女性、笑顔をヒースサインをす

か、第二高と銅船高の0枚を布にプリントし、仮設団地内の集会施設「みんなの家」をイメージした木製の大型模型5棟に、壁根や壁に見立ててかけた。写真の一部は壁にも飾った。

庭先で談笑するお年寄りや、玄関前でナスを仕分けする女性、笑顔をヒースサインをす

る女の子、仮設住宅から見える青空や夕焼けなどが写されている。12月10日午後1時から熊本市県庁で、住宅の再建をテーマに二緒に考え「一緒に」を題したシンポジウムも開く。定員3000人。入場無料。県建築課096(333)2537。(中原功一朗)

「みんなの家」の大型模型の壁や壁根に展示された写真

熊本市現代美術館



被災者の今 伝えたい

「仮設団地ツアー」大学生ら悩み聞く

熊本地震で整備された仮設団地を巡って、被災者の現状を発信してもらう「仮設団地リポートツアー」が26日、甲佐町などであった。参加者は入居者から話を聞いたり、被災状況を見たりした。

熊本地震で整備された仮設団地を巡って、被災者の現状を発信してもらう「仮設団地リポートツアー」が26日、甲佐町などであった。参加者は入居者から話を聞いたり、被災状況を見たりした。

復旧・復興に向かう被災地の今を知ってもらい、継続的な支援につなげようと、県が初めて企画。県内外から参加した大学生や建築士ら27人が、甲佐・美里コースと南阿蘇コースの2班に分かれてバスで巡った。

甲佐・美里コースには11人が参加。甲佐町の白旗仮設団地では、住民から被災直後の体験や仮設住宅での暮らし、今後の生活再建に向けた悩みなどを聞いた。大阪府堺市の大学院生の東野健太さん(24)は「大阪では今、熊本地震のニュースはほとんど報じられていない。仮設の現状を見て、しっかり伝えていきたい」と話した。一行は益城町中心部を視察したほか、美里町の仮設団地も回った。

南阿蘇コースの16人は、大津町と南阿蘇村の仮設団地で住民と交流した。

(久保田尚之)

白旗仮設団地の入居者たち(右側)から仮設での暮らしなどを聞くリポートツアーの参加者=甲佐町



「みんなの家の写真展」には、仮設入居者らが撮影した写真約650枚が展示されている

仮設入居者撮影の写真展

熊本市現代美術館 被災者の日常650枚

仮設住宅の入居者が被災者の日常を写した写真展。来年1月8日（月）まで。くまもとアートポリスは「みんなの家」は、くまもとの家の展覧会が、くまもとアートポリスコミッションで建築家の伊東豊雄代美術館で開催されている。さん76らが、2011年の東日本大震災を受け、被災者の孤立を防ぐ目的で、仮設住宅団地に建てた集会所。木材が豊富な熊本県が資材を提供。昨年の熊本地震後、県内の仮設団地にも91棟が整備された。

写真展は、被災地の日常を記録に残そうと県から委託された建築会社が企画。希望した873歳の仮設入居者ら14人に一眼レフカメラを渡し、東京の写真家中心村くもさんが使い方を指導。8月10日に撮影した1万枚以上の写真から約650枚が選ばれた。熊本大建築学科の学生らが作成した

「みんなの家」の模型の壁や屋根に、外ではしゃぐ子どもたちや、法被に身を包んだ祭りの踊り子たちの写真が貼り付けられた。

撮影した14人は口々に「最初は被災地にカメラを向けるのに抵抗があった」というが、「景色を見る余裕ができて、花や空の美しさに救われた」「慣れ親しんだ町を記録する大切さを知った」と意義を語った。

午前10時～午後8時。火曜休館。入場無料。市現代美術館1096（278）美術館1096（278）7500。（増知里）

展覧会
西日本新聞 2017/12/15



厚紙で理想の「みんなの家」を作る小学生（左）＝熊本市中央区

熊本地震の災害公営住宅に設けられる集会所「みんなの家」について、小学生に理想の集会所の模型を作ってもらおうイベント「くども建築塾」が16日、熊本市中央区の市現代美術館であり、多彩なアイデアが発表された。災害公営住宅は、地震で自宅を失い、建て直したり、見つけたりするのが難しい人向けに市町村が造る。みんなの家は、仮設住宅団地にもあり、住んでいる人たちの交流の場となっている。

夢膨らむ「みんなの家」

熊本市 児童ら アイデアを模型に

あらかじめ描いた絵を基に、厚紙や段ボールなどを使って約3時間かけて模型を作った。作品は、屋根と壁がカラフルだったり、円柱のような形の建物を組み合わせたりとユニーク。光を採り入れようと、窓を多く設けた児童も。池田小6年の松尾歩さんは「イメージ通りに作れた。実際にできたらいいな」と喜んでた。

くども建築塾
熊本日日新聞 2017/12/17

くども建築塾開催
熊本県、くまもとアートポリス（KAP）建築展2017実行委員会は16日、熊本市の熊本市現代美術館でKAP建築展2017の一環として「くども建築塾」を開く。甲佐町や益城町など県内4市

6町1村の小学生20人が参加し、「みんなの家（集会所）」の理想像を模型としてつくり発表する。同建築展2017はKAPの成果を振り返り、熊本地震からの復旧・復興の発信と被災者の住まいの再建などを目的に8月から2018年1月にかけて実施している。建築塾では、「こんな『みんなの家』があったらいいな」をテーマに、子どもたちが甲佐町の災害公営住宅の計画地をイメージしてみんなの家の絵や模型をつくり、公開で発表する。

くども建築塾
建設通信新聞 2017/12/15

くまもとアートポリス建築展2017実行委員会会則

第1章 総則

(名称)

第1条 この団体は、くまもとアートポリス建築展2017実行委員会(以下「本会」という。)という。

(目的)

第2条 本会は、くまもとアートポリスのこれまでの成果を広く県内外に紹介し、アートポリスのさらなる飛躍と熊本ならではの魅力的な生活文化の創造を目指すとともに、「熊本地震からの復旧・復興の発信」や被災者が希望をもって「すまいの再建」を進められるよう、くまもとアートポリス建築展2017の開催を目的とする。

(業務)

第3条 本会は、前条の目的を達成するため、次のことを行う。

- (1)くまもとアートポリス建築展2017の計画に関すること。
- (2)くまもとアートポリス建築展2017の開催準備に関すること。
- (3)くまもとアートポリス建築展2017の実施運営に関すること。
- (4)その他、本会の目的達成に必要な事業に関すること。

第2章 委員等

(役員の種別及び選任)

第4条 本会には、次の役員を置く。

- 会 長 1名
- 副会長 2名
- 委 員 16名以内
- 監 事 1名

- 2 会長は熊本県知事とする。
- 3 副会長は、くまもとアートポリスコミッショナー及び熊本市長とする。
- 4 会長、副会長以外の委員及び監事は、会長が委嘱する。
- 5 委員及び監事は、相互に兼ねることはできない。

(役員の職務)

第5条 会長は、本会を代表し、会務を総括する。

- 2 副会長は、会長を補佐し、会長に事故があるとき又は会長が欠けたときは、その職務を代行する。
- 3 委員は、本会を構成し、会務の執行を決定する。
- 4 監事は、本会の業務執行状況を監査し、本会に報告する。

(任期)

第6条 会長、副会長、委員及び監事(以下「委員等」という。)の任期は、本会の目的を達成するまでとする。ただし、委員等が委嘱時におけるそれぞれの機関及び団体の役職を離れたときは、会長は当該委員等を解職し、解職された委員等の後任の役職の者に、新たに委員等を委嘱する。

第3章 実行委員会

(構成)

第7条 本会は、委員等をもって構成する。また、委員等が本会に出席できない場合は、委員等が定める代理人を含めて本会を構成することができるものとする。

(機能)

第8条 本会は、この会則に定めるもののほか次の事項を議決する。

- (1)事業計画の決定
- (2)事業報告の承認
- (3)その他、本会の運営に関する重要な事項

(招集)

第9条 本会は、会長が招集する。

(議長)

第10条 本会の議長は、会長又はあらかじめ会長が指名する者がこれに当たる。

(議決)

第11条 本会の議決は、本会構成員の総数の半数以上が出席する本会において、出席者の過半数の同意をもって決する。ただし、可否同数の場合は議長の決するところによる。

第4章 会計

(経費)

第12条 本会の経費は、負担金その他の収入をもって充てる。

(会計年度)

第13条 本会の会計年度は、平成29年4月1日に始まり、平成30年3月31日に終了する。

2 会計に関し必要な事項は、事務局長が定めるものの他、熊本県の財務に関する諸規則の例による。

(予算及び決算)

第14条 収支予算は、本会の議決を経て定め、収支決算は、監事の監査を経て本会の承認を得なければならない。

第5章 事務局

第15条 本会の事務を処理するために事務局を熊本県土木部建築住宅局建築課内に置く。

- 2 本会の事務局長は熊本県土木部建築住宅局建築課長とする。
- 3 事務局に関し必要な事項は、事務局長が別に定める。

第6章 雑則

(解散)

第16条 本会は、その目的が達成されたときに解散する。

(運営規則)

第17条 この会則に定めのあるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な規則は、会長が別に定める。

付 則

この会則は、平成29年6月12日から施行する。

役 職	委 員 名	氏名()は前任者
会 長	熊本県知事	蒲 島 郁 夫
副会長	くまもとアートポリスコミッショナー	伊 東 豊 雄
副会長	熊本市長	大 西 一 史
委 員	熊本県議会建設常任委員会委員長	淵 上 陽 一
委 員	熊本県市長会会長	中 嶋 憲 正 (高 崙 哲 哉)
委 員	熊本県町村会会長	荒 木 泰 臣
委 員	宇土市長	元 松 茂 樹
委 員	甲佐町長	奥 名 克 美
委 員	熊本県文化協会会長	吉 丸 良 治
委 員	(公社)熊本県観光連盟会長	矢 田 素 史
委 員	熊本大学学長	原 田 信 志
委 員	熊本県立大学学長	半 藤 英 明
委 員	(一社)日本建築学会九州支部熊本支所長	山 成 實
委 員	(一社)熊本県建設業協会会長	橋 口 光 徳
委 員	(一社)熊本県建築協会会長	岩 永 一 宏
委 員	(一社)熊本県建築士事務所協会会長	福 島 正 継
委 員	(公社)日本建築家協会九州支部熊本地域会代表幹事	原 田 展 幸
委 員	(一財)熊本県建築住宅センター理事長	内 山 督
委 員	熊本県土木部建築住宅局長	清 水 照 親
監 事	(公社)熊本県建築士会会長	中 尾 憲 征

協力・後援団体

- 協 力

熊本県文化協会、(公社)熊本県観光連盟、熊本大学、熊本県立大学、(一社)日本建築学会九州支部熊本支所、(一社)熊本県建設業協会、(一社)熊本県建築協会、(一社)熊本県建築士事務所協会、(公社)熊本県建築士会、(公社)日本建築家協会九州支部熊本地域会、(一財)熊本県建築住宅センター、熊本市現代美術館[熊本市・(公財)熊本市美術文化振興財団]
- 後 援

熊本日日新聞社、西日本建設新聞社、NHK熊本放送局、熊本放送、テレビ熊本、くまもと県民テレビ、熊本朝日放送、エフエム熊本、FM791

くまもとアートポリス年表

2013 平成25年度

2013	6	16	熊本県庁でアートポリス25周年記念 くまもとアートポリスシンポジウム「これからのアートポリス 自然に開き、人と和す」を開催
	7	26	球磨工業高校管理棟完成見学会
	8	20	高野病院新築設計業務公募型プロポーザル公開審査(二次審査)／ホテル熊本テルサ
	9	22	天草市本庁舎設計業務公募型プロポーザル公開審査(二次審査)／天草市民ホール
2014		23	「天草アーバ建築塾」閉塾式／有明町リップルランド公園
	2	18	和水町立三加和小中学校完成見学会を開催
		23	くまもとアートポリス見学バスツアー
	3	14	第19回くまもとアートポリス推進賞表彰式／熊本県庁

2013年度末 参加プロジェクト数90件、竣工81件、構想等完了6件、設計中・設計完了3件
竣工プロジェクト 熊本県立球磨工業高等学校管理棟 和水町立三加和小中学校
新規プロジェクト 天草市本庁舎 高野病院

2014 平成26年度

2014	9	28	アートポリスバスツアー
	11	29	アジア国際コンペティション公開審査／熊本県庁
		29	アジア国際シンポジウム／熊本県庁
		30	アジア国際シンポジウム見学ツアー
2015	2	11	くまもとアートポリス推進賞20回記念シンポジウム／熊本県庁
		11	第20回くまもとアートポリス推進賞表彰式／熊本県庁
		19	2003年から12年間にわたって42か国72都市で開催された国際交流基金主催の「くまもとアートポリス 海外巡回展」が終了／最終開催地は日本・サウジアラビア外交関係樹立60周年記念イベント
	3	16	第3回国連防災世界会議パブリックフォーラムで「みんなの家」やアートポリスのシンポジウムやパネル展示、見学ツアーが開催／せんだいメディアテークほか、主催:仙台市宮城野区役所
		22	こども建築塾／清和文楽呂

2014年度末 参加プロジェクト数91件、竣工81件、構想等完了7件、設計中・設計完了3件
新規プロジェクト 愛・ライフ内牧「みんなの家」
※天草市本庁舎の事業中止を発表(2014.9)

2015 平成27年度

2015	5	7	2012年に完成した「阿蘇みんなの家」2棟の移設を発表
		16	くまもとアートポリスが紹介された映画「だれも知らない建築のはなし」上映開始／熊本は電気館で上映(7/11~7/24)
	8	23	こども建築塾／熊本県庁
		26	熊本県総合防災航空センター指名プロポーザル公開審査／熊本県立大学
2016	9	30	阿蘇みんなの家が阿蘇市古城地区の公民館として移設完成
	11	29	アートポリス見学ツアー
	12	16	第21回くまもとアートポリス推進賞表彰式
	1	9	八代市立博物館で第6回けんちく寿プロジェクトが開催／主催:けんちく寿プロジェクト実行委員会
	2	1	アートポリスシンポジウム「ホスピタリティと建築—これからの病院をみんなで語り合う—」くまもと県民交流館パレア

2015年度末 参加プロジェクト数92件、竣工81件、構想等完了7件、工事中1件、設計中・設計完了3件
新規プロジェクト 熊本県総合防災航空センター

2016 平成28年度

2016	4	14	熊本地震前震(午後9時26分)
		16	同本震(午前1時25分)
	5	18	みんなの家(規格型)工事着手
	6	17	みんなの家第1号竣工
2017	11	2	高野病院現場見学会
	1	27	日本財団わがまち基金を活用して小規模仮設団地に「みんなの家」を整備することを発表
	2	15	アートポリスが災害公営住宅整備に関与していくことを発表
		17	公費で建設した「みんなの家」84棟が全て完成
	3	1	展覧会『3.11→4.14~16アート・建築・デザインでつながる東北⇄熊本』開幕／熊本市現代美術館 4/30まで
		9	シンポジウム「仮設を超えて ~災害公営住宅とみんなの家~」／熊本市青年会館

2016年度末 参加プロジェクト数106件、竣工90件、構想等完了7件、工事中2件、設計中・設計完了7件
竣工プロジェクト 阿蘇内牧温泉みんなの家 甲佐町白旗のみんなの家(集会所) 南阿蘇村陽ノ丘のみんなの家(集会所) 西原村小森第2のみんなの家(集会所) 西原村小森第3のみんなの家(集会所) 西原村小森第4のみんなの家(集会所) 益城町木山のみんなの家(集会所A) 益城町小池島田のみんなの家(集会所) 益城町テクノのみんなの家(集会所B2)
新規プロジェクト 上記みんなの家8件 美里町くすのき平・御船町玉虫・同町甘木のみんなの家 宇城市御領・同市曲野長谷川のみんなの家 熊本市さんさん2丁目・阿蘇市内牧のみんなの家 宇土市宮境目災害公営住宅 宇土市境目第2・同市境目第3のみんなの家 甲佐町災害公営住宅(乙女地区・白旗地区)

2017 平成29年度

2017	4	17	新浜みんなの家移設開館／宮城県仙台市
	7	3	甲佐町住まいの復興拠点施設公募型プロポーザル公開審査(二次審査)／甲佐町役場
		16	大腸肛門病センター高野病院完成見学会
	8	8	東京で「みんなの家展」開催／建築倉庫ミュージアム 主催:HOME-FOR-ALL、建築倉庫ミュージアム 9/30まで
2018		30	日本財団わがまち基金を活用して被災した公民館をみんなの家として整備することを発表
	9	2	【建築展】東京シンポジウム／寺田倉庫(東京都品川区)
	11	5	熊本県総合防災航空センター完成見学会
		17	【建築展】みんなの家 の 展覧会開会／熊本市現代美術館、1/8まで
2019		26	【建築展】仮設団地リポートツアー
	12	2	【建築展】展覧会オープニングトークイベント／熊本市現代美術館
		10	【建築展】熊本シンポジウム、第22回くまもとアートポリス推進賞表彰式／熊本県庁
		16	【建築展】こども建築塾／熊本市現代美術館

2017年度末(2018年2月現在) プロジェクト数111件、竣工96件、構想等完了7件、工事中5件、設計中・設計完了4件
竣工プロジェクト 大腸肛門病センター高野病院 熊本県総合防災航空センター 美里町くすのき平・御船町玉虫・同町甘木のみんなの家 宇城市御領・同市曲野長谷川のみんなの家 熊本市さんさん2丁目・阿蘇市内牧のみんなの家 宇土市境目第2・同市境目第3のみんなの家
新規プロジェクト 甲佐町住まいの復興拠点施設 宇土市新松原・室第二のみんなの家 宇城市豊野響原災害公営住宅 大津町新小屋・同町上揚・同町高尾野・嘉島町上六嘉・同町北甘木のみんなの家 南阿蘇村立野駅・甲佐町麻生原・西原村大切畑・同村風当・同村下小森のみんなの家

くまもとアートポリス 建 築 展 2017
「一緒に考え、一緒につくる」
～熊本地震からのすまいの再建～
Exhibition of Architecture KUMAMOTO ARTPOLIS 2017

総 合 記 録

2018年3月発行

発行：くまもとアートポリス建築展2017実行委員会
事務局 熊本県建築課内
〒862-8570
熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
TEL 096-333-2537

編集・デザイン：株式会社マインド

くまもとアートポリスに関することはHP・SNS等で発信しています。

 ホームページ  フェイスブック  ツイッター  インスタグラム

